

[illegible]

宮崎県神道青年会

婦人は恥ぢ入る様な様子で「神酒を一杯いたゞけませんか」と申します。

宮崎県神道青年会

宮崎県神道青年会
<http://m-shinsei.jp/>

私共の胸には熱いものがこみあげ目頭にあつくなるのをどうすることも出来ませんでした。

宮崎神宮旧社報「美あかし」昭和十七年九月一日発行より

開戦の詔書

米国及英国ニ対スル宣戦ノ件

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐ムル
大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有
朕ニ示ス
朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕ヲ陸
海將兵ハ全力ヲ奮テ交戦ニ從事シ朕力百
條有司ハ勤精職務ヲ奉行シ朕力原庶ハ各、
其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ舉ゲテ
征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコト
ヲ期セヨ
抑、東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ
寄與スルハ丕願ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ
作述セル遺教ニシテ朕力拳々措カサル所而
シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ
樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要
義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩
國ト齟齬ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモ、
アリ豈朕力志ナラムヤ中華民國政府暨各
帝國ノ莫意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東
亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執
ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸而、
内閣
民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼
ヲ結ビ相提攜スルニ至レモ重慶ノ殘存ナル政
權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尚未タ橋相
關クヲ悞メヌ米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シ
テ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名匿レテ
東洋割覇ノ非望ヲ逞ウセムトス刺ヘ興國ヲ誘
ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰
シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラヌ妨害ヲ興
ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大
ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和、
内閣
裡ニ回復セシムトシ隱忍久シキヲ痛リタルモ彼ハ
毫モ交譲ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遠
延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ
脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシムトス斯ノ
如クニシテ推移セハカ東亞安定ニ關スル帝國
積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦
正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今
ヤ自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ
破碎スルノ外ナキナリ
皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有朕ノ

忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ
速ニ禍根ヲ剪除シテ東亞永遠ノ平和ヲ
確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ
期ス
昭和十六年十二月八日
内閣
東條英機
板垣退三
堀内正人
鈴木貫太郎
小泉純一郎
廣田弘毅
近衛文相
松岡洋右
寺島健一
大藏大臣 賀屋興宣
商工大臣 河野廣一
鐵道大臣 田中嘉吉

大藏大臣 賀屋興宣
商工大臣 河野廣一
鐵道大臣 田中嘉吉

明治天皇御製

よもの海みなはらからと思う世になど波風のたちさわぐらむ

昭和十六年九月六日、対米英蘭戦の開始を決定する御前会議にて、昭和天皇は右の御製を二度お詠みになられました。



宮崎縣護國神社「昭和三十八年例大祭」

目次

◆一	発刊趣意書	1
◆二	神武天皇論 宮崎神宮史	2
◆三	宮崎県内護國神社	8
◆四	宮崎県内慰霊碑等	18
	●宮崎市	18
	●東諸県郡	26
	●延岡市	27
	●日向市	34
	●東臼杵郡	36
	●西臼杵郡	38
	●西都市	41
	●児湯郡	44
	●都城市	46
	●北諸県郡	53
	●小林市	53
	●えびの市	57
	●西諸県郡	58
◆五	県内護國神社、慰霊碑巡拝	66
◆六	ひむかいの塔	68
◆七	全国の護國神社	70
	●護國神社とは	70
	●靖國神社	72
	●全国指定護國神社	74
◆八	海外慰霊祭	100
	●台湾共和国戦没者慰霊祭	102
◆九	宮崎県神道青年会とは	105
	●会員名簿	106
◆十	協賛者一覧	108
◆十一	あとがき	109

宮崎県内の護國神社、慰霊碑等は平成二十七年に各会員が現地にて撮影、調査を行いました。本誌に掲載されていない箇所もあるかと思いますが、ご容赦いただきますようお願い致します。

発刊趣意書

昭和三十年三月十一日の宮崎神宮日誌を紐解くと、次のよう書かれています。
昭和三十年三月十一日 金曜日 晴れ

一、護國神社鎮座奉祝祭 午前十時宮司以下奉仕（齋服） 伶人（笛、箏、二管立、笙、鞆鼓、太鼓）七人外二琴縣神社庁支部長九名参列（齋服）奉賛会総裁田中縣知事、奉賛会長日高県議会議長、宮崎縣遺族会長外市町村関係者、遺族志萬伍阡名参列 社前廣場を埋む、歡喜に沸く

一、祭典終了後、宮司、知事、縣議長、縣遺族会長の挨拶あり、一同隨喜の涙をながす

一、神職退下後遺族に本殿石階下まで参入参拝を許す、遺族の感激一入なり

一、午後西神苑にて、相撲、剣道、弓道の奉納試合あり、風もなく照りつけもせず暖き春日和に恵まれて、神苑は午後四時頃まで賑ふ

参列者一五、〇〇〇名とあることから、県民が如何にこの日を待ち望んでいたか、護國神社の創建が県民の切なる願ひであったことが伺えます。

また、宮崎縣護國神社社務所には、昭和三十八年三月十日（現在は四月十日）例大祭の写真が飾ってあります。巫女が「みたま和め」の舞を奉奏しており、その後ろにはご遺族をはじめとした参列者が、境内を埋めつくしています。全員が起立のままで参列であり、その多さは現在では想像もつかないものでもあります。

しかしながら、現在では遺族の高齢化とともに参拝者は年々減少の一途を辿り、さらには各地に点在する忠霊塔、慰霊碑についての祭典が滞っているとの話も耳にします。

大東亜戦争終結七十年の節目にあたり、宮崎県神道青年会といたしまして靖國神社をはじめ全国の指定護國神社、宮崎県内の慰霊碑を一冊の本に纏め発刊致したく存じます。期するところは、現在の日本の礎を築かれたご英霊の顕彰はもちろんのことながら、神職の本分である「祭り」を遺族の方々と共に、絶やすことなく、恙なく斎行していくための一助にならうものに他なりません。

平成二十七年四月二十日

宮崎県神道青年会

大東亜戦争中の状況は様々な資料から伺い知ることができるが、その中で神社、祭、神職の状況を知ることにはあまりなかった。しかしながら、幸いにも宮崎神宮発行の書物に、その事が詳細に記されていたので、ここに転載させていただく。



写真提供 宮崎神宮

「神武天皇論 宮崎神宮史」

昭和五十九年十月二十六日 第一版発行
第四篇 怒濤の中を
宮崎神宮名誉宮司 甲斐武教書

昭和十六年から十九年にいたる時代は、まさに国運を賭しての戦争の時代であった。昭和十五年の二千六百年祭のあたりから、戦争の拡大と長期化は国民生活を脅し食糧難からくる配給制が実施され、日本の戦時下における統制経済化は急速にすすめられ、日本中に軍靴の足音が日に日に高まってくるやうな時代となってきた。昭和十五年、あらゆるものがつぎつぎに配給制に移行、八月からはまづ東京で、そして次第に各地で食堂や料理店での米飯の提供が禁止され、国民精神総動員本部が発足した。「ぜいたくは敵だ」などのスローガンが巷にあふれた。八月には民政党が解党をしたのを最後に全政党が解党となり、九月には日独伊三国同盟がベルリンで調印され、十月には大政翼賛会が発会した。

このやうなあとにつづいた昭和十六年、宮崎神宮にも、戦時下のきびしい雰囲気がいよいよつよまってくる。二月一日には市が主催する「皇軍武運長久祈願祭」がおこなはれたり、四月三日の恒例の「神武天皇祭」には、在郷軍人一千余人が市中行進をして宮崎神宮に参拝、祈願祭ののち萬歳三唱をして解散する。また、青木宮崎市長以下の市役所全吏員と国民学校全職員が宮崎神宮に参拝したのち八紘の基柱前へ隊伍を組んで行進、東方遙拝をおこなってゐる。祭典もこの時代の色彩をよく反映、志願兵入営奉告祭とか勤労報国隊結成奉告祭とか、国防のための市民組織の結団奉告祭などが相ついで御社前でおこなはれるやうになった。十一月二十日には攝社である皇宮神社の高台に「皇軍発祥の地」の記念碑建立の着工式がおこなはれた。

そうやうな中で、日本は九月北部仏印（北ベトナム）への武力進駐を強行、必然的に米英の反撥となり、石油と鉄屑の日本への輸出を全面的に禁示する措置に出

た。戦略物資を米英陣営から仰がねばならぬ日本の悲劇であった。日本は大東亜戦争へ突入せざるを得ない状況へと追ひ込まれていった。そして十二月八日、日本時間午前二時、日本軍マレー半島に上陸開始。同じ三時には、ハワイ真珠湾攻撃開始。米英両国に対しての宣戦の詔書が渙発されていよいよ大東亜戦争に突入した。又同日午前五時、「帝国陸海軍は今八日未明、西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」とのラヂオニュースは忽ちにして全国を興奮のルツボと化した。全国の各神社で一斉に戦勝祈願祭がおこなはれたが宮崎神宮でも、エプロン姿の国防婦人会員や学生、団体、一般市民などの参拝がひきもきらずつづいた。

真珠湾での大戦果、十二月十日の日本軍グアム占領、フィリピン北部に上陸、マレー沖でのイギリス戦艦撃沈、香港の英軍降伏と、戦況活潑のままに十六年は暮れた。宮崎ではこれまでの宮崎神宮祭祀協賛会が十二月十六日より市が強力にテコ入れして宮崎市宮崎神宮祭祀奉賛会へと拡大強化されたりもあった。

つづく昭和十七年は元旦から戦勝祈願の初詣などで御社頭はまことにぎやかだった。大政翼賛会の市内にまく「進め一億火の玉だ」、「見たか知ったかこの力」「勝って兎の緒をしめよ」などのビラがいやがうへにも戦意を昂揚した。盛大に紀元節を奉祝した直後の二月十五日にはシンガポール陥落のニュースが伝はり、全国の街で提灯行列がおこなはれるなど、熱気さめやらぬ十六日には陥落祝賀の祭典がおこなはれた。五月七日にはコレヒドール島要塞の陥落の報もつたはった。人人は戦勝に酔ひ、そして神宮へ参拝した。当時の社務日誌はどうしたことか終戦直後に紛失、いまだに発見されてゐないので、細かいことはわかりかねるが（占領軍をおそれ処分されたものと推測されてゐる）、宮崎市史や、当時の職員と思ひ出、新聞などから社頭の盛況はうかがひ知ることができ

る。しかし戦局は、十七年の夏になるとすでに逆転の気配をみせてゐた。国民には知らされてゐなかったが六月のミッドウエー海戦で日本は四空母を失ひ、八月に

はソロモン海戦でも不利な戦ひを強ひられてゐるのである。

十一月十七日、宮崎神宮では宮崎神宮の神札頒布式がおこなはれた。御神札を奉斎して銃後の護りを固めようと市内全戸に配布されたのである。総力をあげて戦争に突入した日本では、十月からはすべての生活必需品の配給が町内会、部落会、隣組を通じて行はれるやうになり国民の経済生活は日に日に苦しくなっていた。そしてすでに戦況の変化は起つてゐたのだが、それをしらない氏子たちには日本は絶対に敗けないのだとの確信がつよくその心理を支配してゐた。十二月八日、大東亜戦争一周年記念祈願祭が三万人の市民が参加して盛大におこなはれた。ちょうどこの日、ニューギニアのバサプアで日本軍が玉碎し、次いで大晦日にはガダルカナルからの撤退が大本営で決定されるなど、悲しい事態が相次いでおこつたことなどは、戦争の勝利に酔ひ痴れてゐた国民は知るよしもなかった。

昭和十八年、新しい年があけた。この年も昨年同様、市が主催しての四方拝からはじまったが、変つたことといへば、市民が皆、女性にはモンペ姿、男性は国民服にゲートルといふ戦闘スタイルに徐々に統一されていったことであつた。ジャズをはじめ米英音楽の演奏禁止、英米用語の使用禁止、金属類の回収などが進み、海軍が急拠地元民の勤労奉仕により赤江飛行場の建設工事をはじめるなど、軍事一色の毎日であつた。市内では市民の耐寒行軍がおこなはれたりもしてゐる。又、六月一日の閣議で学徒戦時動員体制確立要綱が決定され、大学予科、高等学校高等科、中学校の修業年限が一年繰上げられるなどの措置が実施され、更に十月には在学徴集延期臨時特例が公布され所謂学徒出陣となり、戦線が拡大し兵員その他が不足してゐることがうかがはれた。

戦局不利のニュースは依然、全く発表されなかったが、二月一日には日本軍がガダルカナル島撤退放棄、二日にはスターリンググラードで独軍が降伏するなど敗色がいよいよ濃くなつてきた。五月にはアッツ島も

玉碎した。多数の宮崎市民が出征した。また、報国隊員として北九州の炭坑や軍関係の兵器工場などに動員されて行く人も多かった。そのやうな中、市内下北方で宮崎県護国神社の起工式がおこなはれた。四月二十二日にかねてより提出してゐた申請が許可されて五月に地鎮祭ののち、十一月二十日におこなはれたもの。関係者多数が参列、一刻も早い工事の完成を祈つた。

明けて十九年、戦局の不利は急速に市民の間にも感ぜられるやうになつてゐた。弾丸や兵器をつくる金属が足りない、ナベ・カマまで供出してゐた市民たちは、神社の銅像や金属鳥居、鉄道のレールまでが外されて行くのを見て、本能的にそれを感じたこともあるだらう。あるいは戦争標語も、段々追ひつめられた「進め一億火の玉だ」などといった厳しいものを中心になり、「決戦料理」などといって、野草を常としようなどの運動がはじまつたりする。本土決戦などといふ言葉がささやかにはじめてゐた。

一月十五日、例年のごとく市が宮崎神宮で武運長久祈願祭をおこなつてから三日目の一月十八日、内閣は緊急国民勤労働員方策要綱を決定発表した。いよいよ全国民をあげて一億総当りの戦闘体制である。これにつぎ翌十九日には十四歳から二十五歳の未婚婦人を結集して結成された女子挺身隊を大動員して、軍需工場にさしむけることなども決められた。村でも町でも、いままでは男子が働いてゐた職場が、男子の出征によりつぎつぎに女子に替るやうな状況になつていった。

夏になると、沖縄や南西諸島から、集団疎開の子供たちが宮崎にもつぎつぎに到着するやうになる。八月には沖縄よりの疎開船が敵潜水艦により撃沈され、学童七百人を含む千五百人が死亡するといふいたましい事故などもあった。九月八日より二十八日まで、宮崎神宮では三週間連続の「戦勝祈願祭」をとりおこなつた。市や県、軍関係者なども参列しての盛大なまつりであったが、一年前の祈願祭にくらべると、悲壮感が漂ふのも、止むを得ないところであつた。

ろにお移しし、境内の空襲に対する対応策を講ずるとともに、御本殿後方に地下の御神体奉安所をつくり、祭典はあくまで従来通りつづけようといふものであつた。計画はまづ、御料品の疎開計画から着手、結局疎開先は当時、小職が奉仕してゐた児湯郡西米良村の児原稻荷神社とすることで決定。再三の打合せの結果、まづその第一回目の移動が四月三十日午前七時、菅原主典同行のもと貨物自動車で神社を出発疎開した。第二回目は七月六日午前五時、前回同様の手続をもつておこなはれた。

ところで御神体御動座用の防空壕建設は御本殿真裏に定められ、工事には軍が協力することとなつた。いかなる非常時とはいへ、御神体を地下にお移しすることとはきはめて畏れ多いことである。しかし戦局を考へるとき、万一の場合に僅か数名の職員で御神体を守りしうるか否か。考へた末の決断であつた。工事は五月十日、御神座の地鎮祭を斎行後急ピツチでおこなはれ、十六日には竣工した。この地下奉安所の建設工事はせめて六月十四日の御衣祭（おんぎさい）を、御本殿へ鎮まります御神体の御前において斎行したいとの願ひもこめられた日程であつた。ところがこの日は朝から敵機の相つぐ来襲で、つひに祭典の奉仕が終日不可能となるといふ厳しい状況となり、祭典は後日、職員のみでささやかにおこなはれたが、そのやうなきびしい状況の中での止むを得ぬ、また緊迫した御動座であつた。

冠敵撃攘祈願祭まで空襲で

かくして御神体の御動座も終り、いかなる事態がおこらうとも、それに対処していかうとの決意を固めた神社では五月十九日より二十五日までの一週間、聖旨奉戴敵撃攘祈願祭を毎朝実施することにした。毎朝午前五時より実施したのだが、この祭典さへ、空襲のため、思ふ通りには執行ができないありさま。満願日の二十七日には、つひに米機来襲のために全員防空壕

秋になると、市役所に「防空課」が新設され（十一月二十一日付）、早速市内百三十二ヶ所に空襲用の「公共防空壕」の建設工事がはじまつた。東京がB29で焼野が原と化し、北九州もやられた、このやうなニュースが相次いで流れてくるやうになつた。早くも一部の宮崎市民は、市内を避けて、山間の奥地に移住を開始したりし始めた。宮崎神宮も、空襲に備へて迷彩をほどこし、職員たちも、防空演習などをおこなつたりしてゐた。遠くの方ではじまつた戦も、いつか身近のものになりつつあつた。「二億玉碎」などの言葉が使はれるやうになつてきた。

なほ昭和十六年から十九年までの皇族参拝はつぎの通りであつた。

昭和十六年	七月二十二日	久邇宮殿下御参拝
昭和十七年	九月五日	三笠宮殿下御参拝、後皇宮屋、八紘台、西都原を御巡視
昭和十八年	二月十七日	東久邇宮稔彦殿下御参拝
	六月二十八日	久邇宮多嘉王妃静子殿下御参拝
昭和十九年	三月十七日	朝香宮孚彦王殿下御参拝
	三月三十一日	朝香宮鳩彦王殿下御参拝

昭和二十年、戦局いよいよ悪化

戦局はますます深刻化していき、それにつれて宮崎神宮にも苦難の時機がはじまつてきた。昭和二十年に入ると二月には米軍が硫黄島に上陸を開始し、三月には同島の日本守備隊が玉碎する。さらに六月には沖縄本土が猛烈な米軍の攻撃により占領され、八月には広島・長崎に原子爆弾がおとされて、やがて八月十五日、日本は陛下の御聖断により終戦を迎へるといふ、まさに日本歴史上はじめてともいふべき大転換、変転の時を迎へる。その二十年の正月には、それでもまだ例年

退避、祭典は八時まで遅れ、供進使として谷口明三県知事が参列しておこなはれたこの祭典も、参列者一同、必ずしも戦局の将来についての明るい自信を持つにはいたらなかつたやうだつた。

護国神社建設計画の中止

かうした中、戦局の深刻化にともなつて、様々の激動の波が神社にも押しよせてきた。まづ五月三十一日には、かねてより進められてゐた宮崎県護国神社建設の工事が、「戦局重大化のため」との理由で中止された。護国神社建設の工事は、県民の一致した支援のもとに進められただけに、中止の決定は県民にとつても大きなショックであつた。物理的に考へても、止むを得ない措置であつた。

空襲の被害も宮崎市内のみならず、直接神宮にもおよんで来た。七月二十一日、沖縄基地から来襲したと思はれるP47、グラマンF6Fを主力とする小型機百機の空襲部隊が午前七時四十五分ごろから九時すぎまで、数回にわたつて宮崎市その他主要都市を攻撃した。これは主としてロケット弾の投下と機銃掃射による空襲であつたが、宮崎市内に多数の死傷者を出したほか神宮附属建物などにも被弾をうけた。社務日誌はこの日の模様を次のやうに記してゐる。

午前七時三十分警報発令間モナク空襲、鹿児島方面ヨリ侵入セル小型機八十余機来襲、赤江ヲ始メ市内ニ銃爆撃、西神苑脇ノ民家三軒ニ直撃弾ヲ蒙ル、本殿周囲ニモ爆弾破片十五、六ヶ落下、社務所、旧社務所、徴古館、官舎のガラス一部爆風ノ為破壊、電話線切断ス、シカシ御安泰ナリ、職員一同無事、午後一時再度空襲投弾ナシ

（参拝人員九七名）

大空襲、県庁の避難

の如く期待をもつて新しき年を迎へたのだが、米軍勢力が徐々に日本に近接してきてゐるとの事実が当地にも三月には示され、以後宮崎は終戦まで、敵制空権下の爆撃といふ混乱の時期を迎へることになる。

三月十八日の空襲

宮崎県人にとつて大変な驚きのキツカケとなつたのは三月十八日であつた。この日、米機動部隊艦載機（グラマン）のペー四〇〇機が突然南九州に来襲、そのうち一部は宮崎県を目標地点に定め、赤江飛行場（現在の宮崎空港）、新田原陸軍飛行場などの軍事施設のほか富島町（日向市）、都城市、油津町（日南市）などが空襲をうけた。これが宮崎県がうけたはじめての空襲だったが、幸にして宮崎市および宮崎神宮には被害はなかつた。しかしこの日、神宮でもこの空襲に備へて、全職員が各部署において終日待機して万一に備へた。

この三月の空襲のうち、米軍機による空襲は日に日に頻繁に、また激しくなつていった。宮崎神宮での祭典奉仕は、このやうな中でも何としてでも規則通りに奉仕しつづけたいとし全員一致の努力をしたのだが、祭儀そのものは励行されたものの、時間などは空襲などにより必ずしも予定通りには行かず、大幅に祭典開始時刻が遅れる事態も相次ぐやうになつてきた。宮崎市にも、度々の空襲がはじまるやうな状態の中で、県内には近々米軍が宮崎海岸からいよいよ本土上陸作戦を決行するらしいとの噂がひろまり、県民の驚きはいよいよ深まつた。軍関係でも海岸警備体制を固める気配に、緊張感はいよいよたかまり、最後の事態に宮崎神宮としてどう対処するかが大きな問題として討議されるやうになつた。

御料品の避難・御神体の動座

宮崎神宮の対策はとりあへず、御料品を安全なところ

七月、八月となると、もう誰もが空を見上げてただだ、分担の区域の空襲からの消火に専念せざるを得ないやうな状況になつてゐた。八月十一日、十二日の宮崎を襲つた波状空襲はとくにひどく、市内の各地での相つぐ火災の発生に、はじめは手をつくして防火、消火に懸命であつた市民たちも、疲れ果てて、もう果然と燃えゆく市街を眺めるだけといふやうな有様。家も街路樹も電柱も焼けつく太陽の下で空を焦がす勢ひで燃えていった。市街地は一夜にして灰燼に歸した。東西は宮崎駅から大工町まで、南北は橋通りから江平まで建物はすべて焼け落ち、一望のもとに見わたせた。

宮崎神宮は森に囲まれた区域であり、類焼はまぬがれた。十二日の日には焼夷弾による爆弾は神宮に対してもおこなはれたのだが、いづれも初期段階で消しとめた。神宮にはこの大火災で、急拠、宮崎県庁が引越してくることなども決められ、十二日、ただちに引越しがはじまるなど、あはただししい動きもあつた。消火と引越し作業と日常の御奉仕とで、全員が疲労の極にたつてゐた。しかし、市内では多数の死傷者が出てゐるのに、神宮の奉仕者たちは落下する焼夷弾や高射砲の破片、機銃掃射や火災など、多くの災禍の中にありながら死傷者の被害はなかつた。見廻す宮崎市内の環境は驚天動地のvari様であつたが、職員の志気は高かつた。八月十二日の模様は、社務日誌にはつぎのやうに記されてゐる。

境内西神苑側東神苑神畑外側ニ火災発生、特ニ東神苑内ヨリ油脂散布ニ依ル火災ニシテ、土壘ヨリ林藪ニ延焼シタル菅原主典初期防火ニ依リ消火シ事ナキヲ得タリ、西神苑ノ方ハ土壘ニテ延焼防ガル

午後二時頃大方諸方鎮火セル頃、不意ニ六機編隊来襲銃撃、一部焼撃ヲ被リ、再度火災発生ヲ認ム、其後敵機ノ来襲ナク夜トナル、暁方一機通過セルノミデ終夜無事

宮崎市内の大火により宮崎県庁の疎開の件が十二日には決まり、翌十三日には早速、県庁の各部署が（警察部のみを残して）宮崎神宮に引越して来た。宮崎神宮の旧社務所、徴古館などが片づけられて県庁庁舎と

して使用されることになった。このやうな作業が進む中にも爆撃はつづいてをり、前日に燃え上った柵畑に再び焼夷弾が落ち、隣家の人々の協力により消火するなどといふ不安な事態がつづいてゐた。

つひに終戦の御詔勅

八月、つひに御前会議でポツダム宣言の受諾の決定がなされ、十五日午前 天皇陛下の「終戦の大詔」が放送された。しかし宮崎神宮は停電のため、この放送を聞いた神職はあなかった。この陛下のお言葉が出されたことは、県の関係者より伝へられ、一同恐懼、暗涙にむせんだったのであったが、当日の日誌にはつぎのやうに記されてゐる。

昭和二十年八月十五日正午
有史来未曾有ノ大詔玉音放送アリ

一億銘記スベシ、本日正午ラヂオヲ通ジ醜敵米英蘇文聯合國に対シ、天皇御聖断ニ依リ講和申入ラレタル旨ノ詔書並ニ鈴木総理大臣ノ特別放送アリ、停電ノ為直接聴取出来ザルモ、午後三時、県ヨリ真ナルコトヲ内報サレ、一同血涙ヲ吞ム

即刻出勤者全員集合、宮司殿ヨリ神社人トシテ将ニ冷静寡黙ヲ守リ、局面ノ推移ヲ凝視シ、軽挙妄動ヲ慎シムベキコトヲ訓示サル

(参拝人員九二名)

日誌にはそれだけしか書かれてゐない。しかし当時在勤してゐた菅原、渡部両君の語るところによると、片岡宮司は県より終戦の事実を知らされると全職員を集め「自分らが神職であることを自覚せよ、また、今後どのやうにして大神さまの御心に添ひ奉るかを各々充分に考へてその結論を報告せよ」と命じたといふ。戦局の不利であることは毎日の空襲により存分に知つてゐた。しかし、まさか本土決戦を経ずして終戦を迎えるとは、思ひもよらぬことであつた。

戦ひ済んで

空襲はなくなつた。二日後の八月十七日には疎開してきたばかりの県庁の連中も、ふたたび旧庁舎へと戻つていった。神宮の境内はひときは淋しくなつた。神宮では八月二十六日の午前五時より、特別壕の飯座から御神体を御本殿にお移しする遷座の儀をおこなつた。また空襲のつづく間中、社殿を敵機から偽装するためにつけておいた迷彩をはがし、参道をかくすために並べておいた偽装樹木もとりはらつた。とにかくにも戦さは終つた。これから祖国がどのやうになつていくのか方途もしれない。そしてまた、今後、宮崎神宮は一体どんなことになるのだらうかと案じられた。

迷彩を外した二十六日、夜になると当地には台風が上陸し、猛烈な風雨が宮崎神宮をおそつた。台風は翌日まで、宮崎地方を暴風雨圏内にまきこんだが、神苑では樹木の倒木が相次ぎ、社殿にもかなりの損害が出た。中でも授与所の前の大杉(樹齢数百年)が真つ二つに折れ参拝者休憩所、第二授与所が下敷になり倒壊したのは大きな被害であつた。このほか、第二倉庫裏の大杉、松も相次いで倒れ、水道タンクや物置、流鏑馬道場などが倒壊した。境内いたるところが倒木で通行不能となり、身動き出来ぬありさまとなつた。神武天皇様がお怒りになつてをられるのか。職員たちはおそれかしこみながら懸命に復旧の作業にあたつた。ただこの台風の来たのは八月のことであり、宮崎神宮の台風復旧作業には軍の方々が全面的に協力してくれた。一応の復旧作業は八月二十九日に大半が終了したが、彼らはそのごも数日、奉仕に来てくれた。

暴風の中の終戦奉告祭

九月二日にはミズリー号上で降伏文書の調印式がおこなはれ、翌三日には宮中の賢所・皇靈殿・神殿において戦争終結御親告の儀がとりおこなはれた。宮崎神宮でも供進使を迎へて九月十七日、午前十時より終戦



終戦七十年当日の宮崎神宮

勅使長船知事参向の上 畏し宣戦奉告の盛祭 十二月十七日壯嚴に執行さる

未曾有の大東亞戦争に際會し神明の厚き加護を祈念あらせらるゝ思召しを以て、畏き邊りにおかせられては、官國弊社に勅使を御差遣遊ばされ、夫々嚴肅なる臨時奉幣祭を執行せしめられたが、宮崎神宮では去る、十二月十七日午前十時より勅使長船宮崎縣知事参向の上嚴肅盛大なる大祭を執り行つた。この日、初冬の陽光は燦として神都を照し紺碧の空一點の雲もなく戸毎にへんばんと翻へる日の丸の國旗を縫うて参列する七萬市民の代表等は禮服に威嚴を正し陸續と聖地宮崎神宮に参集する。各官公署代表者越川地方裁判所長、青山檢事正、吉田高農校長、青木市長、日高市會議長、西澤助役、有馬縣會副議長、日高宮中校長、軍部より平野聯隊區司令官、谷村少將等の各代表が参道、祓所鳥居前に堵列、勅使を御待申し上げれば一般参列者、各學校、祖國振興隊、各官公署長、市會議員、商工會議所議員、神宮評議員、在郷軍人分會、國婦、愛婦、市民代表各區長等無慮二千名が神宮大前廣場に参列壯嚴極まりなき宣戦奉告祭の時刻を待つ。これより先き勅使長船知事は午前九時四十五分衣冠束帶に威儀を正し甲斐秘書課長、杉田祭務官補の隨員を從へ、縣廳の正廳を出發、一般市民治道に堵列するなかを同九時五十分宮崎神宮第一鳥居前に到着、手水、修祓を受け、神職先導で御幣物を奉じて所定の勅使座に参進、奏樂の音に臨時奉幣祭の式典に移る。

式は河合宮司御屏を開き畢りて側に候し、禰宜以下御饌を獻じ、次いで河合宮司は恭々しく祝詞を奏上し、勅使隨員御幣物を宮司に奉れば河合宮司御幣物を神前に奉奠す、次いで長船勅使は神前に進み、朗々と御祭文を奏し、親しく宣戦のことを御奉告聖戰完遂に神明の加護を深く祈念すれば、宮司御祭文を受けて之を神前に納め勅使に反命し更に勅使は神職の奉る玉串を恭くし神前に奉奠して拜禮、次いで勅使隨員拜禮、宮司、禰宜以下拜禮を終り、青木市長、平野聯隊區司令官、参列員代表有馬縣會副議長が恭々しく玉串を奉つて拜禮、神饌を撤し宮司御屏を閉ぢ畢りて本座に復すれば勅使は参向と同様隨員を從へて退下、社務所にて直會の儀があり同十一時三十分發歸還せられた尚参列者一同は青木市長の發聲で萬歳を三唱し、こゝに未曾有の國難突破に神明の加護を祈念する宣戦奉告祭並に臨時奉幣祭を滞りなく終了した。

縣社以下神社に於ても 宣戦奉告の臨時大祭 夫々盛大に執り行はる

今次の宣戦奉告祭は全國各神社に於ても臨時大祭として執り行はれたが、縣下の縣社には左記の通り縣より、郷社には夫々市町村より幣帛供進使の参向ありて盛大に祭典が嚴修された。

十二月二十日	午前十二時	縣社	榎原神社
同 二十一日	午前 十時	同	安賀多神社
同 同	午後 一時	同	今山八幡神社
同 同	午前 十時	同	江田神社
同 二十二日	午前 十時	同	都萬神社

同 同	午後 一時	同	愛宕神社
同 同	午前十一時	同	母智丘神社
同 同	午後 一時	同	神社神社
同 同	午前 十時	同	粟野神社
同 同	午前十一時	同	東霧島神社
同 同	午前 十時	同	生目神社
同 同	午前十一時	同	霧島東神社
同 二十二日	午前十一時	同	霧島岑神社
同 二十三日	午前十一時	同	白鳥神社
同 同	午前十一時	同	根觸神社

宮崎神宮社報「美あかし」昭和十七年一月一日發行より

大詔奉戴日祝詞案

毎月八日を大詔奉戴日と決定に付同日神前に奏上する祝詞案を大日本神祇會より送附されたので茲に掲載することとした。

掛まくも畏き某神社の大前に宮司(社司社掌)位勳功爵氏名恐み恐み白さく
天皇命は遠天皇の御代御代受繼ぎ傳來坐せる聖謨の隨に萬邦互に和睦に相睦ひ相親しみて
諸共に立榮え特に東亞安く穩に有經む事をし遠く深く念ほし行はすを頑冥なる
米國及英國は畏き大御心を覺奉らず年遍く大御業を妨奉り終には大御國の礎をも
危くし奉らむと爲るに依りて往にし昭和十六年十二月八日遂に此の兩國に對ひて
戰を宣給ひぬ是を以ちて大御軍は逸速く海に陸に空に健び進みて要害の地と恃みし
敵の根據を擊破き威勢を誇りし其の艦艇を擊沈め射向ふ國國島島を次次に討罰め
撥平けて有るは大神等の廣き厚き恩賴に依る事とも畏み謝奉りて月毎の例と
今日の八日の生日の足日に大前に御食御酒種種の物を捧奉りて稱辭竟奉らくを平けく
安けく聞食して今も往先も大御國舉りて畏き聖旨を戴奉り縦ひ戰は如何に長く
久しく内續くとも彌彌益益力を協せ心を一に爲て苦しきに堪へ乏しきを凌ぎ
負持つ業業に勤み仕奉らしめ給ひ別きても大命の隨に英雄しく勇しく伊往戰へる
大御軍人の上を夜の守日の守に守給ひ恵給ひて米國及英國を全く摧伏せ敵ふ國の
悉速に降服はしめ給ひ天皇命の大御稜威を彌廣に伊照輝かしめ給へと
恐み恐みも稱辭竟奉らくと白す

宮崎神宮社報「美あかし」昭和十七年三月一日發行より

宮崎県内の 護国神社



宮崎縣護國神社

鎮座地	宮崎市神宮二丁目四十三
御祭神	四一、八七四柱（平成二十八年三月現在） 正殿 四一、八二〇柱 明治戊辰の役以降国家公共に尽くした人の神靈
相殿	五十四柱 公務殉職者の神靈
創建	昭和三十年三月十日
例祭	四月十日

【社殿の造営】

全国道府県の護國神社は殆ど明治維新の際に招魂社として創立され、戦前より慰霊の祭儀が行われてた。しかし、宮崎県は当時、小藩分立の状態等の事情もあり、県内全域の神霊を祀る招魂社は創立されていなかった。そこで県としては移設のできる小さな社殿を造り、毎年祭場を設営して県下全戦死者の招魂祭を執り行っていた。

昭和十六年十二月大東亜戦争の勃発により戦死者の数が急増し、護国の英霊に対する県民の感謝と敬慕の念が次第に深まった。そこで県民の要望に応えるため、当時の知事をはじめ各界の代表者が設立者となり、宮崎県護国神社建設奉賛会が組織された。昭和十八年四月二十三日に内務大臣の許可を得て、鎮座地を宮崎市下北方の高台（現宮崎市立大宮中学校）に定め、同年五月十日に地鎮祭を斎行、建設工事に着手した。しかし、昭和二十年三月十七日には硫黄島が玉砕、ついに宮崎県下もアメリカの戦艦機の編成による空襲を受け、建設は思うように進まなかった。連日の空襲により、同年五月三十一日を以て建設工事は中止となり、ついに昭和二十年八月十五日終戦を迎えた。終戦後は神道指令により、宮崎市内では学校等の神棚を宮崎神宮に集めて消却し、また護国神社においても創建奉賛会の解散を命じられ、当時の宮崎軍民生部長官マスマン少佐の厳命により建設途中の社殿は解体、土地を手放すこととなり、建設の放棄を余儀なくされた。

しかしその後、講和条約の発効を見るに至り護国神社再建の要望が澎湃として起こり、昭和二十八年四月に宮崎県護国神社政権奉賛会を組織して、県民の浄財を募り神社の再建に着手し、現在地に昭和三十年三月竣工、同日鎮座祭を斎行し今日に至る。

【護国神社と宮崎神宮】

宮崎神宮の西の森に創建された当初は、宮崎神宮と一体の運営がなされていた。当時の宮崎神宮片岡宮司は「戦歿された人々は、宮崎神宮をはじめ、それぞれの産土神社に武運長久を祈願して出征されたのであり、その神霊をお祀りする護国神社は、県下六百余の神社を代表して宮崎神宮が宮司以下全員無報酬により護持する。大祭には県下の全神職が奉仕する精神を以て神社庁支部長も奉仕する。時代の変革あるも宮崎神宮の現存する限り護国神社の祭祀を欠かさないようにする。」との方針をもって維持運営されていた。

しかしその後、ご遺族を始め多くの県民から独立神社にふさわしい運営をとの願ひにより、昭和四十七年四月より専任の職員を置くようになった。

【例大祭】

現在では県内神職の奉仕により、毎年四月九日に前夜祭併せて合祀祭、四月十日に例大祭が斎行されているが、本来の例祭日は三月十日であった。これは昭和三十年三月十日に合祀鎮座祭が斎行されたことに由来する。しかしながら、宮崎県戦没者等慰霊奉賛会会長より、三月十日は例年定例の県議会開催中につき、慰霊奉賛会総裁（知事）、会長（県議会議長）の参列が困難であることから、例祭日変更の申し出があった。また、県下の一万余人の遺族にとっても、時期的に肌寒いため参集が困難であるという事情も考慮して、例祭日は昭和五十三年に四月十日と改められた。



昭和十八年境内配置図（宮崎縣護國神社蔵）



昭和十八年設計図（宮崎縣護國神社蔵）

ブーゲンビル戦歿者慰霊碑 （宮崎縣護國神社境内）

所 在	宮崎市神宮二丁目四十三
管 理	宮崎縣護國神社
所有者	宮崎県ブーゲンビル島生存者会
御祭神	宮崎県出身軍人軍属 三六、二三二柱 陸軍第六師団 師団司令部、歩兵第三連隊、同第一三連隊、同第四五連隊、野砲兵第六連隊、騎兵第六連隊、工兵第六連隊、輜重兵第六連隊、師団衛生隊、同第一野戦病院、同第二野戦病院、同第四野戦病院、同病馬廠 軍直轄部隊 野戦高射砲第五大隊、広島電信隊、電信三三有線中隊、独立無線六〇小隊、軍通信隊、独立混成第三八旅団 海 軍 佐鎮第二八設営隊、佐鎮第六陸戦隊
建立日	昭和四十四年八月三十日
慰霊祭	十月十日



碑 文

ブーゲンビル島は、日本からほぼ南約六千軒、赤道以南の南緯五〇七度、東経一五五度、パプアニューギニア本島から東約千軒の地点にあり、ソロモン諸島の中では最も大きく、南北二三〇軒、東西八〇軒、面積一万平方軒の細長い島で、南北に山脈が縦走し、北からバルビ山（標高九百米）、バカナ山（六百米、常時噴煙を上げている）、タロカ山（四百米）がある。大東亜戦争当時は豪州領であったが、戦後の一九七五年（昭和五〇年）パプアニューギニア本島と共に独立し州都がアラワに置かれている。気温は四季殆んど変化がなく年中盛夏の熱帯性気候で、マラリア、デング熱、赤痢、皮膚病等の疫病が多い。住民はポリネシア、ミクロネシア、メラネシア、パプアの四種族からなり、戦時中の人口は約五万人と推定され、焼畑農法による自給自足、弓矢を用いての狩猟と極めて原始的な生活を営んでいた。

ブーゲンビル島は、一九四二年（昭和一七年）から一九四五年（昭和二〇年）八月一日の終戦までの約三年にわたり郷土部隊であった第六師団を基幹とした陸海空部隊（裏面に各部隊名詳記）が後方からの輸送をたたれ、武器、弾薬をはじめ食糧の補給もなく孤立無援の状況下において、ジャングルの内の草木を食し、瘦軀に鞭打ちたたひたすに祖国の必勝を信じ、壮烈果敢な戦闘を繰返し、終戦を迎えた島であります。この間における本県出身将兵の戦没者は、約五千名に達しております。終戦の翌一九四六年（昭和二一年）の内地帰還に際しては戦没者の御遺骨は祖国と一緒に連れすることが許されず、我々は他日必ずお迎えにくることをお誓いし、断腸の思いで帰還しました。一九六六年（昭和四一年）八月一日宮崎県ブーゲンビル島生存者会（昭和五四年同戦友会と改称）を結成し、生存者一丸となって御英霊を郷土にお迎えする計画に着手しました。

一九六八年（昭和四三年）七月宮崎県を始めとして県内各市町村、各種団体、各報道機関、御遺族、その他の方々から真心のこもった御援助を頂き、ブーゲンビル島遺骨収集团（生存者五名、報道班員二名）を現地にする派遣することができました。収集团は、ブーゲンビル島とその周辺の島々において千六百体のご遺骨を収集して、同年八月二六日百万県民の待つ懐かしい故国にお連れしこの地にお鎮まりいただきました。その後数次にわたる遺骨収集が行われましたが、いまだに故国に帰ることなく南十字星の下で寂しく眠っておられる戦友の姿を思い浮かべ、万感胸に迫るものがあります。

我々は、あの悲惨な戦争を体験し、何人よりも強く世界の平和を望んでおります。

御英霊の皆様 どうぞ安らかにお鎮まり下さい。そして我が国の永遠の安泰と御遺族の皆様に限らない御加護を賜りますようお願い申し上げます。

平成四年四月吉日

宮崎県ブーゲンビル島戦友会 会長 中馬 明

鎮魂の賦

陸ゆけば草むす屍
海ゆけば水漬く玉の緒
翔りてはみ空の花と
益良夫はむだには死なず
新しき日本の榮え
民族の東亜のあけぼの
天かける雄魂は守り
豊かなる歴史を造る
この歎たたへざらめや
世の限り伝へざらめや
世の限り伝へざらめや
あゝ、猛けき日向益良夫
安らかに眠れ故郷の土に

安田尚義 作詞並書

慰霊碑

裏面
太平洋戦争における宮崎県出身軍人軍属の戦没者数は三六、二二二柱を数えたこれら戦友の歎くとしえに顕彰するため、ブーゲンビル島生存者会が発足し、ソロモン群島に遺骨収集团を派遣した一周年を記念して遺族、百万県民の真心をあつめこの碑を建立するものである。

昭和四十四年八月三十日

宮崎県ブーゲンビル島生存者会 会長 河野礼三郎

他会員一同

碑 名 宮崎県知事 黒木 博書

臺灣歩兵第一聯隊

宮崎県出身戦歿者慰霊之碑

(宮崎縣護國神社境内)

所在 宮崎市神宮二丁目四十三
管理 宮崎縣護國神社
所有者 臺灣歩兵第一聯隊宮崎県戦友会
御祭神 臺灣歩兵第一聯隊宮崎県出身戦歿者 一二三柱
建立日 昭和五十九年三月二十五日
沿革 臺灣歩兵第一聯隊宮崎県戦友会が戦友その他有志より浄財を募り、建立奉獻したものである。
慰霊碑は鹿児島縣護國神社にある臺歩慰霊碑を参考に建立された。

碑文

臺灣軍は日清戦役以来主として九州男児により編成され臺灣の守護に任ぜり。昭和十二年日支事変勃発するや臺灣歩兵第二聯隊は中支南支に進衷、昭和十六年大東亜戦争には第四十八師団の基幹として、マニラを占領、続いてスラバヤを席卷す、更にチモール島及び小スンダ列島に進出せり。昭和二十年八月終戦の詔勅下り武勲の聯隊旗を奉焼この間忠勇義烈の士数多護国の為散華せり。その英霊を祀らんと戦友相集い心をこめて慰霊之碑を建立し、永く顕彰慰霊する。

昭和五十九年三月吉日

宮崎県臺灣歩兵第一聯隊会



第三十七師団戦歿者

慰霊碑

(宮崎縣護國神社境内)

所在 宮崎市神宮二丁目四十三
管理 宮崎縣護國神社
所有者 第三十七師団戦歿者生存者会
御祭神 第三十七師団戦歿者 七、九二〇柱
建立日 平成元年十一月十一日
慰霊祭 十一月十日(護國神社にて)

碑文

昭和十二年七月七日北支蘆溝橋々畔に於ける一発の銃声により勃発した日中兩軍の戦闘は、兩國政府の事変不拡大の方針にもかかわらず、遂に戦火は中国全土に拡がり、日中兩軍は全面的戦闘状態に突入した。かゝる折柄第三十七師団は、昭和十四年三月、久留米留守第十二師団(後に熊本第六師団が留守担当となる)に於て、九州男児の精鋭を集めて編成され同年五月博多港を出帆、北支山西省運城に司令部を置き、山西省南部大黄河東北岸(晋南)地区の治安維持と警備の任に就いた。昭和十九年四月晋南を離れる迄の約五年間、中條山々脈、連枝山々脈を中心に吹きすさぶ黄塵に悩まされ、地隙に阻まれ乍ら多くの作戦討伐を行いその出動回数は三千回を遥かに超えた。一号作戦(大陸打通作戦)が開始されるや昭和十九年四月十八日未明、師団は第十二軍の尖兵師団として河南省中牟付近に於て敵前渡河作戦を敢行し、河南省の要衝を次々に攻略して京漢作戦を終り中支武昌に集結後引続いて湘桂作戦に参加し、灼熱瘴癘の地に激戦を繰り返し、湖南省宝慶、広西省桂林の堅塁を撃破し赫赫たる武勲に輝いたのである。昭和二十年一月末、支拂国境鎮南関を越えて佛印に進駐同年三月、明号作戦では、ハノイ、ランソン、ドンダン、ハジャン等堅固な敵の城塞を陥して佛印軍を更撃破すると共に、ベトナム、ラオス、カンボヂヤ三国を八十余年に亘る外国の支配から解放し印度支那三国の独立に大きく寄與した。南方戦線の激化に伴い師団はタイ、マレー方面に向つたが、

昭和二十年八月十五日はからずも終戦の大詔を拜し悲憤の涙と共にその鋒を収むることとなった。昭和十四年四月北支晋南の地に第一歩を印して以来その作戦行動は世界戦史に類を見ない一万二千料の長途に及んだ。終戦後師団主力はタイ国南部地区、一部はマレー半島、シンガポール等で連合軍の労役に服するなど苦難の日々を過したが、昭和二十一年五月頃から逐次復員した。復員後昭和四十年宮崎三七会を結成し戦歿者の慰霊顕彰に努めて来たが、この度師団創設五十周年を記念して「第三十七師団戦歿者慰霊碑並びに馬魂碑」を建立することとなり多くの戦友有志から浄財を募り見事に竣工した。茲にその竣工除幕式を挙行するにあたり、師団の来歴等を刻し戦歿者並びに陣歿軍馬の永遠の鎮魂を祈念すると共に、世会人類恒久の平和と祖国日本の発展、国民の幸福を心から念願して碑文とする。

平成元年十一月十一日

第三十七師団戦歿者慰霊碑建設委員会



広七三二〇部隊記念碑

(宮崎縣護國神社境内)

所在 宮崎市神宮二丁目四十三
管理 宮崎縣護國神社
所有者 広兵会
建立日 平成七年八月
慰霊祭 十一月十一日

碑文(碑の由来)

ここに安置されている記念碑は昭和十七年三月広七三二〇部隊が中国大陸へ赴く前約一ヶ月間当時の住吉村に駐留した事を記念したてられたものである。長く土中に埋没し人目にふれることも無かつたが、奇しくも戦後五十年の節目に当たる本年一月同村金吹山の廠舎跡地付近から出土した。広七三一〇部隊即ち第五十八師団(広兵団)独立歩兵百七大隊は都城で編成され、園田部隊長以下約一三八〇名、軍馬約二三〇頭を擁し、六師団の流れを汲む精鋭部隊であった。漢口到着後、武漢及び信陽地区警備等に従事し、十九年四月下旬大陸縦断路線打通の軍命を受け湘桂作戦に出動。不眠不休の強行軍に耐え湘陰、長沙、衡陽、全県、長蛇嶺の堅陣を突破し、更に激戦の末桂林に入城、馬面墟に駐留、治安の維持に任じ、二十年六月柳州到着旬日にして反転作戦開始、軍の殿部隊として撤退中、全県付近で終戦を迎えた。この間、約四百有余名の戦友が護国の華と散った事は、誠に痛恨の極みである。この特筆すべき部隊の発祥を証する記念碑を顕彰する為、有志協議の末戦友の眠るここ県護國神社の境内に移設するに至った。その意図するところは一に亡き戦友の霊を慰め日中永遠の平和友好を祈念する以外の何物でもない。庶幾くば在天の英霊永久に鎮まりまさんことを。

平成七年八月

記念碑碑文

昭和十七年三月八日大詔奉戴日園田部隊征途斯ノ地ニ演習ヲナシ詔書奉読式後分列式ヲ行ヒ士氣大□ニ與キガル仍テ樹□□□□□之ヲ記念ス

※□部分は損傷のため文章を判別できず



發起人(建設委員)
顧問(広会世話人代表)
代表(旧五中隊)

代表	旧大隊本部	一中隊	二中隊	三中隊	四中隊	五中隊	機関銃中隊	歩兵砲中隊
崎浜常平	白糸美保	白坂志朗	中村勝太郎	松下広信	長谷川清弥	馬渡良夫	川添忠泰	原田八郎
日高弘	中野隆一	田原勝美						

敷島隊五軍神慰霊碑

(宮崎縣護國神社境内)

所在 宮崎市神宮二丁目四十三
管理 宮崎縣護國神社
所有者 永峯軍神奉賛会
御祭神 敷島隊五軍神

隊長	一 番 機	二 番 機	三 番 機	四 番 機	五 番 機
海軍中佐	海軍少尉	海軍少尉	海軍飛行兵曹長	海軍飛行兵曹長	海軍飛行兵曹長
関 行男 命 二十三才	中野盤雄 命 十九才	谷 暢夫 命 二十才	永 峯 肇 命 十九才	大黒繁男 命 二十才	愛媛県川滝村

碑文

神風特別攻撃隊のさきがけ敷島隊は世界最初の公式人間爆弾となり昭和十九年十月二十五日国家悠久の大義に殉じ世界恒久平和の礎となった敷島隊四番機の永峯肇飛行兵長は大正十四年四月一日宮崎郡住吉村(現宮崎市)永峯万作・ステの長男に生れ十九才で特攻戦死され海軍飛行兵曹長に特進功五級金鷄勲章・勲七等青色桐葉章を受け感状及び短刀一振を授かり軍神の稱号を贈られた。

平成八年十月二十日

南海にたとへこの身ハ果つるともいくとせ後の春を想へば

永峯 肇

代表	委員
清水忠成	黒木重治
大坪典	外山 勇
斉藤実秀	斉藤実美
宮脇宗明	



歩兵第七十二連隊慰霊碑 (宮崎縣護國神社境内)

所在 宮崎市神宮二丁目四十三
管理 宮崎縣護國神社
所有者 江口俊夫氏（宮崎市清武町）戦友
御祭神 歩兵第七十二連隊宮崎県出身者
建立日 平成二十六年十二月二十八日



碑文

歩兵第七十二連隊は昭和十九年十月十三日に旭一二八部隊として編成され中国の海拉爾を出発した。奉天を経由し釜山港にて輸送船に乗り、門司港を経て南方へ向かった。しかし、秋津丸は十一月十五日五島沖で、摩耶丸は十七日黄海で魚雷を受け撃沈した。残る神州丸、吉備津丸の船団は高雄へ寄港し、十二月三

日ルソン島に上陸した。昭和二十年に至り米軍の攻撃激しくリット・サビットの戦線を経てコトコト峠を通りサンギロへ向い、バナオ、カヤッパン、ラトバーを通り八月下旬にルソン島のブギグ峠にて終戦の大詔を受け故郷に帰還した。この部隊における宮崎県関係者の戦死者は千三百余名、生存者は僅か四十余名であった。ここに戦友である御英霊に謹んで慰霊の誠を捧げます。

平成二十六年十二月二十八日

特記事項

戦友の江口様がぜひとも宮崎県出身者の慰霊碑をとのことで建立された。

高岡護國神社

鎮座地	宮崎市高岡町内山二九〇六一二高岡小学校裏
御祭神	四八二柱 戊申役戦歿者神霊 西南役戦歿者神霊 日清日露戦役戦歿者神霊 太平洋其他戦争殉難者神霊
創建	明治三年十月
例祭	明治三年十月十日

【由緒】

明治三年十月高岡郷士長野祐之他六四名により創建された。明治七年三月官祭の礼を賜い、官祭祭例日を十一月二十三日と定める。明治十三年九月高岡郷有志の寄進をもつて社殿を新築、それより旧暦八月十五日を私祭日と定めて、祭典盛大に行っていたが昭和四年より陽暦十月十日に改める。昭和十一年五月高岡町より寄付を受けた町有林を敷地として移転、本殿を新築、拝殿を改築し境内を整備する。昭和十四年四月一日、従来諸懸内山招魂社と称していたが招魂社制度改正にて指令社兵第二四四六号許可指令により、社号を高岡護国神社と改称した。



広瀬護國神社

鎮座地	宮崎市佐土原町下那珂三九六〇一五
御祭神	四六七柱 戊辰の役佐土原島津藩の戦歿者 日清日露戦争広瀬地区戦歿者 太平洋戦争広瀬地区戦歿者
創建	明治三年二月十五日
例祭	明治三年二月十五日
所有者	宮崎市佐土原町広瀬地区遺族会
管理者	宮崎市佐土原町広瀬地区遺族会

【由緒】

旧称那珂下田島招魂社。明治三年二月十五日、五十二名の国事殉職難者（戊辰の役）を祀るため、佐土原藩知事島津忠寛が広瀬小松山（東町）に創建した。同七年に官祭招魂社となり、同三十年九月七日に現在地の和田山の根（ふもと）へ遷座。昭和十四年四月一日広瀬護国神社と改称、平成二年二月に改築され、現在に至る。

昭和三十五年五月四日には、清宮貴子内親王殿下が、島津久永氏との御成婚の砌、ご一緒にご参拝された。また、和田山の中腹には西南の役（明治十年）において戦歿した佐土原島津藩の慰霊碑が建てられ、正面に「戦没招魂塚」、横面に「島津啓次郎」、そして裏面に戦歿者の氏名が刻まれている。

招魂碑 慰霊之碑 (高岡護國神社内)



所在	宮崎市高岡町大字内山二九〇二二
碑名	宮崎県知事 田中長茂謹書（招魂碑）
管理	宮崎市
所有者	高岡町高岡地区遺族会
御祭神	四八二柱
建立日	招魂碑 昭和二十八年十月十日
慰霊之碑	平成七年八月十五日（終戦五十年記念）
慰霊祭	十月十日

碑文（慰霊之碑）

終戦五十周年の節目の年に当たりここに戦没者慰霊碑を建立する。

日中戦争（支那事変）、そして太平洋戦争（大東亜戦争）において、国のために尊い一命を捧げられた戦没者に対し、追悼の誠を捧げ、ひたすらご冥福を祈念するものである。

崇高な犠牲の上に築かれました今の平和、著しい発展を遂げた我が国、それは戦地や内地で散華された御霊の願いでもあった。

慰霊之碑建立は、町軍恩連盟、町傷痍軍人会、高岡地区、穆佐地区両遺族会並びに町民各位の協力を得たものである。

御霊の永遠に安らかならんことを。



地区軍恩会	永峰 良夫 川野 捨治
傷痍軍人会	宇和 利夫 田吉 和子
遺族協定会	佐竹 力 清水 浩
	柏原 イト 大山 クニ
	水間 健祐 水田 チエ
	高取 吉美 小谷 宗熊
	盛吉 恵男 小谷 宗熊
	中山 紀子 岩見 俊郎
	黒木 政次 小川 敦子
町議会議員	中原 親一 萩原 利康
岩見 進一 田口 利昭 黒木 千秋	
恒吉 善紘 水谷 健 盛吉 恵男	
中村 義孝 椎屋 晴好 長友 紀生	
中蘭伊三郎 名直 捨好 兼森 義廣	
自治公民館連絡協議会会長	内丸 正壽
町議会議員	吉元 正憲 日高 純一
収入役	田原喜久雄
教育長	北 照雄
	篠原 和民
	黒木 千秋
	星崎 博
	日高 純一
	田原喜久雄
	黒木 千秋
	高橋 忠光
	別府 辰郎
	志知島敏身
高岡町長	
高岡町軍恩会会長	
高岡町傷痍軍人会会長	
高岡地区遺族協定会会長	
穆佐地区遺族協定会会長	
県議会議員	吉元 正憲 日高 純一
高岡町助役	田原喜久雄

裏面

穆佐護國神社

鎮座地 宮崎市高岡町大字小山田九二五十七穆佐小学校裏
御祭神 一七九柱 戊申役戦歿者神霊 西南役戦歿者神霊
者神霊 太平洋其他戦争殉難者神霊
創建 明治二年八月十六日（昭和三十三年四月改築）
例祭 十月六日



【沿革】 荒川真澄他六名により創建される。明治七年十月十五日より官祭祭日四月十一日、十月六日をもつて祭日と定めた。明治四十年四月二十五日陸軍騎兵少尉野村盛茂他七名私祭合祀許可される。昭和十四年四月一日より招魂社の名を、穆佐護国神社と定め、昭和三十三年四月には改築され現在に至る。旧社格は官祭招魂社。創建当初の社名は「諸縣穆佐招魂社」である。

慰霊之碑

（穆佐護國神社内）

所在 宮崎市高岡町大字小山田九二五十七
管理 穆佐護國神社境内
所有者 宮崎市
御祭神 穆佐護国神社
建立日 平成七年八月十五日
慰霊祭 十月六日

碑文

終戦五十周年の節目の年に当たりここに戦没者慰霊碑を建立する。
日中戦争（支那事变）、そして太平洋戦争（大東亜戦争）において、国のために尊い一命を捧げられた戦没者に対し、追悼の誠を捧げ、ひたすらご冥福を祈念するものである。
崇高な犠牲の上に築かれたいまの平和、著しい発展を遂げた我が国、それは戦地や内地で散華された御霊の願いでもあった。
慰霊之碑建立は、町軍恩連盟、町傷痍軍人会、高岡地区、穆佐地区両遺族会並びに町民各位の協力を得たものである。
御霊の永遠に安らかならんことを。

高岡町長 志知島敏身
高岡町軍恩会会長 別府 辰郎
高岡町傷痍軍人会会長 高橋 忠光
高岡地区遺族協定会会長 黒木 千秋
穆佐地区遺族協定会会長 星崎 博
県議会議員 吉元 正憲
高岡町助役 日高 純一
収入役 田原喜久雄
教育長 北 照雄
高岡町自治公民館 篠原 和民
連絡協議会会長 内丸 正壽

高岡町町議会議員 荒瀬 秀雄
野村十三雄
長尾 和子
橋口 榮
中村 兼親
安楽カスミ
星崎 末一
山口 長村
益元有爲子
特記事項
同所に明治十二年十一月九日建立の招魂墓あり。西南の役西郷軍戦歿者のもので、戦後に現在地に移設された。



綾護國神社

鎮座地 東諸県郡綾町大字南俣字古城二八二五番地
御祭神 三五一柱
創建 明治八年四月
例祭 十一月十九日



【沿革】

明治八年四月、前年の佐賀の乱に郷土より出征戦死した陸軍歩兵馬場小吉命慰霊のため、木造瓦葺の三坪余りの社殿を新築、招魂社と称したのが始まりである。以来日清、日露両後の戦死者を合祀、昭和十四年十月十一日に綾護国神社と改称、昭和十七年十二月二十一日現在地に新築遷座した。大東亜戦争の戦死者も合祀、現在三五一柱をお祀りしている。台風による被害の為、昭和二十七年と昭和五十年に社殿の大修復を行った。

□魂碑

陸軍歩兵馬場小吉招魂碑 丁丑役戦込招魂塚

（綾護國神社内）



所在 東諸県郡綾町大字南俣字古城二八二五番地
管理 社会福祉法人綾町社会福祉協議会
所有 社会福祉法人綾町社会福祉協議会
御祭神 陸軍歩兵馬場小吉招魂碑 馬場小吉
他の碑は不明
建立日 陸軍歩兵馬場小吉招魂碑
明治八年四月建設・明治四十二年五月改築
他の碑は不明
慰霊祭 四月五日
碑文（陸軍歩兵馬場小吉招魂碑）
曩充兵員在熊本鎮壹明治七年佐賀暴徒之蜂起也正吉赴役於彼地暴徒圍佐賀城小吉等衝重圍而出勇戦死之享年二十有二 明治八年四月建設 明治四十二年五月□日改築
歌碑（綾護国神社内）
明治天皇御製
身をすていさをたてし人の名は
国のほまれと共にのこさむ
昭憲皇太后御歌
神垣に涙たむけておがむらし
かへるをまちし親も妻子も

川南護國神社

鎮座地 児湯郡川南町川南一三六六一・一
御祭神 一二、〇〇余柱
創建 昭和二十四年三月二十一日（再建）
例祭 春季三月二十一日
所有者 川南護国神社奉賛会
管理者 川南護国神社奉賛会



空挺落下傘部隊発祥之地碑（川南護國神社内）

所在 児湯郡川南町川南一三六六一・一
所有者 川南護国神社奉賛会
建立日 昭和三十八年五月
慰霊祭 十一月二十三日
碑文
川南護国神社に空挺部隊一万二千有余の英霊合祀の由来
昭和十六年 川南村にあつた広大な軍馬補充部の 牧場
が落下傘部隊の降下場に転用され 同九月から使用をはじ
めた 翌十七年に兵營が建設され 数千の落下傘部隊がこ
の地で練武に励んだ

天下る落下傘兵は 天孫降臨になぞらえて空の神兵と称
され 村人の庇護後援のもと精鋭誇る空挺部隊が錬成され
次々と南の決戦場に出て征き活躍した
しかし 我々の悲願も空しく戦敗れ多くの戦友が戦野に
屍を晒し そのみ霊だけが当時豊原にあつた陸軍挺進練習
部構内の挺進神社に神鎮り給うたのである ところが二
十一年初夏の頃 宮崎市に進駐していた米軍は理不尽にも
挺進神社を焼払ってしまった 抛り所を失った英霊は 当
時旧兵舎を校舎としていた宮崎師範学校の寄宿舎周辺を
毎夜白い体操衣袴姿で走り廻るという噂が立った
そのようなことがあつて 一時唐瀬の石川富士之助翁の
仏壇にお祭りし 更に昭和二十四年この護国神社が再建さ
れるに及び ここに合祀し



今日に及んで
護国神社の祭祀は 川南
護国神社奉賛会によつて永
久に行はれることに感謝し
後世のためこゝに由来を
刻しておく次第である
平成二年十一月二十三日
陸軍空挺部隊戦友一同

陸軍挺進練習部（川南）
第一挺進集団（司令部 川南）
第一挺進団（司令部 川南）
挺進第一聯隊（川南）
挺進第二聯隊（川南）
第二挺進団（司令部 川南）
挺進第三聯隊（川南）
挺進第四聯隊（川南）
第一挺進飛行団（司令部 新田原）
飛行団通信隊（新田原）
挺進飛行第一戦隊（新田原）
挺進飛行第二戦隊（新田原）
滑空飛行第一戦隊（西筑波）
滑空飛行第二戦隊（西筑波）
第百一、第百二飛行場中隊（新田原）
第百三飛行場中隊（西筑波）
滑空歩兵第一聯隊（西筑波）
滑空歩兵第二聯隊（西筑波）
第一挺進戦車隊（川南）
第一挺進機関砲隊（西筑波）
第一挺進工兵隊（川南）
第一挺進通信隊（川南）
第一挺進整備隊（川南）
（下部碑文）
花負いて 空射ち征かん 雲染めて
屍悔なく 兵等散るなり
昭和十九年十二月五日（レイテ突
入前日）南サンアエレナンド宿舍板
壁にて 詠人不知
建設者 空挺戦友会 空挺同志会
遺族一同
昭和三十八年五月建立 施工者
宮崎市 島津石材店
特記事項 碑前に神兵桜あり
（碑文）あゝ純白の花負いて、平成
元年十一月二十三日 落下傘部隊戦
友一同

忠魂碑（川南護國神社内）

所在 児湯郡川南町川南一三六六一・一
碑名 陸軍大將男爵 上原勇作書
所有者 川南護国神社奉賛会
御祭神 六三四柱
建立日 昭和二十四年三月二十一日

碑文 石表の激しい傷みの為読読不可
特記事項 同所に外戦記念碑、記念植樹あり

○外戦記念碑 石工 日浦〇一郎 昭和三十
七八年

記念樹の由来（碑文）

靖国神社御創立百年奉祝記念大祭（昭和四
十四年四月十九日）において 奉納全日本銃
剣道選手権大会が 日本武道館を会場に執り
行われた その時靖国神社境内の神木銀杏樹
より採種された幼苗を各県代表選手に一本宛
下賜された 時の筑波藤季宮司から大切に育
成して成木となつたら選手の出身地の護国神
社に奉納して下さいとの言葉がありました
これを育てて十三年 ここに移し植えたも
のがこの記念樹である

宮崎県代表選手 鍋倉俊文
昭和五十七年四月十九日

奉仕者宮崎県銃剣道連名会員 橋口勝巳
明田文雄
河野 香
平成元年二月十一日 平田宗俊 謹識



高鍋護國神社

鎮座地 児湯郡高鍋町南高鍋六九四〇
御祭神 九三八柱 国家公共のために尽した人の神霊
創建 明治三年
例祭 春四月 秋十月



【沿革】
明治二年、戊辰の役に
戦死された官軍戦没者慰
霊のため、東京九段に招
魂社（現靖国神社）が建
立された。各藩でもこれ
にならい高鍋藩では明治
三年、城跡中斷の東端に
八代を建立し、官祭高鍋
招魂社とし戊辰の役戦死
者鈴木来助以下十一柱を
祀った。初代宮司は飯田
清年である。その後逐次
神霊を合祀した。昭和十
五年紀元二千六百年記念
祝典が斎行され、勅令を
もつて高鍋護国神社に昇
格され、現在地にご遷座、
昭和三十四年四月護国神
社改築奉賛会を設立し、
昭和三十八年には神殿を
改築した。また平成九年
十月に終戦五十周年記念
事業として、本殿及び社
務所を改築、境内整備、
更には英霊の芳名を刻む
碑を建立し、現在に至る。

福島護國神社

鎮座地 串間市大字西方四〇六六番地
御祭神 松田充平次命（まつだじゅうへいじのみこと）
橋貞克命（たけはなさだかつのみこと）
松田平左衛門命（まつだへいざえもんのみこと）
橋貞行命（たけはなさだゆきのみこと）
深江助九郎命（ふかえすけくろうのみこと）
大蔵谷方行命（おおくらだにまさゆきのみこと）
創建 不詳
例祭 十月十五日



沿革（碑文）
明治元年戊辰奥羽の役に戦
死した福島出身の高鍋藩士三
人、松田充平次（八月越後山
熊田で戦死二十六歳）松田平
左衛門（七月新潟で銃創を負
い五年二月死去、三十七歳）
深江助九郎（松田充平次と同
日同場所で銃創を負い、翌二
年十月死去三十三歳）を、剣
城の塚と呼ばれる前方後円墳
の頂上に埋めて祭った。三人
の墓もある。古墳であること
が地元でよく知られなかった
ので、ここに祭られることにな
ったもので、官祭の招魂社、
靖国神社の分霊として例祭が
行われ、のち護国神社となっ
ている。

特記事項
福島護国神社は、宮崎県指
定史跡の前方後円墳（墳長六
十メートル）である古墳四号・
剣城塚の上に鎮座している珍
しい神社である。

慰霊碑

宮崎市

大宮地区 忠魂碑・慰霊塔



所在 宮崎市下北方町陣ヶ平い号六三八四番地一号
管理 宮崎市
所有者 宮崎市大宮地区遺族会
御祭神 四八二柱
建立日 忠魂碑 大正三年四月
慰霊塔 昭和三十三年五月二十八日
慰霊祭 五月下旬から六月
碑文
過ル第二次世界大戦終戦後早クモ十三年ヲ迎エル秋ニ方リ大宮地区遺族会及郷友会区長会ノ三団体合議ノ下ニ戦歿者ノ遺徳顕彰慰霊ノ爲メニ慰霊塔建設ノ起ルヤ関係者ハ素ヨリ多クノ先輩有識者並ニ全区民ノ老若男女翕然トシテ此ノ拳ニ賛シ其ノ絶大ナル後援ノ下ニ茲ニ日出度工ヲ完了シ清淨ナル平和台ノ東端眺望絶佳ノ陣ノ平地ニ巍然トシテ聳ヘ立壯嚴ナル慰霊塔ヲ見ルニ至リ之ニヨリ英靈ノ遺徳ヲ後昆ニ傳ヘ其ノ無言ノ教訓ハ必ズヤ治家齊身以テ祖国再建ノ熱意ヲ熾ニシ併セテ世界平和ニ寄與スルトコロ甚大ナルモノアラン斯ダシテ英霊慰藉郷土国家ノ鎮護ノ標トシテ永ク郷民敬仰ノ中心トナランコトヲ、
昭和三十三年五月廿八日
大宮地区遺族会協働会長栗原定美識
特記事項
今より十数年前に遺族の高齢化に伴い、小高い場所に建つ忠魂碑・慰霊塔へ行くことが難しくなり、忠魂碑・慰霊塔を宮崎県護国神社境内に移設をするとの話が持ち上がった。役員で話し合い、宮崎県神社庁の許可も得た後に会員に説明をしたが、反対意見が出たために移設をしないこととなった。
昭和三十三年より平成二十七年まで毎年正月の第一日曜日（三が日を除く）に、バスを借りて宮崎市の遺族会会員で市内の慰霊碑を巡拝している。昭和三十三年以前は数回行ったことがある。しかし平成二十八年より大淀川を境に南北二手に分かれて巡拝することとなる。

中央・江平・小戸地区

宮崎八幡宮祖霊殿

所在 宮崎市宮田町三二七 宮崎八幡宮内
管理 宮崎市中心部地区戦没者慰霊祭実行委員会（中央遺族会・小戸遺族会・江平遺族会）
所有者 宮崎八幡宮
御祭神 七八七柱 日清・日露戦争、大東亜戦争戦歿者（中央・江平・小戸地区）
建立日 昭和五十三年
沿革 昭和五十三年以前は、移設式の社殿（宮崎神宮管理）にて慰霊祭が斎行されていた。宮崎八幡宮境内拡張工事に伴い、現在の祖霊殿が建立された。
慰霊祭 毎年十一月初旬
昭和二十年頃までは、大淀河川敷（鶴島町付近）にて執り行っていた。その後昭和五十三年頃までは宮崎八幡宮境内の稲荷社前付近で執り行っていた。



赤江地区

忠魂碑



所在 宮崎市月見ヶ丘一丁目稲荷山公園内
碑名 帝國在郷軍人會々長陸軍大将 鈴木壮六書
管理 宮崎市赤江地区遺族会
所有者 宮崎市赤江地区遺族会
御祭神 四三三柱
建立日 昭和三十四年十月
沿革 平成十年、基礎が一部崩壊した為に修復
慰霊祭 四、五月（年一回）赤江振興会中心となつて行つて
碑文
祖国ト民族ノ平和ヲ守ルヘク明治三十七八年戦役以来大東亜戦争ニ至ル間敢然起ツテ国難ニ殉シラレシ戦歿者三九五柱ノ尊キ英魂ヲ永久ニ祀リ慰メントシ市民拳ツテ茲ニ感謝ノ念盡クルナク展望絶佳ノ此ノ地ニ慰霊塔ヲ建立ス 冀クハ英霊安ラカニ鎮マリ永遠ニ吾等カ郷土ヲ守リ給ワンコトヲ
昭和三十四年十月十日

大淀・古城地区

忠霊塔

所在 宮崎市谷川三丁目天神山公園内
管理 宮崎市大淀中央地区遺族会・宮崎市古城地区遺族会
所有者 宮崎市大淀中央地区遺族会・宮崎市古城地区遺族会



憶地区

忠魂碑

所在 宮崎市吉村町江田原甲二六五番地六
管理 憶振興会
所有者 宮崎市文化財課（土地）※建立地に古墳がある為憶振興会（碑）
御祭神 一九九柱 建立当時
建立日 二二二柱 平成二十七年時
沿革 大正七年四月十八日 憶小学校校庭に建立
当初は日清戦争・日露戦争の戦歿者を祀り、後に大東亜戦争の戦歿者を合祀した。
昭和二十六年十月十日 高山古墳（現在地）に移設
平成二十四年三月 碑階段改修工事
慰霊祭 毎年立春の彼岸三月十日
神道・仏教合同で斎行されていたが、現在は振興会・遺族関係者のみで追悼式を行っている。
碑文
平和の礎となられた戦歿者諸氏のためさきに憶小学校の一隅にあった忠魂碑を此の地に再建立して各位の霊を弔う
昭和二十六年十月十日 宮崎市憶新興會



御祭神 四一六柱 明治戊辰の役を始め日清日支那事変大東亜戦争の御霊
建立日 昭和三十四年七月五日
沿革（建設記念碑）
大淀地区慰霊碑はもと大淀小学校校庭に建設せられていたが大東亜戦争終了後連合軍の政策により無惨にも破壊され既に十数星霜を経て今日に至り誠に遺憾の極みであった。然るに今面之が復興再建の議起り江南地区区会連合会同遺族会大淀郷友会の合議に基き更に市内有志諸賢の特別賛助を受け明治戊辰の役を始め日清日支那事変大東亜戦争等の各戦役に従軍し一身一家を犠牲にして護国の為に殉ぜられた忠霊の偉大なる功績を永久に顕彰することとなり地を眺望雄大絶佳なる大淀川畔天神山頭の聖域にトして茲に改めて忠霊塔を建設した。建設工事にあたつては大淀郷友会会員同遺族会多数の労力奉仕及び区民各位の絶大なる協力を得た
吾等は信ずる
忠魂は永遠に不滅 而して日本も亦不滅ならんと
慰霊祭 五月（公民館にて大淀地区・古城地区と合同の慰霊祭）
特記事項 昭和六十一年一月 天皇陛下御在位六十年を奉祝して改裝
碑文
天皇陛下御在位六十年並びに歴代天皇最長寿を壽ぎその記念事業として忠霊塔を改裝一新し護国の為に殉ぜられた忠魂を仰ぎ見不滅の功績を偲び平和の基となられた英霊を慰むると共に恒久の世界平和と人類の福祉を祈念するものであります
嗚呼英魂よ永久に故郷の大地に鎮り給え
昭和六十一年一月吉日 日本遺族会
宮崎市
大淀中央地区遺族共助会
古城地区遺族共助会



天神山

戦災者慰霊碑

所在 宮崎市谷川三丁目天神山公園内
建立日 昭和四十二年八月九日 宮崎市戦災死没者遺族会
碑文
昭和十六年十二月八日 真珠湾に端を発した大東亜戦争のその末期は日本本土も戦場と化し、日毎に敵機の来襲を受け、一般市民にも犠牲者を出すに至った。宮崎市に於ても戦災死を遂げた者、老若男女合せて百余名。戦後二十年 残された遺族八十余名は今ほ亡き肉親の不憫を想い、昭和三十九年十二月廿二日遺族会を結成し、浄財を集め戦災死没者の冥福を祈ると共に永久平和の願をこめた慰霊の碑をここに建立したるものなり。

青島地区

忠魂碑・青島戦没者供養之碑

所在 宮崎市大字折生迫一六九〇
管理 宮崎市折生迫財産区
所有者 宮崎市青島地区遺族会
御祭神 一八九柱
建立日 忠魂碑 昭和二十八年十二月
青島戦没者供養之碑 平成二十年三月
慰霊祭 九月二十三日
碑文
顧レバ満州事変以来我国ハ血腥キ十数年ヲ経験シ遂ニ国際聯盟ノ脱退トナリ偶々昭和十二年七月華事変勃発セシガ其解決モ見ズシテ更ニ太平洋戦争ニ突入シ東ニ英米ノ両強国ヲ並ニ東南アジア諸国ト相對シ西ニ老大国支那ヲ控ヘ相戦フコト九年餘遂ニ敗戦シテ昭和二十年八月無條件降伏ノ悲惨ナル憂目ヲ見ルニ至リ漸ク終戦ヲ告ゲタリ其間陸海空ノ三軍ニ從ヒ祖国ノ為ニ死鴻毛ノ輕キニ身命ヲ尽シテ国難ニ殉ゼラレタル戦没勇士ノ墓碑建設ヲ企画シテ此處靈地ヲ撰ビ折生迫財産区ヨリ寄附金及ビ各遺族ノ配金ヲ以テ昭和二十七年六月工ヲ起シ遺族後援會及帰還勇士部落民等



大塚地区

忠霊塔



所在 宮崎市大塚町原ノ前一五九八番地大塚神社境内
管理 大塚神社
所有者 大塚町遺族会
御祭神 八十一柱
建立日 昭和三十二年十二月
慰霊祭 五月
碑文
明治戊辰以来過る第二次世界大戦に於て当大塚地区戦歿者の遺族等相謀りその遺徳顕彰慰霊のため建碑を企画せらるゝや区民を始め地区各種団体等翕然として此の挙を賛しその絶大なる後援の下に茲に由縁も深き産土鎮座の大塚神社境内の幽邃清淨の地を卜し莊嚴なる忠霊塔の建立を見るに至り英靈の勲を後昆に傳うることとなり
爾今此の塔を仰ぎ見る者をして英靈に対する感恩の念を深からしむると共にその無言の教訓は治家齊身以て祖國再建の熱意を熾にせしむるや必せり
斯くて本碑は郷民敬仰の裡に英靈の慰藉郷土鎮護の象徴として永く後世に傳へらるべし
昭和三十二年十二月 宮崎市遺族連合会々々長栗原定美識



内海地区

敬仰靖國之靈塔

所在 宮崎市大字内海一〇二〇番地
管理 宮崎市内海地区遺族会
所有者 宮崎市内海地区遺族会
御祭神 一〇一柱
建立日 昭和二十四年四月十八日
沿革 昭和四十七年十月十日移設建立
慰霊祭 以前は九月二十三日に行われていたが、現在は中断している。

木花地区

忠魂碑



所在 宮崎市大字熊野九五〇八一イ
管理 宮崎市内花地区遺族会
所有者 木花振興会
御祭神 二六三柱
建立日 昭和二十二年十一月二日
沿革 平成十四年九月改修
慰霊祭 四月第一日曜日



瓜生野地区

忠魂碑

所在 宮崎市大字瓜生野二一七七番地
所有者 瓜生野地区戦没者慰霊奉賛会
御祭神 一六三柱
建立日 昭和二十六年十一月三日
慰霊祭 三月上旬
碑文

我国は明治中葉以降運頼に隆昌し世界文化に対する貢献も極めて顕著なものがあつた
然しながら其為に身命を屠して愛国者も少なくなき卿等も亦その一人たるは疑いのないところである
卿等はさきに決然難に赴き千辛万苦遂にこれが為に殫る 嗚呼 其の犠牲的精神と行爲とは永遠に平和日本のいしづえとして語り傳えられるは必然であるう 今日すでに待望久しかった平和條を見愈々國の再建復興の機運が到来したのにかんがみ新理想の下 尊い犠牲をして不朽のものたらしむべく茲に嘗ての同僚相図り全郷土人士の賛助のもとに資を募り材を集め工に励み再び碑を建てて卿等を弔う
然しながら国歩なお困難なものがあり規模意の如くならず 卿等の霊がなりとして簡素に過ぐるはもとよりであるが卿等よ希くば魂魄永く此処に岫まり国民国土と共に永遠に世界の平和人類の幸福を照覧し以て我等の微衷をして深き意義あらしめよ



忠霊塔

所在 宮崎市塩路浜山三〇八二一三住吉神社境内
管理 宮崎市住吉地区自治会・住吉遺族会
所有者 宮崎市住吉地区自治会（土地）・住吉遺族会
御祭神 三六三柱 西南の役・日清戦争・日露戦争・満州事変・日華事変・太平洋戦争戦歿者
建立日 明治二十八年 宮崎市大字島之内（住吉小学校上）
沿革 明治二十八年 宮崎市大字島之内（住吉小学校上）の台の上に建立
慰霊祭 平成八年 住吉神社境内（現在地）に移転設備四月



慰霊塔

所在 宮崎市大字系原四一九一二
管理 宮崎市
所有者 宮崎市
御祭神 一二六柱 大東亜戦争戦歿者
建立日 昭和三十年五月五日
沿革 旧倉岡村役場裏の台地に建立
慰霊祭 平成十九年三月 現在地に移設三月
瓜生野、倉岡両地区合同で北地区振興会主催により西部地区農村環境改善センターにおいて神式、仏式で実施されている。



碑文
今次支那事変及び太平洋戦争で祖国の萬歳を叫んで散って逝つた倉岡出身の軍人軍属の数は百柱を越え亦内地にあつてこの戦争の犠牲となり亦学徒として動員され空しく死没された一般市民は十柱に上つている 我が國も終戦以來茲に十年平和條約も締結せられ国民の精神状態も漸く平静に返りつゝあるときこれ等戦争犠牲者の冥福を祈ると共に世界平和を祈念する為慰霊塔を建立することは残された国民の義務と思うのである 当倉岡では夙に元軍人を中心とした軍人遺族後援会が結成せられ毎年慰霊祭を斎行してきたが昭和二十八年三月以來慰霊塔建設の議が起り幸宮崎神宮の厚意により同社頭にあつた谷村計介伍長銅像の台石の無償拂下げを受けることができたので倉岡地区慰霊塔建設委員会を結成しこれが推進を計り地区市民はもとより地区出身者の協賛を得特に遺族後援会員の勞力奉仕により由緒あるこの台石を主体として眺望比なき此の地に莊嚴なる慰霊塔の建立を見るに至つたのである これより先糸原城内にあつた明治十年の役及び日露戦役忠魂碑並びに日清日露両戦役記念碑を昭和二十八年三月此の地に移し此の機会に全戦争犠牲者を合祀することにしたのである 茲にその概要を記し祈念とす
昭和三十年五月五日

倉岡地区慰霊塔建設委員会

慰霊塔移設記念碑碑文

この慰霊塔は昭和三十年に地区民総力を挙げてこれよりやや東旧倉岡村役場裏の台地に建立され祀られてきた。平成十八年三月当地に特別養護老人ホームの建設が決まると遺族会ではその事業に併行して慰霊塔の移設に取り組むこととした。移設造成については、慰霊塔敷地の所有者である、宮崎市のご理解ご協力を得 更に施工者である社会福祉法人 凌雲堂の特段のご配慮によつて台地から当地への移設が実現した。台地から平地への移設は遺族の念願でもありその資金の一部にと戦没者の妻十名は、数年前から三百万円を積み立ててきた。また倉岡地区自治会連絡協議会に寄付の相談をお願いしたところ 一世帯当り三千円の寄付を仰ぐことになりここに湯地武雄翁の頌徳碑を含め永代に残る慰霊塔移設整備を終えることができた。多大なるご支援とご協力をくださった各地区自治会会長 同班長 住民各位宮崎市凌雲堂並びに関係者の方々に深甚なる謝意を表すると共に戦没者の霊を追悼 供養し戦争の悲惨さを平和の尊さを後世に伝えるため記念碑を建立する
平成十九年三月吉日

倉岡地区戦没者遺族会

碑文

住吉地区では、西南の役以来太平洋戦争に至るまでの戦没者は三六三柱で、その御霊の慰霊碑が招魂山に建立されており

ました。
この招魂山は、住吉地区が一望できる風光明媚な景勝の地であり、戦前・戦中・戦後を通し野外教育の場として親しまれ、また慰霊祭もそれぞれの時代に相応して斎行されて参りました。

しかし、平成五年の台風第十三号による被害で拝道の決壊があり、その補修整備に多額の経費が必要となり、また遺族の高齢化、世代の移り変わり等により、参拝は勿論その管理等も充分出来なくなりました。

このため、地区遺族会は拝道の補修整備を移転も含め自治会及び振興会に請願を致しました。これを受け、当時の自治会長連絡協議会会長及び振興会会長の伊藤光男氏を中心として、定例会及び理事会、また各種団体との合同協議会を開催して協議・検討を行いました結果、祖国の安泰と隆昌・恒久平和を念じつつ、戦後五十年事業として平坦なこの地に、散華された方々の慰霊碑を地区住民の方々の浄財により新たに建立することになったものである。

平成八年三月吉日

吉地区自治会長連絡協議会	住吉地区自治公民館連絡協議会
住吉地区振興会	住吉地区民生・児童委員協議会
住吉地区遺族会	住吉商工振興会
住吉地区軍恩郷友会	住吉地区老人クラブ連合会
住吉地区傷痍軍人会	住吉地区J A婦人部
住吉地区自衛隊父兄会	住吉地区小中PTA
住吉土地改良区	工事施工者 高瀬石材店

忠霊塔

所在 宮崎市大字跡江三二一三一生目中学校内
碑名 陸軍中将従四位勲二等功二級大久保利貞書
管理 宮崎市
所有者 宮崎市生目地区遺族会
御祭神 三三八柱
建立日 大正三年六月三十一日 生目小学校敷地内に建立

沿革 昭和二十八年一月 生目中学校内（現在地）に再建立
慰霊祭 十月第一日曜日

碑文

第二次世界大戦終戦を共に戦没者慰霊のための施設は心ならずも撤去を余儀なくする其の後講和成り独立国となるやもありあがる世論は強く之れが再建を叫ぶに至れり茲に議をまとめ着手するや村民は進んで浄財を醸出し賦役に服し燃えあがる熱意により壯嚴無比なる慰霊塔の竣工を見る英霊も亦安らかに来り鎮まりまさむ依つて碑に刻み後世に傳う
昭和二十八年四月

生目村長 森繁春撰



宮崎特攻基地

慰霊碑

所在 宮崎市本郷北方通渡
管理 財団法人赤江振興会地方協力会
所有者 宮崎特攻基地慰霊碑奉賛会
御祭神 七九九柱 宮崎基地関係
一、第三四一航空隊 二、第七六二航空隊
三、第六〇一航空隊 四、第七二二航空隊
五、第七戦隊 六、第九八戦隊
七、第三四三航空隊
八、第八〇一航空隊 九、第七〇一航空隊

建立日 昭和五十八年三月
慰霊祭 毎年四月第一日曜日

碑文

この地は「旧海軍赤江飛行場宮崎海軍航空隊跡地」である。昭和二十年八月十五日の終戦にいたるまで日本防衛の南九州最大の航空基地として陸海軍共同作戦を含む数多くの戦闘作戦に特別攻撃隊及び雷撃隊出撃の基地となつて大東亜戦争の戦史に残る偉跡の地である。
私共現在平和と繁栄の生活を享受しております。然しこの平和と繁栄の陰には大戦中における数多くの国民の犠牲と数百万の戦死戦没戦傷病者、大多数の国民の困苦欠乏の生活があつたことを忘れてはならない。なかでも特に祖国の悠久の平和と最後の勝利を信じて、祖国のために、を合言葉に南海の空で散つた陸海軍特別攻撃隊員及び雷撃隊員たちの崇高なる精神と遺徳は永く後世に伝承したい。赤江飛行場は昭和十八年十二月一日付で海軍航空隊の練習基地として開隊、昭和十九年七月赤江基地は練習基地から第一線の作戦基地への編成方針が打ち出され正式に作戦基地として開隊したのは、昭和十九年十月十日である。

昭和十九年十月十二日台湾沖航空戦に突入した。当日赤江基地に展開していた陸海軍機の攻撃隊及び雷撃隊の出撃となつた。赤江基地を主軸として発進又は中継基地として作戦に参加した海軍機は、「二式陸上攻撃機」をはじめ三四四機、陸軍機は「飛龍」延二〇機、総機数五四四機である。この作戦による戦死者数は海軍六三三名、陸軍八〇名である。戦局はこの作戦終結とともに勝機が空しく去つた。一死これが戦局の好転をもたらすとは思わない。徒死を待つより大空に散るを潔しとする特別攻撃隊にすべてを託し国に報ゆる信念に燃える陸海の若鷺は愛機とともに敵空母に体当たり攻撃を敢行した。それは総力をあげて比島レイテ湾に突入する帝国連合艦隊に悲運の翼なき第一航空艦隊が送る最後のはなむけであつた。昭和十九年十月二十五日第一神風特別攻撃隊敷島隊の第一陣である。海軍における神風特別攻撃隊として出撃した特攻隊員は布告第五十九号を始め布告第二五九号を最後に二五〇七名になる。陸軍における特別攻撃隊の隊員のはほとんどがこの赤江基地を飛びたち直接攻撃に参加したものの、或は中継基地として比島、台湾、沖縄で特攻作戦に参加し、我が身命を捧げることにより愛する肉親や懐しい故郷そして祖国を救い得るならばの一念に燃え未曾有の国難に殉じて散華した

特別攻撃隊員若鷺の最後の地である。
昭和二十年三月十八日宮崎初空襲である。米艦載機による銃撃は午前五時四十八分夜戦一機の銃撃に始まり午前八時までグラマン戦闘機延一五〇機、午前十時まで延五四〇機、正午より午後四時四十五分まで延二〇〇機、これを反撃したのが、第七二一航空隊の戦闘三〇六、三〇七両飛行隊の「零戦」九〇機である。今大東亜戦において、有能な人材を失った戦争の責任は大きい。若桜の蕾のまま散華した献身無私の先輩同期そして後輩の崇高な精神を今再び結び合い白砂青松の川岸線、無限に広がる紺碧の赤江灘と青い空は今もなお美しい姿を留めているこの地に無量の感をもって当時を偲び我々同志相集い宮崎県民及び全国の有志の浄財によって碑を建立し愛国の赤誠に殉じた友たち、宮崎大空襲における民間戦災犠牲者の鎮魂と世界恒久の平和と旅するものの空の安全の祈りをこめて民間航空空の殉職者の霊を合祀忘れ去らんとする先人の偉業を顕彰し永く後世に伝え希うためゆかりのこの地に碑を建立し碑名を「鎮魂之碑」と銘記しここに碑を捧ぐ。

- 記 鎮魂碑合祀者名簿及び御芳名者名簿本堂に収納
- 一、陸海軍宮崎基地在籍部隊合祀名簿
 - 一、海軍神風特別攻撃隊戦死者名簿
 - 一、陸軍特別攻撃隊戦死者名簿
 - 一、宮崎県出身陸海軍搭乗員戦死戦没者名簿
 - 一、宮崎空襲時における戦災死亡者名簿
 - 一、宮崎特攻基地慰霊碑建立基金芳名者名簿

以上

昭和五十八年三月吉日

宮崎特攻基地慰霊碑建立期成同盟会一同



日に仏式による御霊祭が現地で行われ、さらに平成九年から平成十八年頃までは佐土原町社会福祉協議会が中心となって佐土原町遺族会が慰霊祭を毎年五月に行っていた。

碑文

第二次世界大戦終結と共に戦没者慰霊施設は心ならずも撤去を余儀なくさる

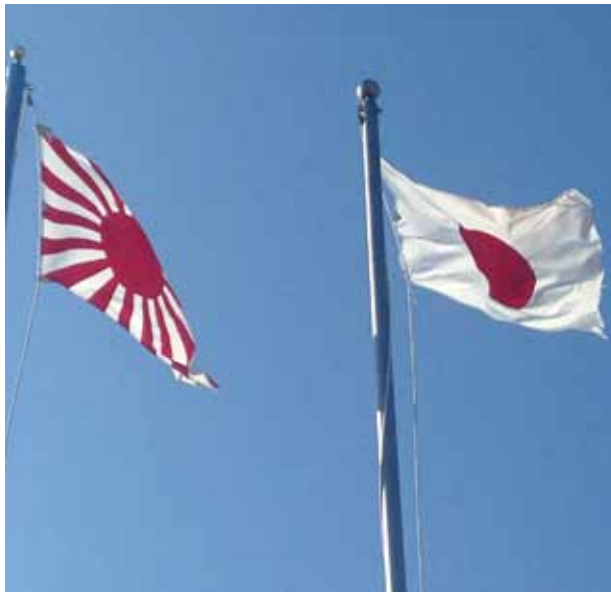
其の後講和條約成立し自主獨立を回復するや盛りあがる輿論は強く之が再建を希望するに至り茲に議をまとめて着工するや村民は進んで淨財を離出も賦役に服し燃えあがる熱意により莊嚴無比なる慰霊塔の竣工を見る

御霊も亦安らかに來り鎮まりまさむ

依つて碑に刻み後世に傳う

昭和二十九年五月吉日

※村長の名前は建立時に反対勢力の者により消されている 那珂村長



佐土原地区

慰霊塔

所在 宮崎市佐土原町上田島百貫地七五七
管理 宮崎市佐土原町佐土原地区遺族会
所有者 大光寺
御祭神 一四二柱
建立日 昭和二十八年四月 戊辰の役より第二次世界大戦に至る間の殉国の御霊を合祀し建立
慰霊祭 遺族会主催による佐土原三地区合同慰霊祭が年に一度、佐土原町地域福祉センターで神式にて執り行われる。平成十八年までは慰霊碑前で神式、仏式一年交替で慰霊祭が行われていた。

碑文
戊辰の役より大東亜戦争に至る間の佐土原町出身の殉国の御霊を合祀す
特記事項
慰霊碑は大光寺の持つ境内（宝塔山公園）に建てられており、宮崎市が公園を買い上げたが慰霊碑は宗教施設であるとの理由で買わなかったため、遺族会が苦慮している。

清武地区

戦歿者之墓



所在 宮崎市清武町木原五二五一一
管理 清武町
所有者 宮崎市清武地区遺族会
御祭神 五三六柱
建立日 昭和二十六年四月
慰霊祭 四月三日
慰霊祭を宮崎市と合同にしたことにより、慰霊祭が四月三日の固定になった。

碑文
安らかに鎮まり 満せと厳築き 共にに護らむ 大和島根を

清武町長 岩浦逸美
清武町遺族協働会長 宮川満徳
清武町遺族後援会長 日高正



佐土原町那珂地区

慰霊塔

所在 宮崎市佐土原町東上那珂一六三八三 那珂小学校内
碑名 宮崎県世話課長 高橋忠道謹書（慰霊塔）
管理 宮崎市佐土原町那珂地区遺族会
所有者 宮崎市佐土原町
御祭神 一七四柱 戊辰の役より第二次世界大戦までの那珂村出身者殉国の御霊
建立日 昭和二十九年五月 旧那珂中学校建設にあたり現在地に再建立
沿革 再建立前の慰霊塔は、昭和二十八年まで那珂村が管理していたが詳細は不明。
慰霊祭 遺族会主催による佐土原三地区合同慰霊祭が年に一度、佐土原町地域福祉センターで神式にて執り行われる。また、四月には那珂地区のみで命日祭を慰霊碑にて行うと共に、那珂地区遺族会の交流会を開き、後世へと引き継ぐための活動を行っている。以前は毎月五

田野地区

慰霊塔

所在 宮崎市田野町 田野運動公園内
碑名 緒方竹虎書
管理 宮崎市
所有者 宮崎市田野地区遺族会
御祭神 四八九柱
建立日 昭和二十九年五月二十二日
慰霊祭 四月五日

碑文
祖國ト民族ノ平和ヲ守ルベク西南役以来大東亜戦ニ至ル間敢然起ツテ國難ニ殉シラレシ戦没者四二六柱ノ尊キ英魂ヲ永久ニ祀リ慰メント〇〇〇ツテノ淨財ヲ以テ茲ニ感謝ノ念盡ク〇ナク此ノ展望絶佳ク地ニ慰霊塔ヲ建立ス翼クハ英靈安ラカニ鎮マリ永遠ニ吾等ガ郷土ヲ護リ給ハンコトヲ
昭和二十九年五月三日



東諸県郡

本庄地区

聖域碑



所在 東諸県郡国富町大字本庄字久保園四九一七一一
管理 国富町
所有者 国富町遺族会
御祭神 六六七柱
建立日 昭和四十六年十二月十一日
沿革 国富町の発足に伴い旧本庄町、木脇町、八代村所在の慰霊碑を協議の上、この地に収めた
慰霊祭 十一月十一日
碑文（聖域碑）
昭和三十年九月三十日国富町発足以来各地区別遺族会が発展的に解散し新たに国富町遺族会が組織された その遺族会の要望にそい昭和四十六年十二月十一日この地に殉国慰霊塔を建立しとしえに英霊を顕彰することとなった よって旧三町村別に建立されていた忠霊塔を町 社会福祉協議会 遺族会で協議しこれをあつめこの聖域に埋めて長く祭祀するものである
昭和五十一年五月 国富町社会福祉協議会



本庄地区

殉国慰霊塔

所在 東諸県郡国富町大字本庄字久保園四九一七一一
管理 国富町
所有者 国富町遺族会
御祭神 六六七柱
建立日 昭和四十六年十二月十一日
国富町遺族会の要望に沿い建立される
慰霊祭 十一月十一日
係者により記念碑建立の気運が高まり、本年六月奉賛会が結成された。ここにその青春の群像を讃えとともに恒久平和への願いをこめて建立する。
平成元年十一月十八日

記念碑建立奉賛会

国富町長 高山 義輝
国富町議会議長 郡 賢司
在隊者代表 鯉沼 一郎
在隊者代表 本田秀磨呂

「行雲」

鵬程萬里の碧空を天翔ける還らざる朋友は七十有余柱雲遙けき天界 今なお存す惟えは果てなき追慕の 念は更に篤く情まことにた勃々たり世は移りて時は四十余年の星霜を経る今その御霊を慰めその勲を顯彰せんとしここにこの碑を建立する
平成元年十一月

大刀洗陸軍飛行学校

木脇教育隊
在隊者有志

特記事項 同敷地内に桜植樹

碑文 戦乱渦中に在った昭和十九年中期吾等幾百の健男児はこの地木脇六野原に集い飛行技術習得に情念を注ぎ寧日なき猛訓練に青春の限りをつくす盡し昭和二十年五月迄峻厳なる軍律に耐え熾烈な明け暮れであった。進る熱血を昇華させた不倒不屈の魂、喜怒哀楽を領ち合った連帯の絆、更には六野で培った友愛互助の輪は四十有余の歳月を経た現在も尚、新鮮さを失わず戦後紆余曲折を辿った吾等の処世の道標とし時に活力の源泉或いは奮起の支えとなりつつ今日に至った。昭和六十年十月、吾等勇躍積年に及ぶ木脇再訪の夢を達成、思いを果し有志参加者総員六野原頭に佇立、萬感想憶の機会を得た。この邂逅と、吾等健男児嘗て当地に在って学び育くまれた若き日の確かな証しを後世に残し、又南冥遥かの空に散華された木脇飛行場出身各位の供養の意を合わせ、茲に祈念植樹賛同者有志一同の遺金を以て六野原頭に想憶の桜樹を植える。
昭和六十一年吉日

元大刀洗陸軍飛行学校木脇教育隊
記念植樹賛同有志
代表 鯉沼 一郎

木脇地区

木脇教育隊記念碑



所在 東諸県郡国富町木脇
管理 国富町
所有者 木脇教育隊記念碑奉賛会
御祭神 木脇教育隊七十有余柱
建立日 平成元年十一月十八日
碑文
広大な六野原台地は、太平洋戦争中の昭和十八年十一月、大刀洗陸軍飛行学校木脇教育隊が開設され昭和二十五年五月までの一年六か月、当時の熾烈なる時局化、全国各地から愛国の至情に燃えてまだ少年の面影を残す若人達が、碧空に夢を託し連日飛行訓練に精励した地である。時はうつろい、四十有余年の歳月は緑豊かな農地に変容し、思いでの基地一帯は当時をしのぶすべもない。時あたかも平成元年、各方面の関

延岡市

延岡市

殉国慰霊塔



所在 延岡市東本小路（城山公園内）
碑名 金森徳次郎謹書
管理 不明
所有者 延岡市
御祭神 三、八七一柱
建立日 昭和三十三年十月四日
慰霊祭 四月五日

伊形地区

殉国慰霊塔



岡富地区

太平洋戦争延岡空襲殉難碑



所在 宮崎県延岡市山下町一丁目三八七五（今山公園内）
管理 今山大師
所有者 延岡空襲殉難碑建立委員会
御祭神 二九二柱 太平洋戦争延岡空襲殉難者
建立日 昭和五十三年六月二十九日
碑文
表 昭和十六年十二月八日勃発した太平洋戦争はわが軍の真珠湾奇襲作戦により、前半には勝利をおさめたが、米軍の物量と科学戦による攻撃で逆転、昭和二十年八月十五日遂にわが国の敗戦に終わった
この間本土への空襲は激化し軍需工場群を擁した延岡市に於いても二十年三月四日から終戦前日まで十数回の空襲をうけ

とくに二十年六月二十九日午前一時十五分から三時間にわたるB29爆撃機四十余機による油脂焼夷弾攻撃は投下約五十万発、市中心部は一瞬のうちに火の海になり、その劫火の中を市民は阿鼻叫喚辛うじて五ヶ瀬大瀬河原に避難したが、まさに戦争が生んだ悲劇であった。

恐怖の一夜が明けると市街地の大半は一本も残さず焼きつくされ一望焦土と化しているのを市民は茫然と眺めながら肉親をもとめて右往左往するのみであった。この焼夷弾攻撃による被害は別記の通りであるが、銃後を護る市民をはじめ学徒挺身隊、産業報国隊など非戦闘員の殉難者は実に三百名を越えた。終戦後三十三年を経た今日各方面の浄財によって新しくこの延岡空襲殉難碑を建立、その霊を弔うとともに悲惨なる戦争の絶滅を期し世界の永久平和を祈念するものである。

昭和五十三年六月二十九日

延岡空襲殉難碑建立委員会

裏
延岡市の戦災に於ける損害

戦災死者 三百余名

重軽傷者 多数

戦災面積 九十二万坪（三千四十一平方料）

被災人口 一萬五千二百三十二人 当時の人口（七萬二千六百人）

被災戸数 三千七百六十五戸 当時の戸数（一萬四千三百）

戦災地域

川中地区 新町 柳沢町 本町 南町 中町 北町 船倉町 天神小路 並に本小路 櫻小路の一部

川北地区 紺屋町 元町 博労町 祇園町の東側 瀬之口 並に萩町 北小路の一部 恒富地区 川原町 春日館通り 第二下出口 三ッ瀬 新小路 並に出口 西小路 本村の一部

南方地区

大貫の一部

軍需工場

日室化学工業株式会社（薬品部 ベンベルグ部 プラスチック部 雷管部 レーヨン部 ダイナマイト部） 間野航空株式会社等に被害甚大

橋 梁 五ヶ瀬橋 須崎橋 大瀬橋の各一部焼失

恒富地区 南方地区の水田に焼夷弾多数投下

西口玄豊謹書
施工者 福原明

岡富地区

招魂碑



所在 延岡市山下町二丁目三八七五（今山八幡宮境内）

管理 今山八幡宮

所有者 不明

御祭神 八十柱 西南戦争延岡隊戦歿者

建立日 大正五年四月八日

沿革 平成二十年八月吉日移転

慰霊祭 四月

特記事項（招魂碑由来）

明治十年西南戦争に際し、旧内藤藩士は延岡隊を編成し各地に転戦多くの戦死傷者をだした。生存者有志によって大正五年に石碑が建立され、裏面に戦死者八十名が刻印され、永くその歴史を残し明治十一年に慰霊祭が行われて以来、毎年四月廿日に斎行されている。

中央通り

命の橋



所在 延岡市中央通三丁目（安賀多橋北詰）

建立日 平成二十五年二月十一日「命の橋」座石建立の会

延岡市「命の橋」実行委員会

碑文

命の橋

太平洋戦争末期の昭和二十年（一九四五年）六月二十九日に、延岡市内の中心部は大空襲によって焼け野原となりました。その時、安賀多橋の下へ多数の市民が逃げ込み助かりました。この橋はまさに命の恩人です。

この度、延岡市制施行八十周年を記念して安賀多橋を「命の橋」として顕彰し、永久に平和の尊さを後世に伝えたいと思います。

平成二十五年二月十一日

建立者「命の橋」座石建立の会

延岡市「命の橋」実行委員会

表題揮毫 植野聖鳳

撰文 吉田千鶴子

石材寄贈（有）林田石材

恒富地区 恒富町

日露戦役記念碑



所在 延岡市恒富町四丁目二〇七（春日神社境内）

管理 春日神社

所有者 延岡市恒富地区遺族会

御祭神 五十五柱

慰霊祭 四月

恒富地区 小野町

日露戦役記念碑



所在 延岡市小野町五九一七（小野神社境内）

管理 小野神社

所有者 不明

御祭神 十五柱

建立日 明治三十九年五月

恒富地区 平原町

殉国烈士之墓



所在 延岡市平原町（平原共同墓地）

管理 不明

所有者 延岡市恒富地区遺族会

御祭神 七十柱

建立日 昭和二十四年十月

慰霊祭 四月二十七日

恒富地区 三須町

招魂碑 日露戦没従軍者記念碑



所在 延岡市三須町六四九（三須神社境内）

管理 三須神社

所有者 不明

御祭神 招魂碑 不明 記念碑 十六柱

建立日 招魂碑 昭和三十三年五月 記念碑 明治三十九年

恒富地区 浜町

慰霊碑



所在 延岡市浜町（浜町墓地内）

管理 不明

所有者 延岡市恒富地区遺族会

御祭神 十五柱

建立日 昭和五十三年八月十五日

慰霊祭 四月二十七日

恒富地区 別府町

戦没者慰霊塔



所在 延岡市別府町（別府町霊園内）

管理 不明

所有者 延岡市恒富地区遺族会

御祭神 二十四柱

建立日 平成二年九月

慰霊祭 四月二十七日

恒富地区 方財町

支那事変大東亜戦殉國戦士之墓



所在 延岡市方財町（延岡市方財町墓地公園内）
管理 不明
所有者 延岡市恒富地区遺族会
御祭神 八十七柱
建立日 昭和三十一年八月
慰霊祭 四月二十七日

上三輪地区

日露戦役記念碑



所在 延岡市上三輪町三六四三一（地福寺境内）
管理 不明
所有者 不明
御祭神 十九柱
建立日 明治四十四年
慰霊祭 四月

南浦地区 熊野江町

忠魂碑



所在 延岡市熊野江町
管理 不明
所有者 不明
御祭神 六柱
建立日 大正十二年三月十日

南方地区 岡元町

慰霊碑



所在 延岡市岡元町二二九（岡元神社境内）
管理 岡元神社
所有者 不明
御祭神 十四柱
建立日 昭和五十五年八月

東海地区 鹿小路

大東亜戦争戦死者之墓



所在 延岡市鹿小路（鹿小路墓地内）
管理 不明
所有者 不明
御祭神 十柱
建立日 不明

東海地区 大武町

慰霊碑



所在 延岡市大武町一九六（大武神社境内）
管理 大武神社
所有者 不明
御祭神 四十柱
建立日 昭和五十年六月吉日

南方地区 貝の畑町

慰霊碑



所在 延岡市貝の畑町（貝之畑集会所内）
管理 不明
所有者 不明
御祭神 十四柱
建立日 昭和六十一年六月吉日

南方地区 吉野町

慰霊碑



所在 延岡市吉野町一八四七（吉野宮農集会所内）
管理 不明
所有者 不明
御祭神 二十一柱
建立日 昭和五十二年九月吉日

東海地区 無鹿町

慰霊之碑



所在 延岡市無鹿町（無鹿墓地内）
管理 不明
所有者 不明
御祭神 二十七柱 大東亜戦争戦死者
建立日 平成十一年四吉日

我が祖国の勝利を信じつつ大東亜戦争に参加し大陸の荒野に
又は南海の海に或は極寒の地にと若くして逝った同胞諸兄の
悲運と無念を思えば胸に迫り深い哀悼の念を禁じ得ません
茲に諸兄方を合祀する碑を建立末永くその霊を慰めんと思ふ
安らかに静まり下さい
平成十一年四月吉日

南方地区 高野町

戦歿者之碑



所在 延岡市高野町（高野公園内）
管理 不明
所有者 不明
御祭神 二十二柱 大東亜戦争戦歿者
建立日 昭和四十五年一月

碑文
此ノ招魂碑ハ高野町ヨリ大東亜戦争ニ参加サレ尊イ命ヲ国ノ
為ニ捧ゲラレテ戦死又ハ戦病死サレタ方ノ魂ヲオ祭リスル為
町内全戸ヨリノ出資ト労働奉仕並ニ御有志ノ御寄付ニ依リ建
設ス

慰霊碑



所在 延岡市細見町（細見農業集落多目的集会所内）
碑名 従四位勲三等功四級 中村肇 謹書
管理 不明
所有者 不明
御祭神 一〇七柱 日露戦争以降大東亜戦争までの戦死者
建立日 昭和四十七年三月十日
碑文 本碑は日露戦争以降大東亜戦争終結に至るまでの戦死戦没者の霊を茲に合祀す
昭和四十七年三月十日

細見郷友会
細見町一同

戦災記念碑・英魂碑



所在 延岡市大貫町六丁目一八七〇（大貫神社境内）
管理 大貫神社
所有者 不明
御祭神 不明
建立日 戦災記念碑 昭和二十年六月二九日
英魂碑 昭和二十七年四月吉日
慰霊祭 四月
碑文（戦災記念碑）
昭和二十年六月二十九日太平洋戦争において米空軍焼夷弾攻撃に依り罹災す

大貫神社
長照院

日露戦役記念碑



所在 延岡市天下町（天下地区多目的集会施設内）
管理 不明
所有者 不明
御祭神 八十四柱 日露戦争戦死者
建立日 大正十年四月一日
沿革 平成十五年三月移転

慰霊碑



所在 延岡市舞野町二六七二（舞野神社境内）
管理 不明
所有者 舞野地区自治会
御祭神 二十一柱 日中戦争から大東亜戦争戦死者
建立日 昭和五十年三月二十一日

慰霊塔



所在 延岡市野地町二丁目三八一四（野地神社境内）
管理 野地神社
所有者 不明
御祭神 二十八柱
建立日 昭和四十年一月
慰霊祭 四月

招魂碑



所在 延岡市野田町四八二五（野田神社境内）
管理 野田神社
所有者 不明
御祭神 二十六柱
建立日 昭和三十一年二月

忠魂碑



所在 延岡市北浦町古江二五〇一六一（北浦運動公園内）
碑名 宮垣一述 謹書
管理 不明
所有者 延岡市北浦町遺族会
御祭神 三十七柱
建立日 昭和二十九年三月

慰霊塔



所在 延岡市北川町長井（北川小学校北側）
管理 不明
所有者 延岡市
御祭神 三九四柱
建立日 昭和四十三年八月十五日

平和の礎



碑文 義勇公ニ奉ズルハ人ノ貴キ行為ナリ 私ヲ顧ミズ身ヲ挺シテ 難ニ赴キシ諸子ノ霊ヲ慰メムト人々心ヲ盡シテ碑ヲ建テ永ク 奉祭ス
昭和四十三年八月十五日
北川村

所在 延岡市北方町川水流卯一四二〇（北方健康福祉センター敷地内）
碑名 黒田一芳 書
管理 不明
所有者 延岡市北方町遺族会
御祭神 五十三柱 日清・日露・日独・大東亜戦争戦死者
建立日 昭和三十四年三月
沿革 平成十七年十二月移設
慰霊祭 四月
碑文 日清・日露・日支・大東亜戦に於て日本の安泰と古里の繁栄を願いつつ戦禍に散った五百十三名の英霊を未来永劫顕彰するため終戦六十周年記念事業として「平和の礎」を建立する
平成十七年十一月吉日

「平和の礎」建設奉賛会
柳田 昭
北方町長
黒田 一芳
北方町議会議長
黒木 眞純
施工業者
米田石材㈱

日向市

日向市

殉国慰霊塔



所在地 日向市大字富高古城ヶ丘
所有者 日向市
管理者 日向市各遺族会
御祭神 一、三六九柱
建立日 昭和三十六年十一月
慰霊祭 十月 日向市主催により、市内の各遺族会、奉賛会
参列による追悼式が執り行われている。
碑文 古くは西南の役以来 護国の華と散りたまひし あ、千三百
余柱の 尊いみたまをしすめまつり
感謝の慰霊のまことを捧げる みたまよ こ、見はるかす高
台の 古城か丘にしすまりまして
伸ひゆくわかふるさつを守り 幸を得させたまえ われらも
また そのみ心にそ力を合わせ
世界の平和と 郷土の繁栄に ひらすらなる努力を誓い 全
市民のまご、ろをもつて この塔をたてる
昭和三十六年十一月
慰霊塔建設委員会、長 藤井満義
光村牧野光男

岩脇地区

忠魂碑



所在地 日向市大字平岩御崎ヶ鼻公園内
日豊国定公園のリアス式海岸を望む岩礁にある。
所有者 日向市（敷地） 日向市岩脇地区遺族会（碑）
御祭神 一五三柱 遺族会長によると大東亜戦争まで
かつては旧村時代（幸脇区域を含め）二〇三柱（二
〇八柱とも）が祀られていたとの事。
建立日 大正六年十月（平岩小学校庭）
沿革 昭和二十八年三月移転
慰霊祭 十一月（三年毎）
碑文 建設委員、地区名、戦死者名が書かれているが、劣化の為解
読が不可能。

美々津地区

忠魂碑

所在地 日向市美々津町黒岩
沖合の灯台を遠望する高台に建つ
碑名 陸軍大将 大久保春野書（日露戦争第六師団長、正
三位勲一等功三級男爵）
所有者 日向市
管理者 遺族会は忠魂碑への護持は携わっていないという。
近隣住民の奉仕により周囲の清掃を行っている。

幸脇地区

英魂



所在地 日向市幸脇（湊柱神社境内域に接する）
日豊海岸国定公園の最南端。耳川河口の権現崎公園内に建つ。
所有者 日向市幸脇地区遺族会
御祭神 五十九柱（日露戦一柱、シベリア戦一柱、日支事変
四柱、大東五十二柱）
建立日 昭和三十五年二月二十三日
沿革 松田小太郎総代以下、建設委員として志田稔、本田
令喜、柄本丑松、黒木畠市、青木キノ、平石ニシキ、
日高イチエ、そして江藤富吉遺族会長らが中心とな
り働きかけ建立した。
慰霊祭 三月
碑文 戦没者氏名 建設委員等が刻まれたものが建つ。

御祭神 一二八柱（遺族会に聞いたところ、戦役別柱数は不明）
建立日 大正十一年（十年秋とも）
慰霊祭 独自の慰霊祭は行っていないが、例年三十人前後が
市の合同追悼式典に出席している。日向市は十一月
戦没者追悼式を催しており、戦役者その他は旧東郷
町を含め一、七八九柱。内訳は西南の役六、日清戦
争五、日露戦争三十、シベリア出兵四、満州事変九、
日華事変五十八、大東亜戦争一、一五六、その他（軍
属など）十との事。
特記事項

隣接する通称「軍人墓地」には約九十の墓石が建つ。一角の「お
きよ丸」船長、矢野源吉氏の墓石もその一つ。おきよ丸は皇
紀二千六百年祭に合わせ、古代船に模し建造された。有志が
神武天皇を祀る橿原神宮に詣でた大航海は神武天皇東征の故
事に倣い全国に広く喧伝された。
源吉氏の墓石正面には「征海院源譽澄心居士位」、側面には「故
人ハ美々津ニ生レ青年時代ヨリ船長トシテ雄飛ス 紀元二千六
百年神武天皇御船出ノ際ニハオキヨ丸船長トナリ其重責ヲ果
ス 昭和十九年十月七日南支那甲海ニテ戦死ス 行年五十一歳」
「昭和二十八年十二月 矢野ミキエ建立 海軍軍属 矢野源吉之
墓」と刻まれている。



細島地区

英魂



所在地 日向市大字細島桜ヶ丘
管理者 日向市細島地区遺族会
所有者 日向市
御祭神 二二八柱
建立日 昭和二十七年三月二十二日
慰霊祭 四月第一日曜日
毎年四月第一日曜日、神式により細島地区遺族会の
み参列の慰霊祭が執り行われている。

東郷地区

忠魂碑

所在地 日向市東郷町山陰幸十二 成願寺境内
管理者 東郷町遺族会
所有者 東郷町遺族会
御祭神 四二〇柱
建立日 大正七年十一月 山陰神社境内に建立
沿革 太平洋戦争の敗戦の影響で昭和二十七年に現在地へ
移動。碑倒壊の危惧があった為に平成元年四月一日
に再建された。
慰霊祭 四月三日前後の日曜日 鎮座地の成願寺住職により
仏式にて慰霊祭が執り行われている。
碑文

この忠魂碑は我が国建国の歴史の中に起きた西南の役、日清、
日露の戦い、そして太平洋戦争に至る数次の戦いにおいて出
征され国家安泰と世界平和を信じつつ国難に殉じた方々の御
霊の誠を捧げ永久平和の願いをこめて建立するものである。
尚この碑は大正七年に山陰神社境内に建立されていたが、太
平洋戦争の敗戦とともに一時期撤去埋没されていたものを、
昭和二十七年この地に再建したものである。爾来、三十有余
年台座の亀裂により倒壊が危惧されるようになったために、
東郷町社会福祉協議会において町民、並びに関係者各位の浄
財を仰ぎ改築したものである。
平成元年四月一日

東郷町社会福祉協議会 会長 高森文夫
忠魂碑改築実行委員会 委員長 橋口昭夫
委員 川原塩江 委員 中野辰巳
〃 佐藤輝夫 〃 那須只郎
〃 田代安夫 〃 若藤寅男
〃 都甲鶴男



財光寺

神風特別攻撃隊出撃之地碑
(富高海軍飛行場跡)



所在地 日向市財光寺一九四一三
管理者 医療法人向洋会協和病院
所有者 医療法人向洋会協和病院
御祭神 合祀者数は不明。神風特別攻撃隊員、基地に従事した一般市民、動員学徒、朝鮮人、中国人労働者、米兵の御霊。
建立日 昭和三十五年
沿革 この付近一帯は第二次世界大戦末期に特攻基地となった富高海軍飛行場の跡地である。医療法人向洋会協和病院の初代理事長が飛行場の関係者であったことから、その跡地に病院及び、慰霊碑が建立された。
慰霊祭 昭和五十二年八月再建。
八月中旬 医療法人関係者のみの追悼式を執り行っている。
碑文
コノ附近一帯ハ、第二次世界大戦末期 特攻基地トナツタ旧海軍航空隊富高飛行場ノ跡デアル。
コノ記念碑ハ、祖国ノ難ニ殉ジテコノ基地ヲ飛ビ立チ、征イテ再ビ還ラザリシ神風特別攻撃隊ノ英霊、並ビニ、コノ基地ノ建設ニ従事シ、不幸傷病ニ斃レタ一般市民・動員学徒・朝鮮人・中国人労働者ノ霊、及ビ遠クコノ地異国ノ空ニ散華シタ米国空軍将兵ノ霊ヲ弔ウタメニ建立サレタモノデアル。
昭和三十五年 秋 協和病院
昭和五十二年 再建

美郷町西郷地区

忠魂碑



所在地 東臼杵郡美郷町西郷区田代三一九
管理者 西郷遺族会
所有者 美郷町
御祭神 二六八柱
建立日 昭和五十二年九月
慰霊祭 三月末
社会福祉協議会主催において戦没者追悼式が執り行われている。美郷町合併以前は、神式にて慰霊祭が執り行われた後に、仏式にて同様に慰霊祭が執り行われていたが、現在は式典のみである。

美郷町北郷地区

英魂

所在地 東臼杵郡美郷町北郷宇納間四四〇
管理者 北郷遺族会
所有者 北郷遺族会
御祭神 三二二柱
建立日 昭和二十八年九月
沿革 平成十三年七月、村道バイパス路線工事の為、北郷小学校より現在地に移転となる。

東臼杵郡

門川町

戦役記念碑



所在地 東臼杵郡門川町大字門川尾末一七二八二一(門川神社内)
管理者 門川町遺族会
所有者 門川町遺族会
御祭神 五八四柱
建立日 大正十一年(慰霊碑) 昭和三十一年三月三十一日(慰霊殿)
慰霊祭 四月中旬
遺族会及び門川町合同の慰霊祭を年一回四月中旬頃、門川町中央公民館にて来賓者を招き執り行っている。
平和と慰霊の碑
美郷町南郷地区
所在地 東臼杵郡美郷町南郷区神門 南郷総合運動公園
管理者 南郷遺族会
所有者 美郷町
御祭神 二八〇柱
建立日 平成十七年十月

慰霊祭

十一月

戦後五十年まで神式にて慰霊祭が執り行われていたが、その後は美郷町社会福祉協議会北郷事業所主催により追悼式のみ執り行われている。

碑文

招魂碑

北郷小学校々庭南端に昭和初期に建立された、日清、日露の両戦役、シベリヤ、満洲支那事変で戦病死した三十八柱を合祀し村主催で毎年招魂祭を開催していた
英魂碑
昭和二十八年九月に寄付金四三万円と無事生還した復印軍人を中心村民延出動人員一二一五人の内九五三人の尊い奉仕作業により北郷中学校横の台地に立派な英魂碑が建立された。
碑石、寄進者は小八重の黒木藤四郎氏、碑名英魂の大文字は当時の村長、宇和田源藏氏の直筆である平成七年まで社協主催を行い其の後、追悼式を開催して来たが、辰の元長野線の村道バイパス路線の用地にかかり移転することになり平成十三年七月現在地に移転建立された 合祀された英魂は板石に銘記された三二二柱で全員二、三十代の日本の宝、若き尊き若者であった建立用地は村有地貸与で村当局村議会の御理解により現在地に決定した建設に当り関係各方面の御協力に深く感謝し後世のため特記するものである
平成十三年七月吉日



北郷村社会福祉協議会会長(村長) 山本 進
北郷村遺族会長 梅田 重男
施工 株式会社 甲斐建設
建設費総額 一三七五万円
完工 平成十三年七月吉日

沿革 各地区の神社にて祀られていた慰霊者を、平成十七年に合祀し慰霊碑として建立。
慰霊祭 十一月中旬
社会福祉協議会主催において多目的研修センターにて実施されている

碑文

先の太平洋戦争の終戦から六十周年の節目、町村合併により南郷村最後となる年を記念して、戦没者の慰霊と永遠の世界の平和を祈念する碑をここに建設する。
戦後六十年間、わが国は驚異的な復興を遂げ、豊かな日本、そして今日の南郷村築いたのであります。このことはひとえに平和な時空と国民の勤勉な努力の賜であります。
しかし、過去の大戦においては、幾度春秋に富む若き尊き命が国に殉じて戦場に葬られ、痛ましい犠牲となりました。
私ども国民の身代わりとして身を国家に捧げられました二百八十人の御魂に対して肅然かつ痛切の思いを後世への記録として残すことに致しました。
私達が、新しい日本社会をめざして、今日に至ったことは、ひとえに尊い犠牲と歴史の教訓によるものであります。
これらの数々の教訓にもかかわらず、人類は今もって暴力と戦争を克服できずにおりますことは、誠に残念なことであります。私達はますます世界の平和の為に、人類の福祉の為に邁進する事こそ、散華せられた英霊に應えるただ一つの道であると考えます。
戦争の歴史から時代が遠ざかる今、戦争の悲惨さ、平和の尊さを次の時代に語り継ぐ為、ここに平和と慰霊の碑を建立するものであります。
平成十七年十月



諸塚村

忠霊塔

所在地 東臼杵郡諸塚村大字家代三〇六六
管理者 諸塚村遺族会
所有者 諸塚村
御祭神 二九九柱
建立日 昭和二十六年
沿革 昭和二十九年の大風で被害にあった。その後昭和三十八年十二月十八日に、現在地に忠霊塔を再建した。
慰霊祭 四月最初の週(土日を除く) 献花方式
碑文
山紫水明こ、諸塚の山峡耳川の支流柳原川畔の一角に村人の真心をこめてこの塔を建て遠くは明治の役近くは大東亜戦に忠烈護国の華と散りたまいし尊、みたま二百九十九柱を鎮めまつる 吾等は英霊の功徳を信じ堅い決意をもって郷土の繁栄と世界の平和を祈念してやまない こ、に來り仰ぐ人人よ冀くは香華をたむけ敬禮と慰霊のまことを捧げまつられんことを
昭和三十八年十二月

諸塚村村長 黒木勝利
牧野光村謹書



忠霊塔



所在地 東臼杵郡椎葉村大字下福良五四番地二
碑名 靖國神社宮司 筑波藤麿 書
管理者 椎葉村遺族会
所有者 椎葉村
御祭神 三九一柱
建立日 昭和三十七年五月三十日
沿革 平成六年十一月に椎葉厳島神社境内より現在地に移転改修された。
慰霊祭 十月末最終の平日 追悼式の形で行う
碑文 緑こく水清らかな椎葉の里こ、厳島神社の境内に村人のまごころをこめてこの塔を建てて遠くは日清日露の役近くは第二次世界大戦に護國の華と散りたまひし三百九十餘柱の尊い命をまをすしめまつる われらは英霊の功德を信じ堅い決意をもつて郷土の繁栄と世界の平和を祈念してやまないこ、に來り仰ぐ人々よ冀くば香華をたむけて敬弔と慰霊のまことを捧げられんことを
昭和三十七年五月
椎葉村長 岡田基一

高千穂地区

戦歿者慰霊塔



所在地 西臼杵郡高千穂町大字三田井一四九八運動公園内
碑名 稲葉茂生書（高千穂地区慰霊塔）
管理者 甲斐畛常書（戦歿者慰霊塔）
所有者 高千穂町高千穂地区遺族会
御祭神 四九〇柱
建立日 平成二年八月一日 三田井公園に建立していたものを移転新設
沿革 平成十二年四月十七日に高千穂町制八十周年を記念して、戦歿者の氏名を刻印した板碑を建設
慰霊祭 九月の彼岸の後
町主催で町全体の慰霊祭は四月中旬に執り行われる。
特記事項 慰霊塔は高千穂地区遺族会により建立された。将来、他地区の慰霊碑合併の可能性を考慮して、町全体の碑と高千穂町遺族会の碑が建ち並ぶ。

高千穂町岩戸地区

慰霊塔



所在地 西臼杵郡高千穂町大字岩戸塔の尾一〇三六の一
管理者 高千穂町岩戸地区遺族会
所有者 高千穂町
御祭神 二四九柱
建立日 昭和三十二年五月二十一日
慰霊祭 九月下旬〜十月上旬
碑文 天岩戸慰霊殿ニハ日清戦争カラ大東亜戦争迄ノ戦没軍人軍属ト公務殉職者ノ英霊二百三十余柱ヲ御祀リシテアリマス慰霊殿ハ町補助三十五万四ノ外ハ遺家族ト地区住民ノ浄財トニヨリ建設費七十万四デ昭和三十二年五月二十一日竣工サレタモノデアリ敷地ハ神楽尾ノ工藤印氏ガ旧岩戸村在郷軍人会会長當時村ニ寄贈サレタモノデアリマス此記念塔ハ慰霊殿建設ノ由來ト戦没合記者ノ名前ヲ残シテソノ業績ヲ永ク後世ニタタエルモノデアリマス
昭和三十九年四月八日

高千穂町上野地区

慰霊塔



所在地 西臼杵郡高千穂町大字上野平底
管理者 高千穂町上野地区遺族会
所有者 高千穂町
御祭神 二二八柱
建立日 明治二十七年
沿革 昭和四十三年十一月、現在地に再建。
慰霊祭 春・秋の彼岸入りに仏式にて執り行われる。

高千穂町田原地区

奉霊殿



所在地 西臼杵郡高千穂町大字田原字後口野八八の二
管理者 高千穂町田原地区遺族会
所有者 高千穂町
御祭神 一九六柱
建立日 明治年代
沿革 昭和三十五年三月改築
慰霊祭 九月二十五日 仏式にて執り行われる

高千穂町三秀台

平和祈念碑

所在地 西臼杵郡高千穂町大字五ヶ所三秀台
碑名 平和祈念碑
管理者 平和祈念奉賛会
所有者 平和祈念奉賛会
御祭神 十三柱（日本人一柱、アメリカ人十二柱）
建立日 平成七年八月二十六日
慰霊祭 八月末の土曜日 鐘をならして献花を行う。
碑文 昭和20年（1945）8月30日夜半、一機のB29が、テニアン基地を飛び立った。折からの濃霧と雨の中を豊後水道から祖母連山を越えようとしていた超・空の要塞は、不幸にも12名の搭乗員を乗せたまま障子岳に接触し、親父山近くに墜落炎上、全員が死亡した。福岡県にある連合国軍捕虜収容所へ救援物資を投下する最後の任務途中での事故であった。また、同じ月7日夕刻、飛行第65戦隊所属の徳・義仁軍曹は夜間航法訓練のため隼機に搭乗して佐賀県目達原基地を飛び立ったまま消息を絶ち、終戦に至った。その年の暮れに同機は、この丘に近い河内の山中で発見された。戦後50年が過ぎた今日、この平和を享受する私たちは、かつて日米両軍の若者の尊い命が、この地で失われたことを改めて思い、恒久の平和と両国の友好を願い、この碑を建立する。
平成7年（1995）8月26日
平和祈念碑建設実行委員会



忠霊塔



所在地 西臼杵郡日之影町大字七折九〇七九
管理者 日之影町奉賛会
所有者 日之影町遺族協定会
御祭神 五八二柱 ※移転改築碑には六四五柱と記載あり
建立日 昭和二十九年九月二十三日

五ヶ瀬町鞍岡地区

忠霊塔

所在地 西臼杵郡五ヶ瀬町大字鞍岡五八九六の一
碑名 熊本師團長 萱嶋中将書
管理者 五ヶ瀬町鞍岡地区遺族会
所有者 五ヶ瀬町
御祭神 一一六柱
建立日 昭和十八年五月十日
沿革 (忠霊塔改修記念碑文)
今から四十年前建立された忠霊塔も永い風雪に破損がひどく此際大改修することが建立当時の大先輩に報ゆることであり又英霊に対する最大の供養と信じ遺族会が中心となり地区内各位の御協力御芳志により大改修をなす

(忠霊塔境内整備記念碑文) 平成元年三月
このところ忠霊塔をとりまく環境は吉野桜を始め花木は老朽化の現況にあり此際遺族会こそって其力を結集し 併せて有志の御芳志を賜わり境内公園化整備を計り以って英霊の末永い安眠を願わんと 本事業を成就す
慰霊祭 四月十二日(土日の場合は平日) 町主催にて献花方式で行う。

碑文

本村出身帝国軍人ニシテ日清戦争以来皇国ノ為出征又ハ出動シ赫々タル武勲ヲ樹テ護国ノ神ト化セラレタル忠勇義烈ノ英霊シ、合祀シ而シテ其ノ遺烈ヲ永遠ニ偲ビ且ツ勲功シ崇メ篤ク敬仰ノ念シ捧ゲ以テ其ノ忠霊ヲ顕彰スル、皇國ノ國體ニ徴シ且ツ國民道德上看過シ能ハサルハ勿論時局下最モ緊急事タルヲ痛感シ本村ニ於テハ常ニ熟慮考案ヲ描キツ、アリシモ財源其他種々ノ事状ニヨリ荏算今日ニ及ヒタリシカ道々支那事变ハ流搏大東亜戦争ト化シ皇國ノ安危存亡ノ愈々到来セシノ感一入深キテ加フルニ至リタシ以テ萬難ヲ排シテ之力建設ノ急務ナルヲ更ニ痛感スルニ至リ本村在郷軍人分会主催トナリ村後援ノ下ニ之力建設を劃策シ協議セシ處村民一同ハ欣然トシテ之ヲ迎ヘ熱烈ナル協力ト賛意ヲ表シタルシ以テ忽チ展望絶佳ニシテ然モ森原極リナキ祇園神社ノ隣地ニ聖地ヲ定メ昭和十七年秋将ニ深カラントスル十月二日起工式ヲ舉ケ之レカ建設ニ着手セリ然シテ本計劃一度江湖ニ告クラレルヤ本村住

沿革 平成十五年十一月十日 移転竣工
(移転改築碑文)

昭和二十九年に町役場敷地に内に建立された日之影町戦没者忠霊塔は老朽化が激しく、また役場敷地内は狭隘なため周辺の整備も検討されてきた。日之影町戦没者遺族協定会では「忠霊塔移転建設委員会」を設置し、戦後六十年来をめぐりに移転改築を行うこととした。忠霊塔は、国のため一身を投げ打ち今日の平和な日本の礎となった戦没者の御霊をお祠りするとともに戦争の悲劇と歴史を後世に残し、真の平和を念願するものである
建設に当たっては遺族協定会、遺族婦人部、壮年部を中心とし、各公民館、篤志者からの寄付を仰ぎ更に、町当局並びに町議会の援助によりこの地に移転建立した。
慰霊祭 四月十五日 神式にて執り行われる
碑文

昭和二十年八月大東亜戦に敗れるや占領軍の進駐するところとなり日清日露の殉国勇士の碑等も破壊せざるのやむなきに至りぬ昭和二十八年四月待望せし講和条約の発効をみるや町民挙つて浄財を寄進し本町出身元陸軍々人軍属四百三十二柱、元海軍々人軍属百二十九柱其の他公務死者二十一柱の英霊を奉安し慰霊と感謝の誠を捧ぐ
昭和二十九年九月二十三日

特記事項
遺族会の高齢化により、後継者不足が心配される為、曾孫の会の発足を検討中。

五ヶ瀬町三ヶ所地区

忠霊塔

所在地 西臼杵郡五ヶ瀬町大字三ヶ所二二一九の四
碑名 陸軍大臣 東条英機謹書
管理者 五ヶ瀬町三ヶ所地区遺族会
所有者 五ヶ瀬町
御祭神 二四二柱
建立日 昭和二十年十月一日

民ハ勿論各方面ヨリ絶大ナル聲援ヲ賜リ浄財ノ寄附ニ将又苑内ノ開墾ニ整元ニ或ハ諸材料ノ集荷運搬等ノ各種作業ニ喜色露然トシテ勤勞奉仕ニ精進シタルノ結果区定ノ如ク工事ハ順調ニ進找シ新緑滴ル昭和十八年五月十日ヲトシ盛大ナル除幕式竝ニ納骨慰霊ノ式典ヲ舉行スルコトヲ得タリ抑モ本忠霊塔ハ其ノ規模状美ニ於テハ敢テ雄大ナラフト極北ノ忠霊塔ニ結集セラレラル村民ノ熱意ト各方面ヨリ、聲援竝ニ忠霊ニ對スル感謝感激ノ念ハ實ニ絶大ナルモノアリト謂フベク時局愈々重大シ加フルノ秋皇國ノ為寔ニ意ヲ強フシ且ツ慶賀措タ能ハサル次第ナリ茲に本忠霊塔建設ノ記事ヲ録シテ後世ニ傳フ云々因ニ本三事費竝ニ之レガ建設ニ盡瘁セラレタル諸子、芳名シ左ニ記ス
特記事項 招魂祭のうた
くすしき骸は埋めねど み魂はここに在しよさん 世にある人もなき人も 同じ心の友なるを
あな憂れたしやかくり世に 行き交うすべもあらざれば 朝な夕なに慕わしき
み魂をここに招かいで 供えまつれるみてぐらを 聞こし召さえとうたうなり



沿革 (忠霊塔改修記念碑文)

五ヶ瀬町三ヶ所地区忠霊塔は昭和二十年十月竣工以來四十八年の星霜を経て今日に至ったこの間長い年月の風雨雪により忠霊塔に刻字された英霊の氏名が摩耗し判読困難な状態となったので茲に改めて氏名盤を修復し御霊の聞こえに安らかに鎮まりますことを願ひこれを後世に継承するものである
平成七年五月一日

慰霊祭 四月二十五日(日曜日の場合は二十四日) 献花方式にて執り行う。

特記事項 招魂祭のうた
くすしき骸は埋めねど み魂はここに在しよさん 世にある人もなき人も 同じ心の友なるを
あな憂れたしやかくり世に 行き交うすべもあらざれば 朝な夕なに慕わしき
み魂をここに招かいで 供えまつれるみてぐらを 聞こし召さえとうたうなり



西都市

妻地区

招魂碑



所在地 西都市大字三宅字尾筋東上三〇五七一
所有者 西都市
御祭神 三四三柱 大東亜戦争戦歿者
建立日 昭和二十九年十月二十三日
沿革 平成七年八月十五日、戦没者芳名板を建立。
終戦五十周年に当り忠霊塔に戦没者の御芳名を刻して後世に伝え英霊を顕彰し恒久平和を祈念する
慰霊祭 年一回 西都市による合同追悼式(招魂碑前では行われていない)

忠霊塔



所在 西都市大字南方三二四六 南方神社境内
所有者 西都市穂北地区奉賛会
御祭神 三二七柱 支那事变並びに大東亜戦争戦歿者
建立日 昭和二十九年十二月 ※新規戦没者記名板には昭和三十年三月と記載。
沿革 平成八年八月十五日、戦没者記名板を改修。
(碑文)
この碑と同時に造られた記名塔の戦没者名も風雨のため判読困難になりつつあります
終戦五十年に際しその名を刻し 永遠にその栄誉を称えます
平成八年八月十五日
慰霊祭 八月十五日
碑文
ここに日清戦争より太平洋戦争に至る間祖国の尊い礎となった村内戦没者の英霊を合祀し永遠に仰ぐ平和の象徴として子々孫々に伝えるものである
昭和二十九年十二月吉日建立
上穂北村忠霊塔建設委員会

忠魂碑



所在 西都市大字三納字長谷場三三八一
管理 西都市三納地区遺族会
所有者 西都市
御祭神 二八六柱
戊辰の戦役 三柱 西南戦争 十柱
日清戦争 二柱 日露戦争 二柱
支那事变 二柱 大東亜戦争 二六七柱
建立日 昭和二十八年十一月十五日
沿革 平成七年十一月十五日、戦没者芳名板を建立。
(碑文) 昭和二十八年に建立された、忠霊碑の戦没者名も風雨のため判読困難となり終戦五十年に際し、ステンレス板にその名を刻し、永遠にその栄誉を称えます。
平成七年十一月十五日

忠魂碑

所在 西都市大字銀鏡 銀鏡神社境内
碑名 元帥陸軍大將子爵 上原勇作書
管理 銀鏡神社
所有者 銀鏡神社
御祭神 八十八柱
建立日 大正十五年
沿革 平成七年八月十五日、戦没者記名板を建立。
(碑文) 終戦五十周年を向へ記念事業として忠魂碑に英霊の尊名を記し建立する平和な日本も命達の尊い犠牲の上にこそ、現在の繁栄があることを忘れてはならない永遠に英霊の顕彰を培いとしえに鎮魂の感謝の誠を捧げる
平成七年八月十五日
慰霊祭 十月末日
碑文(終戦五十周年記念事業碑文)
特記事項 同地に日露戦役記念碑あり



忠魂碑

所在 西都市大字尾八重
碑名 元帥陸軍大將子爵 上原勇作書
所有者 尾八重神社
管理 尾八重神社
御祭神 七十一柱
建立日 昭和四年二月
沿革 平成七年八月十五日、戦没者記名板を建立。
(碑文) 終戦五十周年を向へ記念事業として忠魂碑に英霊の尊名を記し建立する平和な日本も命達の尊い犠牲の上にこそ、現在の繁栄があることを忘れてはならない永遠に英霊の顕彰を培いとしえに鎮魂の感謝の誠を捧げる
平成七年八月十五日
慰霊祭 十月末日
碑文(終戦五十周年記念事業碑文)
特記事項 同地に戦役記念碑あり(明治四十三年十一月一日 建立)



慰霊祭 十一月十五日
碑文
支那事变以後大東亜戦争に戦没したる英霊を慰めるため村民の浄財によりこの碑を建立したものである。
三納村長 黒木 正英
昭和二十八年十一月十五日
特記事項 同地に各戦役の忠魂碑あり

忠魂碑 招魂碑 招魂之碑

所在 西都市大字下三財二八二二
管理 西都市三財地区遺族会
所有者 西都市
御祭神 三一〇柱の英霊
建立日 忠魂碑 明治二十六年四月三日
招魂碑 明治三十九年五月一日
招魂之碑 明治十六年六月
慰霊祭 奉賛会主催 十一月十八日
会員のみ参拝 八月十五日
遺族会主催 三月二十日、又は三月二十一日



殉国忠霊塔

所在 西都市大字荒武字土橋四一五一
管理 西都市都於郡地区戦没者遺族会
所有者 西都市都於郡地区戦没者慰霊奉賛会
御祭神 二一〇柱 大東亜戦争都於郡地区戦歿者
建立日 昭和三十六年十二月
沿革 平成七年八月十五日、戦没者記名板を建立。
(碑文) 終戦五十年に当り忠霊塔に戦没者の御芳名を刻して世に伝え御英霊を顕彰し恒久平和を祈念する
平成七年八月十五日
慰霊祭 十月二十四日
特記事項 同地に日露戦役記念碑あり。



児湯郡

都農町

殉国忠霊塔

所在地 児湯郡都農町川北一三三六番地三
碑文 靖国神社宮司 筑波藤麿書
所有者 都農町遺族協定会
管理者 都農町遺族協定会
御祭神 六五八柱
建立日 昭和三十九年四月二十日
沿革 (建設の概要碑文)
昭和三十七年都農町遺族会を中心とする有志の間に永久的慰霊塔建設の声おこり翌年六月都農町殉国慰霊塔建設奉賛会の結成となり工事計画と資金の調達をはかる幸にして遺族会をはじめ町民の深き理解と協賛により全年十一月着工翌三十九年四月二十日完成工事関係者代表左のとおり
昭和三十九年四月

奉賛会長町長 長友俊明
町議会議長 塩月一朗
遺族共助会長 永友敬通

記

一、塔の高さ 八・二六米
一、塔台の高さ 二・九四米
一、塔台の面積 二四 平方米
一、敷地面積 九五二 平方米
一、設計 都農町殉国慰霊塔建設奉賛会
一、施工 三輪建設 三輪弘住
一、総工費 五百万円 (設備共一切)
慰霊祭 秋季 十一月十日 (一年おきに神式仏式で行う) ※
平成二十一年までは三月下旬にも執り行われていた。

碑文

花にも似たる君がいのち 短くはあれど 殉国の玉珠を捧げて散りたまひし あゝ六百二十余柱の 尊いたまをしづめまつり感謝と慰霊のまごころを 捧げるみたまよ こゝは神さびる古きゆ庭の 高台にしづまりまして 伸びゆくわが郷土を守り幸を得させ給へ われらも又 そのみ心にそい力を

木城町

忠魂之碑



所在地 児湯郡木城町高城城山
所有者 木城町
管理者 木城町
御祭神 三三八柱
建立日 明治三十九年四月
沿革 昭和三十三年四月再建
慰霊祭 四月三日 供養祭八月十五日
碑文

敷島の大和心を人間わば 朝日に匂う山ざくら花
この忠魂の碑は、我が国の過ぐる幾多の国難に際して、国のために戦死した三三八柱に対してその名をとどめ功績を称え、永久に感謝と慰霊の誠を捧ぐべく建立されたものである。

合せ平和のために ひたすらなる努力を誓い こゝに全町民のまごころをもつて この塔をたてる 名づけて 殉国慰霊塔という
昭和三十九年四月

慰霊塔建設奉賛会

特記事項 同所に忠霊堂建設記念碑、献歌碑、忠魂碑あり
○忠霊堂建設記念碑
碑名 秋月種英書
碑文

都農町ニ護国神社ヲ建設シテ過グル大戦ニ於ケル尊キ犠牲者ノ偉勲ヲ顕彰センコトハ戦没者ノ家族ハ固ヨリ町民拳ゲテノ悲願ナリシガ終戦後占領政策ハ峻厳ヲ極メ既存ノ忠魂碑撤去サエ要サルル状態ニテ其ノ実現ハ殆ド絶望視サルニ至レリ然レドモ小川平六氏ヲ会長トスル遺家族会之ヲ遺憾トシ萬難ヲ排シテ此ノ悲願達成ヲ願イ出町公園ノ忠霊塔ヲ都農神社東神苑ニ移シ靖国神社分社トシテノ遙拝所建立ヲ企図シ昭和二



十四年三月起工セリ工事ハ遺家族始メ町当局及び各種団体ノ献身的奉仕ニヨリ進メラレシガ竣工前神社ナリトノ理由ニ依リマッカーサー司令部ノ中止指令ヲ受ケテ止ムナク神殿形式ノ撤去等アラユル苦心ヲ拂イ数次ノ歎願ヲ重ネ漸ク司令部ノ認可ヲ得テ昭和二十五年九月忠霊堂トシテ完成スルヲ得タリ総工費四十八萬餘円内町補助二十萬円他ハ遺家族並ニ一般特志寄附ニヨル内合祀英霊六百十柱ノ位牌ヲ奉安ス茲ニ忠霊堂建設十周年ヲ記念シ碑ヲ建テ當時の苦心ヲ忍ブ資トナス
昭和三十四年四月五日
○献歌碑 ますらおの ゆくとふ道を 行ききわめ わが若人は ついに帰らず 元帥海軍大将 山本五十六
○忠魂碑 元帥陸軍大将子爵 川村景朗書

慰霊祭 四月三日
供養祭 八月十五日

戊辰の役 一八六八年～六九年 二名
西南の役 一八七七年 十五名
日清戦争 一八九四年～九五年 一名
日露戦争 一九〇四年～〇五年 九名
日中戦争
大東亜戦争 一九三七年～四五年 三十一名
合計三三八名
平成二十一年一月吉日

木城町社会福祉協議会
郷友軍恩木城支部
木城町傷夷軍人会
木城町遺族会

新富町

平和の塔

所在 児湯郡新富町大字上富田六三二番地 新富町平和公園内
管理 新富町社会福祉協議会 (平成十六年三月一日、遺族会より新富町社会福祉協議会へ贈与)
所有者 新富町社会福祉協議会
御祭神 六二二柱 (富田地区三二八柱 新田地区一九三柱)
建立日 平成十四年十二月
慰霊祭 慰霊祭 四月上旬 追悼式 八月十五日
碑文

明治、大正、昭和の戦争で日本の平和と繁栄の為に尊い生命を国に捧げられた六百余柱の英霊、後に残された遺族の悲しみ苦しみを再びこのような悲惨な戦争を繰り返す事のないよう後世に伝える事が我々の責務である。
ここに富田戦没者遺族会、新田戦没者遺族会が相諮り新富町のご理解を得て平和公園の一画に平和の塔を建立する運びになり、遺族ならびに多くの町内外賛同者の浄財を頂き完成したものであります。

富田の慰霊塔は昭和二十七年、新田忠霊塔は昭和二十九年に建立され、それぞれの遺族会で英霊の顕彰を行って参りましたが、塔の老朽化が進みまた遺族の高齢化・減少等により維持・

管理・英霊のお祀りが困難となっています。

我々両遺族会は一体となり英霊の奉慰顕彰を行うと共に二度と過去のあやまちを繰り返すことなく恒久平和を固く心に誓い平和の塔を建立するものである。
平成十四年十二月吉日

特記事項
同所に富田地区慰霊塔、新田地区忠霊塔を移設
富田地区慰霊塔 昭和二十七年十一月二十三日建立 (新富町大字上富田八〇一七より移設) 三二八柱
新田地区忠霊塔 昭和二十九年十月三十日建立 (新富町大字新田字牧神より移設) 二九三柱



西米良村（村所地区）

忠霊塔

所在 児湯郡西米良村大字村所八幡神社内
管理 西米良忠霊塔建設奉賛会
所有 西米良忠霊塔建設奉賛会
御祭神 二〇七柱
建立日 昭和三十七年五月二十七日
慰霊祭 三月二十日 九月二十三日
碑文
祖国ト民族ノ平和ヲ守ルヘク明治二十七年、八年戦役以来大平洋戦争ニ至ル間敢然起ツテ国難ニ殉ジラシ戦没者ノ尊キ英魂ヲ永久ニ祀リ慰メ後世住民ノ教化ニ資セント産土ノ辺リ元忠魂碑跡ヲトシ忠霊塔ヲ建立スル冀クハ英魂安ラカニ鎮マリ永遠ニ吾等カ郷土ヲ護リ給ハンコトヲ
昭和三十七年五月二十七日



西米良村（小川地区）

忠魂碑

所在 児湯郡西米良村大字小川二二〇番地一 沢水慰霊の森
管理 小川自治公民館
所有者 小川自治公民館
御祭神 二十五柱 日清・日露・日中・太平洋戦争に殉じられた英霊
建立日 昭和三十五年三月二十三日



都城市

中央地区

忠霊碑

所在 都城市小松原町（神柱宮西側公園内）
管理 都城忠霊碑奉賛会
所有者 都城忠霊碑奉賛会
御祭神 三、〇五九柱
建立日 昭和五十三年五月二十五日 都城護国神社跡に市民の寄付によって建立。
慰霊祭 十月第一土曜日
特記事項
同地に大戦役記念碑あり。（明治四十一年四月建立）



中央地区

都城空襲犠牲者追悼碑

所在 都城市前田町（神柱宮西側公園内）
碑名 都城空襲犠牲者追悼碑
管理 都城空襲犠牲者遺族会
所有者 都城空襲犠牲者遺族会
御祭神 八十八柱
建立日 平成十一年八月五日
慰霊祭 八月五日
碑文
第二次世界大戦の末期、米軍は沖縄本島への上陸に先立ち、南九州全域の軍事施設を攻撃した。都城は昭和二十年三月十八日早朝初めて空爆され、以降終戦まで二十回余の無差別爆撃によって、街は廃墟と化し多くの尊い人命が奪われた。街は戦後いち早く復興したが、空襲犠牲者については半世紀余も放置されてきた。戦後五十年の行事を通し「空襲犠牲者の掌握なしに、都城の戦後は終わらない」と、調査がはじまった。治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟県南支部と都城市の積極的なとりくみによって、四十四名の子供をふくむ八十八名の犠牲者が判明した。ここに、心から犠牲者を悼むとともに、恒久平和を誓い、追悼碑を建立する。
平成十一年八月五日



中央地区

戦災復興記念碑

所在 都城市大王町八一二付近（岩脇橋北交差点前）
管理 不明
所有者 都城市
建立日 昭和四十一年二月
都城市が大東亜戦争時、米軍機の空襲で甚大な被害を受けた戦災地の復興を祈念して建立。



志和地区

忠霊塔

所在 都城市上水流町 志和地の城山址
管理 不明



庄内地区

忠霊塔

所在 都城市庄内町一三四五一二（庄内児童公園内）
管理 都城市庄内遺族会
所有者 都城市庄内地区戦没者遺族協助会
御祭神 五六六柱
建立日 昭和三十年四月十六日
慰霊祭 十月十八日



庄内地区

庄内空襲之碑



所在 都城市庄内町一二六八〇番地（庄内小学校内）
管理 都城市庄内地区遺族会
所有者 庄内小学校
建立日 平成七年八月 庄内小学校同窓会有志を中心とした多くの協力により建立された。

特記事項

○昭和二十年当時、庄内小学校は日本軍の兵舎や食糧倉庫となっていたことから、同年八月六日正午前に米軍による機銃掃射や焼夷弾の攻撃を受けた。大講堂や二階建ての校舎など四棟が焼失し、さらに西区、町区の民家も被弾や延焼により七十二戸が戦災に遭った。
○同所に日清戦争記念碑（明治二十九年建立）、日露戦争記念碑、砲弾型記念碑あり。

西岳地区

忠霊塔

所在 都城市高野町 西岳小学校横
管理 都城市西岳地区遺族会

都島地区

済南事変戦死者之碑



所在 都城市都島町三八〇（都島公園内）
管理 都城市
所有者 国（九州財務局宮崎財務事務所）
建立日 昭和四年

都島地区

軍馬顕彰之碑

所在 都城市都島町三八〇（都島公園内）
管理 都城市
所有者 国（九州財務局宮崎財務事務所）
建立日 昭和六十年十一月
碑文 日支事変以後戦争で苦難に耐え砲弾と病に倒れ戦野に骨をさらした軍馬の霊を慰め其の功しを永久に顕彰するため戦没馬慰霊碑を建立し永久平和を祈念するためのものである。
特記事項 日中戦争から太平洋戦争に掛けて日本全域から動員され、微

所有 個人

御祭神 三八八柱
建立日 昭和三十年十一月
慰霊祭 十一月八日



中郷地区

忠霊塔

所在 都城市安久町五二〇六一 中郷運動公園広場横
碑名 佐藤栄作書
管理 都城市中郷地区遺族会
所有者 都城市中郷地区遺族会（中郷地区忠霊塔奉賛会）
御祭神 五五四柱
建立日 昭和三十五年十一月二十日
慰霊祭 十月二十五日

碑文

ここ二子束は遙かに霊峰高千穂の雄姿を仰ぎ南に金御岳東に東嶽の連山を望見し四季の眺望絶佳の地であります。かつて村の護国神社の予定地であったこの地に日清日露をはじめ太

用従軍した軍馬は役十万頭と言われていますが、戦死・病死した軍馬は一頭も故郷へ還ることが出来なかった。そこで、日中戦争並びに太平洋戦争に動員された軍馬の慰霊並びに占領軍により徴傭された軍馬の顕彰を行うため、終戦四十周年の記念事業として、軍馬慰霊顕彰碑が建立された。



都島地区

戦傷病者之碑

所在 都城市都島町三八〇（都島公園内）
管理 都城市
所有者 国（九州財務局宮崎財務事務所内）
建立日 昭和五十五年一月
碑文

この碑は明治以降の国難に際し当時の陸海空軍の将兵として礎軍し散弾に傷つき或いは病魔に侵された者の記念碑である吾等は戦争の悲惨と無意味さを身を以て体験した者であり平

太平洋戦争に至る本村出身の戦没者を祀る忠霊塔を建立することとは戦没者の忠霊に対する遺族及び村民の敬慮なる至情の発露にして当然の責務と存じます。またこの塔を仰ぎ見る子孫のため如何に薫陶の資となるかを考えるときその意義深遠なることを信ずるものであります。永年奉祀された招魂社は中郷中学校敷地内東南の一隅にありしところ終戦と同時に己むなくとり除かれることになりましたので平和塔として昭和二十二年七月この地に建立されたのでありますが忠霊を祀るに相応しき忠霊塔建設について村議会、遺族会、並びに一般有志より切なる要望があり今回村民の浄財を篤志家の寄附により斯く如き莊重優美なる塔の建立を竣りました。茲に各戦没者並びに寄附者の芳名を録し後世に伝える。



和日本の永遠の幸せを願うこと切なり
昭和五十五年一月吉日

都城市戦病軍人会



都島地区

満州事変戦歿者合祀碑

所在 都城市都島町三八〇（都島公園内）
管理 都城市
所有者 国（九州財務局宮崎財務事務所）
建立日 昭和九年八月十三日



都島地区

陸軍基地納骨堂



所在 都城市都島町三八〇（都島公園内）
管理 都城市
所有者 国（九州財務局宮崎財務事務所内）
納骨数 九、三九五柱
内訳 日中戦争 四、九九二柱
太平洋戦争 三、七一一柱
終戦以降 六八五柱
建立日 昭和十三年
この納骨堂は、旧陸軍第二十三連隊関係で日中戦争以降の戦没者の分骨を個人ごとに納め、恒久に祭祀する目的で昭和十三年にこの地に建立された。元々は明治四十三年に都城へ歩兵第六十四連隊が配置されたとき、日清・日露戦争で戦没した郷土出身者の遺骨を納めるために現在のホテルハイッ跡地へ建立したが、敷地が狭く、参拝が不便であったことから昭和十三年に現在の場所へ移った。

都島地区

都城特別攻撃隊はやて慰霊碑

所在 都城市都島町三八〇（都島公園内）
管理 都城特別攻撃隊戦没者奉賛会
所有者 都城特別攻撃隊戦没者奉賛会
御祭神 八十一柱 掩護隊員多数
建立日 昭和五十二年十一月十五日
慰霊祭 四月六日
特記事項
昭和二十年の沖縄戦において、南九州の陸海軍航空基地からは、爆弾と片道燃料だけを積み込んだ特別攻撃隊が、日夜続々と出撃していきました。当時、都城市の郊外には東・西飛行場があり、昭和二十年四月、この基地から初めて四式戦「疾風」特別攻撃隊が沖縄周辺の目標めざして、南の空へ飛び立っていきました。以来、七月一日まで十七次に及ぶ出撃が行われ、未だ少年の面差しを残す二十歳前後の若い特別攻撃隊員が出撃していきました。戦後三十二年の歳月と変容によって、基地一帯は当時の面影偲ぶようでもありませんでしたが、三十三回忌を迎えるに至って、隊員の遺族や各方面に慰霊碑建立の気運が高まり、昭和五十二年の建立となりました。アフリカ産の黒みかげ石で、都城陸軍東・西飛行場から出撃した特攻振武隊はやての状況などが刻まれています。



郡元地区

平和祈念之碑



所在 都城市郡元町（稲荷神社内）
管理 稲荷神社
所有者 稲荷神社
建立日 平成七年八月十五日
碑文
現在の平和は終戦以来半世紀にわたり激動の戦後を生き抜いた私達の努力により築きあげられた。然し先の大戦に於いて平和を願い祖国を離れ各地域に転戦し国の為に尊い合祀を捧げ華と散り未だ還らぬ戦友も数多い。戦後五十年にあたり当時の恐ろしさを後世に語り伝えこのような悲惨な戦争を再び繰り返さないようそして世界の恒久平和を祈念し此の碑を建立する。
平成七年八月十五日
平和祈念之碑文
支那事変、太平洋戦争の由来を後世に語り伝えるために昭和十一年祝吉尋常高等小学校の郡元出身者が発起人となり、従軍帰還者遺族の方々と共に建設委員会を結成し、一般各位のご協力を得て、平和祈念の碑を建立す。
平成七年八月十五日
発起人一同

祝吉地区

被爆殉没之地

所在 都城市祝吉町一一五一（都城農業高校グラウンド北西の一角）
管理 小林中学校第二十三回生慰霊碑現地建立実行委員会
所有者 都城農業高校（土地）
御祭神 十一柱
建立日 昭和五十六年五月八日
特記事項
戦前、都城市にあった川崎航空（現・川崎重工）の都城工場に学徒動員の小林中学校（現・小林高校）三年生百五十七名が、現在の都城農業高校グラウンドがある位置に建てられた「高千穂寮」で寄宿舎生活をしていたが、昭和二十年五月八日の朝、警戒警報を受けて集団で退避中に、米軍の爆撃に遭遇して十名が死亡し、多数の負傷者が出た。被爆者の鎮魂と平和への新たな祈りを捧げるために、昭和五十六年五月八日に同地に建立された。



上長飯・一万城・広原地区

慰霊碑



所在 都城市上長飯町七八（小鷹神社内）
管理 上長飯・一万城・広原地区戦没者慰霊碑奉賛会
所有者 小鷹神社
御祭神 一一一柱 内訳 陸軍九〇柱 海軍二二柱
建立日 昭和六十二年五月三十日
日中戦争及び太平洋戦争で亡くなった戦没者名を刻み、後世に伝えるために建立。
慰霊祭 九月最終日曜日（変更あり）
碑文
支那事変及び大東亜戦争で赤心殉国の至情に燃え祖国の平和と繁栄を念じて悠久の大義に殉ぜられた功績を永遠に留めるため戦没者の名を刻み後世に伝えんとす
願わくば英霊よ安らかに眠られんことをここに謹みて追惜哀悼の誠を捧げ慰霊碑を建立す

高崎地区

英霊之碑

所在 都城市高崎町大牟田一六五一―三 高崎中学校横旭ヶ丘公園内
管理 高崎町遺族会
所有者 都城市
御祭神 六二二柱
建立日 昭和三十年
沿革 昭和四十六年八月十八日再建
慰霊祭 十月十八日
特記事項
大東亜戦争終結七十年を迎えて、様々な行事を行ったが、戦争を知らない子供達の参加が嬉しかった。（高崎遺族会会長）



高城町（大井手地区）

忠霊塔

所在 都城市高城町大井手二六四一一 郷土歴史館横
碑名 吉田茂 書
管理 高城地区遺族会
所有者 都城市高城町遺族協働会
御祭神 六九六柱
建立日 昭和二十八年十二月二十日
慰霊祭 十月 献花方式



高城町（有水地区）

忠霊塔

所在 都城市高城町有水 有水寺境内
管理 高城町有水地区遺族会
所有者 都城市高城町有水戦没者遺族会
御祭神 一七二柱

北諸県郡

三股町

忠霊塔

所在 北諸県郡三股町三九九三番地九
碑名 野村吉三郎謹書
管理 三股町遺族会
所有者 三股町
御祭神 七六二柱
建立日 昭和二十七年四月十九日
慰霊祭 四月十九日



建立日 昭和四十五年十月三十日
慰霊祭 四月三日



山田町

忠霊塔



所在 都城市山田町山田三八一番地 山田総合支所横敷
地内

三股町

椎八重九五八高地戦歿者慰霊碑

所在 三股町長田椎八重および九五八高地 椎八重公園内
管理 三股町遺族会
所有者 三股町
御祭神 十柱
建立日 昭和四十五年十二月
碑文
ときに昭和二十年 大東亜戦争も日を追って激しくなり た
またま三股町椎八重並びに九五八高地に於いて 飛行第九八
編隊の七名 及び暁輸送部隊の三名は沖繩出兵の重大任務を
おびて行動中惜しくも遭難戦死をされ遺体は二十数年間現地
の山中に埋葬され状況不明のまま放置されていた。昭和四十
四年二月この事実が詳かになり同年六月地元の人や島津山林
株式会社協力によって発掘し遺骨は無事に遺族のもとに届
けられたのである。ここに祖国の履行を念じつつ散華された
十名のゆかりの地に町民こぞつとこしえにみたまの安らか
なれと祈りこの慰霊の碑を建立する
昭和四十五年十二月二十二日



管理 都城市山田総合支所
所有者 都城市
御祭神 五十五柱
建立日 昭和三十年四月三十日
慰霊祭 八月十五日
碑文

西南役以後日清日露各戦役に於ける戦没者の英霊を祀る記念
碑は夫々建立され在りしが大東亜戦争後心ならずも撤去を余
儀なくせられたり、然るに其の後講和なり独立国となるに及
び燃え上る町民の赤誠は強く之が再建を大東亜戦争戦没者慰
霊の新施設を絶叫するに至る。茲に於て議を練り、忠霊塔を
建立し、西南役以後各戦役事変の戦没者四百八十余柱の英霊
を合祀することとなるや、遺族率先して醸金し整地工事に服
し町民も亦進んで浄財を齎出し、旧山田城本丸跡に地を卜し
昭和三十年一月着工す。謹みて英霊を合祀し其の遺勲を偲び
敬弔の誠を捧ぐ英霊も亦安らかに鎮まりまさむ。依りて忠霊
塔建立に当たり梗概を刻して後昆に伝う。

昭和三十年四月

忠霊塔建設委員長 志々目義重

山之口町

慰霊碑



所在 都城市山之口町花木一五八九 山之口小学校内
管理 山之口町遺族会
所有者 都城市
御祭神 三八八柱
建立日 昭和三十八年十二月一日
慰霊祭 九月二十三日

小林市

細野地区

忠霊塔



所在 小林市細野五〇九番地五
管理 小林市遺族会
所有者 小林市戦没者追悼奉賛会
御祭神 一、六〇二余柱
建立日 昭和三十年三月十二日
慰霊祭 十月八日
碑文 建塔のことは

「遠く南に霧島山系を望み近く小林市の一瞬の中に収むる此処
緑ヶ丘に四万五千市民の総意に基いて戦没者慰霊奉賛会が主
体となり市民の浄財を集め市の援助を得て忠霊塔を建てる。
明治初年以降度々の事変や戦争に於いて日本民族の独立と発
展のために幾多の先人たちが身を捧げられたこの尊い犠牲
がなかったならば今日の日本があり日本民族の繁栄があると
は考えられない。人類発達の今日の段階にあっては国家の独

立と繁栄がなくて個人は個人の尊厳は自由であり得ない。国家の独立と繁栄とは国民の燃ゆるような祖国愛によってのみ期せられる。この塔に祀られる一千数百の英霊たちは日本民族永遠の繁栄を且つは信じ且つは祈りつつ、一命を捧げられた人々たちである。我々は日本民族の団結と繁栄を図りその力を通して全人類の対立なき真の平和を招来し英霊たちの偉功に応えたい明治十年の役から日清日露の戦い関する旧碑を此所に集めそれに第一次世界大戦、日支事変、大東亜戦争等に殉ぜられた霊を合祀して永遠に安らぎ給えと希い日本の繁栄と郷土の弥栄を護り給へとお祈りする。来り仰ぐ人達塔の意を諒し一柱の香一枝の花を供えて敬弔の誠を示されることを。

昭和三十年三月十日

小林市長 岡蘭助左衛門
奉賛会長 肥後兵二

特記事項（遺族の言葉）

父は昭和十六年私が九歳のときに出征しました。当時軍に入るのが当たり前でさみしい気持ちよりも、お国のために戦争に行く父を誇りに思っていました。役所から「出征兵士の家」という表札をもらい掲げていたのが本当に嬉しかったのを覚えています。父が死ぬかもしれないのに。戦争中は感覚がおかしくなっていました。昭和十八年以降戦争は徐々に日本が劣勢になり、生活は苦しくなっていました。家族は母と祖母、六人の兄弟で、食べ物もなく苦しい生活が続いていました。当時日本は輸入に頼る国でしたので食料はもとより肥料も輸入されなくなり、畑の作物が育ちませんでした。それでも日本は絶対負けない、世界で一等国と、教育で教えられていたので、皆、耐え難さを耐え、忍び難さを忍んで一生懸命頑張ってきました。昭和十八年三月、父は戦地に派遣されることが決まりました。沖縄・九州間の海上警備が任務だったようです。戦地に出ると連絡をとることが困難になります。そんな中、昭和二十年一月十三日、父から私宛に一通の手紙が届きました。五枚に渡るその手紙には「まだ子供のお前に無理な言い方かもしれないがお前は父の身代わりとなって弟や妹を立派に導いてくれねばならぬ」「すべてを頑張れぬいて立派な国民になるように」と書いてありました。これが父からの最後の手紙。この手紙を読むと今でも涙が出てきます。そして立派な社会人になれるよう努力して父の死を無駄にしないために頑張つて生きてきました。今、私は遺族の方々と話す時に必ず話すことがあります。「私達の親父が戦争で亡くなったのはとても残念です。残念だったけど明治憲法から新しい平和憲

南西方地区

満州第九六〇部隊作業隊慰霊碑



所在 小林市南西方 県道京町小林線

管理 不明

所有者 不明

御祭神 五十余柱

建立日 昭和四十八年九月 ※近年建て替えられた碑文

大東亜戦愈々熾烈を極め我が作業隊の精鋭は満州の国境に中国の曠野に 南方の諸島へと転戦奮闘したが、その主力は本土決戦に備えてこの飯野に進駐した。この間、壮烈な戦死を遂げた五十余柱、茲に有志相集い、作業隊終焉のこの地に碑を建つ亡き戦友よ、安らかに眠れかし。

法に変えたのは我々の親父だ。だから親父たちが日本を変えたという誇りをもちなさい。」私のように大切な人を失い悲しむ人が多く出てしまう戦争は、もう二度とあつてはなりません。

（小林市遺族協会 岡原信夫会長）

南西方地区

殉難者の碑



所在 小林市南西方 西小林小学校

管理 不明

所有者 小林市立西小林小学校

御祭神 十柱

建立日 昭和四十七年三月

碑文

昭和二十年八月十日 午前九時（第二次世界大戦中）西小林

昭和四十八年九月

九楽会一同

特記事項

同所に平成六年八月十五日終戦記念日に、千葉県我孫子市の江藤勇氏によって建立された鎮魂歌碑あり。十二柱を祀る。鎮魂歌碑の記
昭和二十年八月終戦直後、明日の除隊を前に兵舎後方の崖崩れに依り数多くの兵達が殉難死したことは誠に痛恨に堪えない。ここに鎮魂歌碑を建立その霊魂の安らかなれと祈ります。
平成六年八月十五日終戦記念日

建立者 千葉県我孫子市 江藤 勇
作詞者 村山 正八 村山 祥峰

真方地区

動員学徒殉没者之碑

所在 小林市真方二四番地（小林高等学校校庭）

碑名 小林市長 志戸本慶次郎書

管理 不明

所有者 不明

御祭神 十柱（のち十一柱）

建立日 昭和四十一年五月八日

昭和五十六年五月八日現在の所に移転

慰霊祭 五月八日

碑文

この碑は昭和二十年五月八日、朝七時二十分、川崎航空機製作所都城工場に勤労働員中空襲にあい殉没した県立小林中学校三年生、十柱の霊に対し昭和四十一年五月八日同窓生一同集つて二十一回忌法要を営み追悼の心をこめて建立したものである。このたび小林高校創立六十周年記念にあたりこの地に移転し新らたなる鎮魂の祈りをささげるものである。
昭和五十六年五月八日県立小林中学校第二十三回同窓生一同特記事項（遺族の言葉）
その日は曇っていた。朝、工場の食堂で食事をしていて空襲警報が鳴った。鳴り始めるとすぐに爆弾が落ちてきてアツと言う間に吹き飛んだ。腕がちぎれた人、足がちぎれた人

駅前において西小林国民学校児童を主体に編成する勤労奉仕隊に突如飛来したアメリカグラマン機の機銃掃射は、哀れ十名の尊き生命を奪った。あ、呼べど声なき、みたまよとしえに、安らかなれと念じ、ここに碑を建立する

昭和四十七年三月建立

西小林振興会

特記事項（遺族の言葉）

とても天気のいい日でした。私はいつもと同じように仲の良い友達と学校に行きました。当時子供はお国のために奉仕団として農家の手伝いに行くことがありました。その日も数班に分かれて奉仕作業に行くことになりました。私の班は石塚にある畑に向かっていました。西小林駅付近を歩いていたら大きな飛行機がこちらに向かってきました。そして遠くから大きな飛行機がこちらに向かってきました。最初は日本軍の飛行機だと思っていました。しかしどんどん低空飛行で近づいてきて次の瞬間、ダッダッダッ。一瞬の出来事でした。私はたまたまおなかに抱えたお弁当にぐっと力をいれて立ちすくんでいたら、腕と脇腹の間を銃弾が通り抜けていき、銃弾の破片が太ももに当たりました。その時は全然痛くなくて駆けつけた大人たちに声をかけられ、木の陰に足を引きずりながら歩いて行きました。今思うとよく逃げられたなと思います。そして木の陰で倒れていると、戸板に寄せられ病院へと運ばれました。そしてそれから三ヶ月ほど入院する日々が続きました。でも私は運が良かった方です。ケガですんだのですから。その日の朝、私と一緒に学校に行った友人の姿はもうどこにもなかったのですから。入院中、窓の外をみるとトンボが飛んでいたことをよく覚えています。不思議ですね。今でもこの季節にトンボが飛んでいるのを見るとどうしても思い出してしまい、ふいに涙が出る事があります。その友人が生きていたら今でも仲が良かったんだろうなと考えながら。私たちのように戦争を経験した人はもうすくないくなります。日本人は七十年間反省を続け、多くの人が戦争を繰り返してはいけないと実感しているはずですが。その思いを忘れずこれからの時代を担う人々には、日本、世界に戦争のない未来を築いていってほしいですね。

（木佐貫ヒサエ）

即死の人が床に倒れている。怖かった。死という恐怖が目の前にあった。人が倒れているのだけれど怖くて自分が逃げる事で精一杯だった。飛行機は雲の上を飛ぶので爆弾の落ちるシューという音だけが聞こえる。時限爆弾も一緒に落ちたが、普通の爆弾は落ちると横に広がるので被害が大きかった。すぐに食堂から出て田んぼを一生懸命駆け抜け近くの民家の防空壕に逃げ込んだ。逃げる途中、田んぼに腕のちぎれた人が倒れている。足を失った人をおんぶして逃げる人がいた。おんぶしている人の背中は血まみれになっていた。どれぐらい防空壕にいたかは分らない。しばらくして外に出てから、時限爆弾の落ちた所は印が付いているのでそこをよけて皆、集合して人数確認をした。その後、会社の寮に荷物を取りに戻ると、爆風で障子が吹き飛んでいた。その光景を見た時、爆弾の威力、恐ろしさを思い知った。



堤地区

忠霊碑

所在 小林市堤 堤自治会堤土地改良区事務所隣
管理 不明
所有者 不明
御祭神 日中戦争及び太平洋戦争戦死者八十八柱
建立日 昭和四十六年七月二十五日



須木地区

忠魂碑

所在 小林市須木中原一七二三番地大年神社境内
碑名 陸軍中将 大久保利貞謹書
管理 須木遺族共助会
所有者 小林市
御祭神 一七九柱 濟南事変（昭和三年）以降の戦死者 陸軍一四七柱 海軍三十二柱
建立日 明治四十二年四月十日
沿革 昭和三十年四月二十七日現在の形に改修、平成元年十一月三日改修

えびの市

真幸地区

慰霊碑

所在 えびの市大字向江一三〇〇
管理 えびの市真幸地区遺族会
所有者 えびの市（土地） えびの市真幸地区遺族会（慰霊碑）
御祭神 三七八柱
建立日 昭和三十年十月
沿革 昭和四十四年四月十八日に真幸傷痍軍人会、同妻の会の寄贈により、戦没者名碑が建立された。現在の慰霊碑は平成十七年十二月に改築されたものである。
慰霊祭 八月十五日
碑文 恭シク戊辰ノ役以降ノ殉国ノ士ノ英霊ヲ祀リ慰メ功勲ヲ讃エ且ツハソノ遺芳ヲ後昆ニ伝エシメ清楚景勝ノ地ヲトココニ慰霊塔ヲ建立ス額タレタダニ庶幾御霊安ラカニ鎮マリマシテトコシエニ祖国ヲ給エト
昭和三十年



仲秋

慰霊祭 三月（春分の日）

碑文 平和の塔碑文
国のため 命捧げしつはものの 願ひは同じ 平和なりしぞ故郷遠くはなれ来て 風雲強き戦場に、戦友をばげまし前進すれば、しばし仮寝の夢枕、母恋う心故郷の 親の俯げ偲びつつ 妻子の無事を祈るらん 吾れ従軍の勲を 永遠に残さん共に この平和の塔記念碑は大東亜戦争従軍者と一般村民の御協力により、我が国日本の悠久の平和を心から念願し建立するものなり
平成三年十一月三日



野尻町

平和の礎

所在 小林市野尻町三ヶ野山四三三六番地二〇
管理 野尻町遺族共助会
所有者 小林市
御祭神 四六七柱
建立日 平成十六年四月
沿革 昭和二十年八月に建立された紙屋、東麓、三ヶ野山の碑を、昭和三十九年五月現在地に移設した。
慰霊祭 十月二十五日
碑文 悠久の時の流れに祈りの心を捧ぐ
過ぎし大戦に於いて我が国の安泰と同胞の幸せを願う家族を案じながら戦場に散り戦禍に倒れ、又戦後帰国を待ち望み乍

飯野地区

招魂碑



所在 えびの市原田三〇三〇
碑名 靖国神社筑波藤鷹宮司書
管理 えびの市飯野地区遺族会
所有者 えびの市（土地） えびの市飯野地区遺族会（碑）
御祭神 七三八柱
建立日 昭和三十年四月三日
慰霊祭 八月十五日
碑文 祖国ノ平和ヲ守ルタメ満州事変以降ノ戦役ニ起ツス国難ニ殉ずセラレシ戦没者ノ尊キ忠魂ヲ永久ニ祀リ慰メントシ町民舉ツテ此ノ展望絶佳ノ地ニ招魂碑ヲ建立ス庶幾クバ英霊ヲ靖ラカニ鎮マリ永遠ニ祖国ヲ守リ給ワンコトヲ

昭和三十年三月

秋丸次朗

ら異郷の地に於いて亡くなられた四百四十余柱の尊い生命は永久に蘇る事もなく今ここに、戦没された皆様を想う時哀惜の情一入なるものがございます。私達町民は痛ましい犠牲の教訓を無にせず次世代に正しく語り継ぎ二度と悲劇を繰り返すことがないよう決意を新たに全町民と共に皆様方（英霊）に心から感謝の誠を捧げ、ご冥福をお祈りし世界の恒久平和を願う次第であります。顧みますれば、戦後混乱する社会の中で建立された忠霊塔も老朽化し倒壊する恐れもあり戦後六十年の節目の記念事業の一環として新しく慰霊碑の再構築をと遺族会会員一丸となり取り組み、これに対し行政その他多くの方々の温かいご指導、御高配を承り遺族会会員の浄財により慰霊碑「平和の礎」と命名し建立されました。



加久藤地区

忠霊塔

所在 えびの市小田七三四番地七一
管理 えびの市加久藤地区遺族会
所有者 白坂義治（土地） えびの市加久藤地区遺族会（碑）
御祭神 二九八柱
建立日 昭和十七年四月
慰霊祭 八月十五日
特記事項 同所に日清、日露、満州事変等の招魂墓、忠魂碑がある。



西諸県郡

高原町広原地区

慰霊塔



所在 西諸県郡高原町大字広原四九二一・二二七高原町中央公園内
碑名 宮崎県知事 黒木博謹書
管理 高原町社会福祉協議会
所有者 高原町遺族協定会
御祭神 五三五有余柱 満州事変、日華事変、大東亜戦争戦歿者
建立日 昭和五十年十一月五日（再建）
碑文 顧みるに昭和に於ける幾多の事変に戦没された勇士五百二十有余柱の方々はあらゆる武闘に警備に治安に赫々たる武勲をたて国家危急に一命を捧げられたのであります。以来三十年その間平和条約が締結され産業経済をとみに発展し平和国家として躍進して来ました。これも偏に国家のため辛苦万難を排して尊き犠牲をはらわれた賜であります。茲に遺族会、傷痍軍人会、郷友会、町社会福祉協議会が発起となり慰霊塔の建設委員会を設立し、これが推進を計り町民の賛助のもと資を募り建設いたしました。永久にこの碑を後世に伝え平和の

礎としたい念願であります。静かに冥し郷土をお守り下さい。
昭和五十年十一月五日
高原町社会福祉協議会代表 今西周助
高原町遺族会代表 久保治吉
高原町傷痍軍人会代表 隈元栄
高原町郷友会代表 堀川茂

高原町西麓地区

戦没者慰霊碑



所在 西諸県郡高原町大字西麓 並木児童館内
管理 不明
所有者 不明
御祭神 四十柱
建立日 昭和四十八年十二月九日
碑文 過ぎし戦役に参加し大陸の広野に将又南海の孤島に更に果しなき洋上に於いて勇戦奮斗中、或は病魔に冒され遂に武運つ

高原町狭野地区

戦没者慰霊碑



所在 西諸県群高原町狭野 狭野霊苑内
管理 不明
所有者 不明
御祭神 二十五柱
建立日 昭和四十九年八月

たなく国のため散華せし郷土出身勇士の功績を讃えんと共に御魂がとこしえに平和の神と成つてふるさとの地に安らかに鎮り私共の上に深き加護を垂れ給わんことを祈念しここに並木の多くの人々の浄財によつて慰霊の碑を建立する
昭和四十八年十二月九日

日南市

飢肥地区

忠霊塔



所在 日南市大字楠原二〇七六―乙
管理 飢肥地区遺族会
所有者 日南市
御祭神 三三八柱
建立日 昭和二十八年八月八日
慰霊祭 四月 区長会主催、遺族会協賛で毎年四月に神式で執り行っている。
特記事項 同所に招魂社、西南役記念碑、西南役百周年追悼碑、丁刃戦役六十年記念碑あり。

油津地区

慰霊塔



所在 日南市油津上町
管理 日南市
所有者 日南市
御祭神 四七五柱 日清、日露、満州事変、大東亜戦争陸軍海軍戦歿者
沿革 平成十年四月銘板作成、平成十八年七月慰霊塔塗装。
建立日 昭和二十八年七月十九日
慰霊祭 六月第一日曜日

油津地区

海難者慰霊塔

所在 日南市油津二丁目十付近 港大橋近く
管理 日南市漁業協同組合
所有者 日南市漁業協同組合



御祭神 四十一柱
太平洋戦時（昭和二十年）、洋上の監視警戒の軍事任務と海軍の食料補給にあたり、油津港沖で、アメリカ軍機に襲撃され、遭難された油津漁業協同組合所属の特殊船舶員四十一名を慰霊。
建立日 昭和三十年七月二十四日
慰霊祭 七月（油津港まつり同日） 神仏合同で執り行っている。
碑文 此処に鎮まる御霊は生きとし海に生き海を愛した人々である。しかも多くは天寿を全うせず唯一筋に自己の義務を果たそうとして国難に散り烈風に飛び怒涛に捲かれ船と沈み、さては荷役に傷ついてあたら貴い生命を海に捧げた人々である。嗚呼永遠に輝く海の有者よ、これを慕う者はみ胸にすがり、これを哀れむ者は涙をそそぎ、これを敬う者は功をたたえ語りつぎ言いつぎ慰霊の誠を捧げたるために昭和三十年七月二十四日此の塔を建立したものであるが、このたび人柱様を整地し、この地に移します。
昭和四十四年六月吉日

西町地区

漁士之碑

所在 日南市西町二丁目十一八 宮崎県高等水産研修所
管内 宮崎県高等水産研修所
所有者 宮崎県高等水産研修所
御祭神 四柱
昭和十七年四月、宮崎県水産講習所修練船追進丸が、都井岬沖で実習中、突如、敵潜水艦の攻撃を受け、敵弾に倒れた非戦闘員である教官一名研修生三名を慰霊する。
建立日 昭和三十八年四月
碑文 昭和一七年四月十一日大東亜戦争タケナワリシ頃漁村道場宮崎県水産講習所修練船追進丸ニテカツオ漁業乗船実習中都井岬沖ニオイテ突如トシテ敵潜水艦ノ攻撃ヲ受ケ非戦闘員ノ身ヲモツテ敢エナクモソノ敵弾ニタオル嗚呼悲シイカナコノ漁士之碑才建立シ殉職者ノ霊ヲ安ラカニ祭ルコトセリ 然ルニ昭和二十年八月十五日終戦ヲ迎エ連合軍が進駐スルニ及ビソノ指示ニヨリ撤去セラレソノ後荒廃ニマカセアリ コレ見テ同窓生イタク嘆キ悲シミ再建ノヲハカリ各関係者ニ呼びカケソノ協力ヲ得テ二十一年周年ヲ迎エルニ当リ再建シ霊ヲ祭ル
昭和三十八年四月十一日



漁士之碑再建委員会

梅ヶ浜地区

被爆者慰霊碑



所在 日南市梅ヶ浜二丁目 梅ヶ浜下区公民館脇
管理 不明
所有者 不明
御祭神 三三三柱
太平洋戦争末期の昭和二十年七月、アメリカ軍機が、日本軍の弾薬庫となっていた梅ヶ浜地区の天理教会を襲撃し、犠牲となった地区民二十九名と海軍兵四名。
建立日 平成七年八月
碑文 太平洋戦争末期の昭和二十年七月十六日午前十一時三十分頃数十のアメリカ機が日本軍の弾薬庫となっていた梅ヶ浜地区の天理教会を襲ったため 付近一帯は一瞬のうちに修羅場と化し 地区民二十九名海軍兵四名が亡くなったほか多数の負傷者が出た平成七年五月七日「梅ヶ浜を語ろう会」に集まった当時を知る人びとの間に「被爆者慰霊碑」建立の儀が起ったここに広く浄財を募って空襲の犠牲となりこの地に眠る人々の霊を慰めるためこの碑を建立する

吾田地区

忠霊塔

所在 日南市大字戸高一〇二一
碑名 厚生大臣 川崎秀二書
霊名 松野義慶、外山正美書
管理 日南市吾田遺族協定会
所有者 日南市吾田遺族協定会
御祭神 三四五柱
建立日 昭和三十年十月二十日
慰霊祭 春分の日
特記事項 招魂社あり。明治十年から昭和二十九年までの戦没者三七三柱を祀る。「久遠の魂」昭和五十一年十一月発行詩に記載



東郷地区

忠魂碑



所在 日南市大字東弁分甲一七九六
管理 日南市
所有者 日南市東郷地区遺族協定会
御祭神 一七三柱
大東亜戦争 陸軍関係戦死者一〇三柱
海軍関係戦死者 四二柱
日清戦争 陸軍関係戦死者 二柱
日露戦争 陸軍関係戦死者 六柱
支那事变 陸軍関係戦死者 一九柱
海軍関係戦死者 一柱
建立日 昭和二十年五月 忠霊塔
沿革 老朽化の為、平成十年十一月十一日に忠魂碑として再建した。
慰霊祭 三月第二日曜日
碑文 昭和二十年八月終戦を迎えたその日から、ここに五十三年の歳月が流れました。戦争のこととすでに遠い歴史の中に埋もれて、国民の脳裏から忘れ去られようとしております。顧みれば、我が国は明治、大正、昭和と、いくたびか重大な危急存亡の秋に際会し、そのたびにこの国のため、父が、子が、夫が、兄弟が勇躍出征し、勇猛果敢に戦いました。そして海行かば

鶴戸地区

鎮魂碑



所在 日南市大字宮浦六九六
管理 日南市
所有者 日南市鶴戸地区遺族会
御祭神 一〇三柱

細田地区

招魂社

所在 日南市大字毛吉田一三三番地一号
管理 日南市
所有者 日南市細田地区遺族会
御祭神 二七八柱 大東亜戦争戦死者
建立日 昭和五十四年二月再建 ※元の招魂社は建立時期不明。
慰霊祭 三月下旬
特記事項 細田地区の招魂社は寺子屋の跡地に建立されており、同所に表忠碑、忠魂碑が建立。朝鮮戦争、他戦争等の戦死者八十三柱が祭られている。



酒谷地区

忠霊塔



所在 日南市大字酒谷乙八八六四一一
碑名 宮崎県知事 田中長茂書
管理 日南市酒谷地区遺族会
所有者 日南市
御祭神 二二七柱
建立日 昭和三十年五月
慰霊祭 四月二十九日
碑文

大東亜戦争終息以来慈に十有余年日清戦争以来幾多の戦争に○華やかせる尊き英霊は迷う草深く無人墓地に葬られ従って世人崇高の念次第に薄らぎ遺族の真に座視するに忍びざる心境に成り斯してこれが一堂に会いするの議は多年の悲願なり幾多の諸般の事情これを許さずして遂に今日に至る慈に於いて率先して長尾村長發起人となり忠霊塔建立奉賛会を結成するや村民の熱き理解と協力を得て浄財を仰ぎ、遺族亦、乏しき中より応分の寄附等、三区婦人会並びに遺族の献身的奉仕により酒谷村忠霊塔の献立今慈に成る忠魂永へに此処に祀り安らかなる冥福を祈る
昭和三十年五月

碑文
戦局八日ニ凌愴苛烈ノ度ヲ加ヘ正ニ国家ヘ隆替ノ関頭ニ立ツニ至レリ 顧レハ昭和十二年七月七日北支那蘆溝橋ニ端ヲ發シタル支那事變ハ全十六年十二月八日ヲ段階トシテ大東亜戦争ニ突入シ此ノ間滿六年六ヶ月幾多忠勇ナル我カ陸海空ノ勇士ハ力戰奮斗大御稜威ノ下赫赫タル戦果ヲ揚ケ而シテ或ハ玉碎シ或ハ瘡痍ニ殫レテ護国ノ鬼トナル噫々次々ニ台湾事變以來神鎮リマス瑩域ニ百折不撓ノ尊ヒ英霊ヲ迎ヘ惻々ノ情禁シ得ス又何ヲ以テカ應フ可キ 茲ニ村民ト相計リ浄財ヲ捧ケカヲ奉シ戮力協心忠魂安住ノ靈廟ヲ建立シ以テ勇士ノ靈位ニ手向フ
昭和十八年十二月

村長 坂本又夫識
国貞哲一書

南郷町（南郷地区）

忠霊塔



所在 日南市南郷町大字中村
管理 南郷町忠霊塔建設協賛会
所有者 南郷町忠霊塔建設協賛会
御祭神 五二六柱
建立日 昭和二十九年三月
慰霊祭 四月三日

特記事項

酒谷村忠霊塔建設奉賛会 会長 長尾福実 副会長 伊東新三郎 古澤源市 建設委員 谷口善三郎 石山金平 中村隆男 高野義弥 委員 長嶺文被 山田貞吉 肥田木政治 矢野義盛 伊豆本佐市 永野十平 宮川正江 川口篤次 太田原正人 書記 藤井政義 会計 古澤末実 係員 落合松男 野辺利治
題字 宮崎県知事 田中長茂 設計者 酒谷村
工事請負者 川田三平 総工事費 六十万円也
竣工 昭和三十年五月

大堂津地区

大東亜戦 戦歿者之碑



所在 日南市大堂津五丁目 大堂津霊園敷地内
管理 なし
所有者 なし
御祭神 一七二柱 大東亜戦争戦歿者
建立日 昭和三十年八月十五日
沿革 平成五年十一月吉日再建
慰霊祭 なし
碑文
願うに諸士は貴い人生を祖国の興廢にかけたのである そして陸に海に空に軍人の本分を忠実に尽すべく或は險を進んで敵を屠り或は堅を砕いて地を略し赫たる国威を発揚したのである 然るに近代戦の様相は日に月に凄惨を加えて死屍海を

碑文（慰霊像碑文）

戦火の度に悲しみや苦しみに耐え寢食を忘れ銃後を守り続けた英霊の母、妻子の像を南郷町遺族会員等の浄財をもつて戦没者を合祀する忠霊塔の一角に建立しここに改めて不戦の誓いをこめ、英霊の悲願とした世界平和を冀求し、これを後世に伝え永久に不滅の魂魄を鎮め奉らむ。
平成四年三月二十六日
慰霊之像建立委員会 代表南郷町遺族会長 池田靜

南郷町（榎原地区）

忠霊塔

所在 日南市南郷町榎原字迫後光四六三一
管理 南郷町
所有者 南郷町
御祭神 一一〇柱 日清、日露戦争、支那事変、大東亜戦争戦歿者
建立日 昭和三十年一月二十七日
慰霊祭 四月上旬
碑文 祖国と民族の平和を護持せんがため日清戦争以来大東亜戦争にいたるまで敢然起つて困難に殉ぜられし戦没者百十一柱諸子の尊き英霊を永久に祀り慰めんとし生前諸子が撫育せられた村有基本林の売却處分金を主たる財源に村民元軍人小中学校児童生徒擧つての労力奉仕及び有志諸賢の寄附金とにより茲に感謝の念盡きることなくこの眺望絶佳の地を選び諸子の英魂の鎮座の地と定め忠霊塔を建立す翼はくば英霊安らかに鎮りまし永遠に吾等の郷土を護り給はらんことを
昭和二十九年十二月吉日
榎原村戦没者忠霊塔建設委員会



埋め戦骨山を築くところ遂に若い生命を国難に捧げたのである嗚呼 阿修羅の如く戦い 櫻花の如く散りし 殉国の勇士よ安らかに眠れ 祖国の歴史は無窮に諸士の勲功を伝え郷土の山河は永遠に諸士の英霊を護るであろう 茲に謹んで此の碑を建立する
昭和三十年八月十五日
平成五年十一月吉日再建

大堂津・汐鶴遺族一同

大堂津・汐鶴軍恩関係者一同

特記事項
この碑は大堂津・汐鶴地区の遺族一同（特に戦没者の妻）、大堂津・塩鶴軍恩関係者一同によつて建立・再建された。管理者・所有者は存在しないが、地元有志が清掃等を行っている。現在（平成二十八年一月）ご健在の戦没者の妻（九十一歳）は一名である。

北郷町

忠魂碑



所在 日南市北郷町大字郷之原乙五〇五九（旧北郷中学校付近）
管理 日南市
所有者 日南市
御祭神 三八八柱 日清、日露、大東亜戦争戦歿者
建立日 昭和十八年十二月三十日
慰霊祭 年一回 四月頃

南郷町（贅波地区）

人間魚雷回天訓練之地



所在 日南市南郷町大字贅波字丑牧三二八番地三号
碑名 矢野義満書
管理 不明
所有者 不明
建立日 昭和四十三年八月十五日
昭和二十年五月に第三十三突撃隊第五回天隊が配備された。回天の訓練を行った記念と、戦死した方々の追悼を祈念して有志の方々が建立した。
慰霊祭 不明
碑文

南海にたとえこの身ははつるとも幾年のちの春をおもえば
特攻隊員詠

かつてこの地は第三三突撃隊人間魚雷回天の乗組員たちが祖国の存亡を憂いて猛訓練をつづけた海である年移りて星変りて平和な祖国は国定公園日南海岸としてその絶景をたたえている あこの島の島陰に大東亜戦争の必勝を念じ生命を捧げて永遠の平和を渴仰した尊い若人の血のにじむ猛訓練のあとを偲び祖国の為に散った戦友を追悼し永遠の平和を祈念してこの碑を建立する
昭和四十三年八月十五日建立
南郷町海友会

特記事項 この碑附近は展望の地となっている。 題字 矢野義満

串間市

福島地区

忠霊塔



所在 串間市大字西方四二〇五番地二
碑名 宮崎県知事 田中長茂書
管理 串間市福島地区遺族会
所有者 串間市福島地区遺族会
御祭神 四七二柱
建立日 昭和二十九年十一月三日
慰霊祭 四月（慰霊祭） 十月（串間市戦没者合同追悼式）
碑文 日清戦争以後大東亜戦争に至る戦死者四百有余の英霊を祀る墓地逐年荒廃し人をして胸を痛ましむものあり遺族之を嘆き

本城地区

忠霊塔

所在 串間市大字本城七七八七一七
管理 串間市
所有者 串間市本城地区遺族会
御祭神 二六九柱 日清 日露 日支事変、大東亜戦歿者
建立日 昭和十七年十二月
沿革 昭和四十二年十月、吉田益夫氏発起により、参道並びに鳥居建設をフーケンヒル生還者一同等、寄付を募り、昭和四十四年十月竣工。
慰霊祭 四月中旬
碑文 明治天皇御製
世と共に語りつたへよ國のため命をすてし人の勲を
特記事項 同所に征清記念碑があるが、建立日等詳細不明。



都井地区

忠霊塔

所在 串間市大字都井三九六一乙
碑名 靖国神社宮司 筑波藤磨書

夙に忠霊塔建設の議起りしも其の実現容易ならざりしを以て全郷の旧軍人之を黙視つに偲びず進んで其建設援助の任に当り後援會を結成し遺族と一体となり部派出張所長の協力を得広く町民の賛助を仰ぎ遺族各壹千円以上の寄附金参拾万円一般寄附金四拾万円福島町補助金参拾万円合計總経費壹百万円を以て昭和二十九年八月着工同年十一月竣工す謹みて茲に英霊を合祀し其の遺勲を偲び敬弔の誠を捧ぐ
昭和二十九年十一月三日
建設名誉会長 福島町長 神戸俊一
特記事項（遺族会会長の言葉）
身を持って体験した戦争の苦しみ、悲しみは誰にも経験してほしくない。遺族会を維持していきながら、戦争を知らない次世代の人たちに平和のありがたさ、命の大切さをしっかりと伝えていきたい。

北方地区

忠霊塔

所在 串間市大字南方越ヶ谷九〇二〇一
管理 串間市
所有者 串間市北方地区遺族会
御祭神 二二二柱 日清・日露・日支事変・大東亜戦歿者
建立日 昭和二十五年頃
慰霊祭 四月中旬



管理 串間市
所有者 串間市都井地区遺族会
御祭神 一二六柱 日清・日露・日支事変・大東亜戦争戦歿者
建立日 昭和三十七年
慰霊祭 四月中旬
碑文 我が国は明治以来幾多の戦争に際し数多くの先人が尊い生命と国家に捧げられ殊に日清日露の両役ならびに第二次世界大戦には多くの同郷の士が遠く故郷を離れて或いは湖北の荒野に或いは南溟の孤島に散華せられた市民は銃後にあって郷土防衛のために戦禍の犠牲となられた市民を忘れることはできない戦は終わり国民はあらゆる苦難に耐え再び悲運を繰り返さぬ念願をもって平和の護持と民主国家の建設を目指してその歩を進めている此の建設が進むにつけても国に殉ぜられた諸英士のことがよみがえり痛恨の情をいかんともすることができない此の塔は市共市民がいささかの資をあつめ在天の諸霊を合祀して心からご冥福を祈り且つはその徳功を顕彰するとともに平和確立の堅い決意を新たに建てたものである乞う塔を仰ぐ人々よこの意を諒とせられ一柱の香一枝の花を供えて敬弔の至情を捧げられんことを
昭和三十七年十月一日
忠霊塔建設委員長 豊島正直



大東地区

忠霊塔



所在 串間市大字奈留五一八九番地
管理 串間市大東地区遺族会
所有者 串間市大東地区遺族会
御祭神 二九八柱
建立日 昭和三十年十一月
慰霊祭 四月（慰霊祭）、十月（串間市戦没者合同追悼式）
碑文 明治大正昭和の世の大東村出身軍人の墓地であった此処に忠霊塔を建設し同郷出身で日清戦争以降の日本民族生存権擁護の為に一身を捧げた人々の英霊を合祀して之を慰め其偉勲を永く後世に伝え民族の神処仰敬の聖塔とする建設には遺族旧軍人村有志を中心に村民一体となり協力して之に方り村寄附金七十万円一般村民よりの寄附金二十三万円遺族、旧軍人寄附金二十四万円有志者特別寄附金二十三万円合計寄附金百四十万円を以て昭和三十年三月起工、同年十一月竣工した慎みて英霊の永劫に靖らかに鎮まらんことを祈り仰敬の誠を捧ぐ
昭和三十年十一月
建設委員長 吉田利行謹書
特記事項（遺族会会長の言葉）
遺族会会員の高齢化により維持が困難となっているが、英霊を祀り、戦争の悲惨さ、命の尊さを後世に伝えていきたい。

市木地区

忠霊塔

所在 串間市大字市木七四九二番地イ
管理 串間市市木地区遺族会
所有者 串間市市木地区遺族会
御祭神 一四四柱
建立日 昭和三十四年十一月十日
慰霊祭 四月（慰霊祭） 十月（串間市戦没者合同追悼式）
碑文 吾が国は明治初年以來幾多の戦争に際し多数の先人が貴い生命を献げられ殊に日清日露の両役並に第二次世界大戦には多くの同郷の士が故国を離れて北に南に散華されなほ又銃後にあって郷土を守って仆れられた市民もあつた戦は終り国民はかつてない苦難に面したが今近く両建の態勢成り民族独立の歩を進めてあるそれにつけても偲ばるゝものは国に殉ぜられた諸士のことである この塔は私達市民がいさゝかの資を集め旧碑を今祠し在天の霊を慰め且つは其の徳功を顕彰すると共に堅い平和への決意を祈願して建立したものである 来り仰ぐ人々この意を諒し一柱の香一枝の花を供えて敬弔の誠を示されんことを
昭和三十四年十一月十日
忠霊塔建設同志会 委員長 平島又衛門
特記事項（遺族会会長の言葉）
二度と戦争をしてはならないということを次世代に伝えていくことが遺族会としての責務である。遺族会を存続させるためにも孫、ひ孫に受け継いでいくかが課題である。



大東亜戦争終結七十年事業

県内護國神社並びに忠霊塔慰霊碑巡拝

主催 宮崎県神道青年会
期 日 平成二十八年三月一日
趣 旨

平成二十七年は大東亜戦争終結七十年の節目にあたり、全国において英霊顕彰事業が執り行われた。当会においても、県内護国神社並びに戦歿者忠霊塔慰霊碑に、会員各々が現地に足を運び調査活動を行い、一冊の本にして発刊すべく準備を進めている。

この調査により、我々が住む地域からも家族と故郷を護るために戦地へ赴き、散華した御霊が数多おられることを改めて認識することとなった。また健在の遺族より、今なお忘れられない当時の記憶を聞くことができたのは、非常に貴重な経験となった。

しかしながら、終戦より七十年もの長き年月が流れた現在においては、遺族は減少し、戦争を知らない世代が大半を占め、御霊への慰霊と顕彰の念を継承することが困難になっている。今回の調査で地区慰霊祭の減少、中断、慰霊碑統合等の現状も垣間見ることができたのも事実である。

もとより神職の本身は祈りである。地区会員が一同に集い、巡拝を行うことで神職として祈ることの意義を再認識していただきたい。そしてさらには、遺族をはじめ地域住民の英霊に対する永遠の祈りに繋がることを願い、本事業を開催する。

参加者

宮崎 串間慶士、黒木英彦、鳥原浩之、出光弘忠、緒方啓吾、佐藤豊、本部怜、金丸孝史、塩満太佑 以上九名

都城 (都城市) 黒木興輔、尾上祐一郎 以上二名

西諸県 小多田将志、濱砂明大、永井里佳 以上三名

児湯 (西児湯) 藤田哲平 以上一名

(東児湯) 永友郁央、黒木寛貴 以上二名

南那珂 佐師正教、佐師慶保、森山幸男、日高啓貴、安藤祐一郎 以上五名

県北 佐藤永周、河野吉明、古賀勇人 以上三名



県内巡拝一覧

	宮崎地区		都城地区		児湯地区		南那珂地区		県北地区	
	都城市		西諸県							
七時	小戸・中央・江平（鳥原）									
八時	櫛（黒木英）									
八時三〇分	住吉（出光）									
九時	広瀬護國神社（本部）				三財（藤田）		大東（森山）		天岩戸（佐藤永）	
九時三〇分	佐土原（本部）						福島（佐師正）		高千穂（佐藤永）	
十時	那珂（本部）		高城（尾上）				福島護國神社遙拝		日之影（佐藤永）	
十時三〇分	瓜生野（黒木英）		志和池（尾上）				北方（佐師慶）		延岡市（佐藤永）	
十一時	倉岡（緒方）		山田（尾上）		高原（濱砂）		本庄（日高啓）			
十一時三〇分	木脇教育隊記念碑（緒方） 国富町（緒方）		庄内（尾上）		野尻（濱砂） 須木（濱砂）		都井（安藤） 市木（森山）		南方（佐藤永） 恒富（古賀）	
十二時	綾護國神社（佐藤豊）		高崎（尾上）				南郷（佐師正） 榎原遙拝		南方（佐藤永）	
十二時三〇分	高岡護國神社（金丸孝） 穆佐護國神社（金丸孝）						榎原遙拝 細田遙拝 回天訓練地碑遙拝		南方（河野）	
十三時					穂北（藤田）					
十三時三〇分	大塚（金丸孝） 生目（金丸孝）		郡元（尾上）		小林（濱砂）		吾田（佐師慶） 飫肥（日高啓）			
十四時	大淀・古城（佐藤豊）		祝吉（尾上）		えびの飯野（小多田）		都於郡（藤田）		酒谷（安藤）	
十四時三〇分	赤江（佐藤豊）		前田（尾上）		えびの加久藤（小多田）				門川（河野）	
十五時	宮崎特攻基地（塩満）		都島（尾上）		えびの真幸（濱砂）		妻（藤田）		北郷（森山）	
十五時三〇分	木花（塩満） 清武（本部）		上長飯（尾上）						東郷（佐師正）	
十六時	青島（塩満）						新富（藤田） 都農町（永友郁）		油津（佐師慶） 海難者慰霊塔遙拝	
十六時三〇分	内海（塩満） 田野（出光）		三股（尾上）				川南護國神社（永友郁）		漁士之碑遙拝 梅ヶ浜遙拝	
十七時三〇分	大宮（出光）						木城町（永友郁）		鶴戸（安藤）	
十八時										

宮崎縣護國神社参拝

※括弧内氏名は斎主
※児湯地区内の都農町、川南町、木城町は別日（2月28日）に巡拝

ひむかいの塔

所在 沖縄県糸満市米須西原

日本本土の防壁となつて奇烈を極めた沖縄戦の最後の激戦地であり、また宮崎県出身の将兵が最も多く戦歿されたこの地域の中心にあたる場所を選んで建立された。

所有者 財団法人宮崎県遺族連合会

管理者 財団法人沖縄県平和祈念財団（沖縄県戦没者等慰霊奉賛会）

御祭神 三一、二三七柱

建立時は、沖縄戦での本県戦歿者一、八四八柱。昭和四十五年に、沖縄戦以外の本県出身戦歿者二九、三八九柱も合祀された。

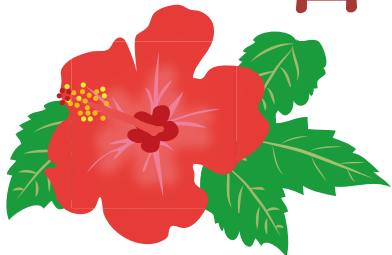
建立日 昭和四十年十一月十八日



当会創立六十周年記念事業



平成二十四年慰霊祭



概要

慰霊碑の名称は、公募により決定された。宮崎県の古名「日向の国」ひむかの国」に由来し、これに平和の象徴である太陽に向かうという世界平和を祈念する意味を込めて「日に向かう」ひむかい」と命名されたとのこと。

敷地総面積一、一三平方メートル

塔は、本県延岡市産出の自然石が用いられた。御霊たちの安息されたお姿を象徴し、塔は横たえて安置されている。塔域は暑さの厳しい沖縄の地にあつて、御霊たちが静かな樹陰で安らかにお鎮まりいただけますようにと、緑化・植樹がされている。

沖縄での慰霊祭

本土復帰前、昭和三十七年十一月十五日、当会第三代清水惟重会長時代に、神道青年九州地区協議会主催のもと沖縄の地で初となる神式の慰霊祭が全国に先駆けて斎行された。昭和三十五年五月開催の神道青年全国協議会の定例総会に於いて、当時の長友安美会長と清水惟重副会長が出席し、沖縄での慰霊祭を神社界が先がけて執行するよう提案した。沖縄は占領下であり、神青協では無理だ、神社本庁主催で行うべきとの意見が強かったが、清水副会長の熱心な説明により全会一致で承認され、実行は執行部一任となった。翌年熊本県における九州地区大会にて次期当番県が鹿児島県となるので、沖縄と密接な関係でもあることから神青協を代表して、沖縄現地慰霊祭を九州地区神道青年会で行うことが決まった。

また、ひむかいの塔慰霊祭に宮崎県神道青年会が奉仕したのは、昭和四十五年十一月であった。第四代佐藤宣久会長以下八名の先輩方が初めて奉仕されており、奉仕者は佐藤宣久会長（第四代）をはじめ、甲斐直、中原捷博、丸山亘、岩切重信、長友隆二、横山昇、富永久男ら八名であった。復帰前でもありバスポートなどの渡航手続きや船旅での注意事項などの資料が宮崎縣護國神社に残っている。この年より毎年、宮崎縣護國神社より祭典奉仕の依頼があり、祭典奉仕者は宮崎縣護國神社と宮崎神宮の神職、そして当会会員一名で構成されていた。（平成十一年まで）

（創立五十周年記念誌より）

ひむかいの塔慰霊祭等年表

昭和	
三十七年	十一月十五日 清水惟重会長（宮崎神宮） 九州地区協議会主催で戦後初の神式慰霊祭斎行
四十年	八月二十四日 入魂式 於宮崎縣護國神社 十月十六日 竣工除幕式 於ひむかいの塔 十一月十八日 ひむかいの塔建立
四十五年	九月二日 佐藤宣久会長・中原捷博副会長が協議 於宮崎神宮 九月七日 役員会にて奉仕を決定 於天岩戸神社 十一月十六日 佐藤宣久（天岩戸神社）以下八名 二十日まで
四十六年	十一月十六日 岩切宗治（霧島神社）二十日まで
四十七年	十一月十六日 甲斐靖（児原稻荷神社） 前田壮一郎（宮崎神宮） 二十一日まで 神青協波照間の碑建立に付き、礎石二十個・協賛金二万二千円委託
四十八年	十一月十五日 香取辰夫（鶴戸神宮） 稲丸利弘（宮崎神宮） 二十一日まで
四十九年	十一月十六日 前田文瑞（神社宮） 宇都宮正和（宮崎神宮） 二十日まで
五十一年	二月三日 七日まで 海上追悼式 本部雅裕（鶴戸神宮） 以下三名 五日まで
五十二年	十一月十六日 海上追悼式 黒木忠仁（鶴戸神宮） 二十日まで
五十三年	十一月十五日 海上慰霊祭 橋口清文（宮崎縣護國神社） 十九日まで
五十四年	十一月十八日 稲丸利弘（東霧島神社）
五十五年	十一月十七日 甲斐恒男（今山八幡宮） 以下三名 二十日まで
五十六年	十一月十七日 佐藤重昭（天岩戸神社） 十九日まで
五十七年	六月十七日 長友隆二（青島神社）以下参拝 北方領土早期返還沖縄キャンペーン時 榊植樹 六月十九日 神青協沖縄県祖国復帰十周年慰霊祭 日高久光（吾平津神社） 以下三名 尾方一郎（鶴戸神宮） 十九日まで
五十八年	十一月十七日 松浦秀利（神社庁） 原賢一郎（宮崎神宮） 十九日まで
五十九年	十一月十七日 安藤定彦（駒宮神社） 十九日まで
六十年	十一月十七日 佐藤延生（天岩戸神社） 十九日まで
六十一年	十一月二十六日 宮田義和（田野天建神社） 二十八日まで
六十二年	八月二十三日 国旗柱・県旗柱竣工祭 本部雅裕（春日神社） 以下四名
六十三年	十一月十八日 長友昌彦（恒久神社） 二十日まで 十一月十七日 石川聖規（幸福神社） 十九日まで

昭和

平成

平成															
元 年	十一月十七日	池田 稔（都農神社） 以下四名 十九日まで													
二 年	三月十三日	神青協「聖寿奉祝の碑」修復並び奉告祭 宮田義和（田野天建神社） 十六日まで													
三 年	十一月十七日	松田治生（郷原神社） 十九日まで													
四 年	十一月十七日	横山 昇（宮崎神宮） 以下四名 十九日まで													
五 年	六月十日	沖繩本土復帰二十周年記念慰霊祭 於沖縄県護国神社 永友宗範（立花神社） 以下五名 十二日まで													
六 年	十一月十七日	永友謙二（鶴戸神宮） 以下四名 十九日まで													
七 年	十一月十七日	緒方啓文（宮崎八幡宮） 以下四名 十九日まで													
八 年	五月十六日	沖繩県南方全戦歿者慰霊祭 終戦五十年慰霊祭 原賢一郎（宮崎神宮） 以下二名 十七日まで													
九 年	十一月十七日	柳田茂也（青島神社） 以下四名 十九日まで													
十 年	十一月十七日	中武信明（鶴戸神宮） 以下四名 十九日まで													
十一 年	十一月十七日	土持英征（速川神社） 以下四名 十九日まで													
十二 年	十一月十七日	壹岐和史（栗尾神社） 以下四名 十九日まで													
十三 年	十一月十七日	神青協創立五十周年事業「聖寿奉祝の碑」修復及び奉告祭 伊東健治（鶴戸神宮） 六日まで													
十四 年	十一月十七日	黒木英彦（八幡神社） 以下四名 十九日まで													
十五 年	十一月十七日	甲斐秀樹以下三名 十九日まで													
十六 年	五月八日	九州地区神職総会沖縄県開催につき慰霊祭 伊藤俊郁（今山八幡宮） 以下三名													
十七 年	六月十九日	沖繩本土復帰三十周年慰霊祭 於沖縄県護国神社 馬乗國貴稔（宮崎神宮） 以下三名													
十八 年	十月二十七日	神青協創立五十五周年事業「聖寿奉祝の碑」奉告祭 伊東健治（鶴戸神宮） 二十八日まで													
十九 年	三月二十五日	神青協創立六十周年事業「聖寿奉祝の碑」奉告祭 長友安隆（青島神社） 以下二名 二十六日まで													
二十 年	四月七日	宮崎県神道青年会創立六十周年記念事業「慰霊祭」 長友安隆（青島神社） 以下十五名 八日まで													
二十一 年	五月九日	九州地区神職総会沖縄県開催につき慰霊祭 串間祥亮（小戸神社） 以下十四名※神職子弟を含む													
二十二 年	十月九日	神青協創立六十五周年事業「聖寿奉祝の碑」奉告祭 串間慶士（宮崎神宮） 十一日まで													

全国の護国神社



(写真提供) 福岡縣護國神社

護国神社とは

幕末維新期以来、第二次大戦に至る戦役で没した人々祀る神社で、招魂社を前身とする。昭和十四年、内務省令により明治以降に設立された招魂社百数十社余りをすべて護国神社と改称することになった。内務大臣の指定する指定護国神社と、それ以外の指定外護国神社に分けられた。前者は原則として一府県一社とされ、祭神の範囲は神社の所在する道府県の区域とされた。社司一人と社掌若干人が置かれた。後者には社掌若干人が置かれた。いずれも社格は与えられなかったが、指定護国神社は府県社相当、指定外護国神社は村社相当とみなされた。

終戦直後、占領軍より監視を受け、大半の神社が社名を変えたが、今日ではほとんど元の社名に戻している。戦後は国家管理から離れたため、一般の神社同様、宗教法人となった。そして祭神に地方公共団体関係の殉職者などを加えている例が多い。なお、護国神社の総本社の位置にあつたのが靖國神社である。(神道辞典より)

靖國神社 東京都千代田区九段北三丁目一一一

北海道

函館護國神社 北海道函館市青柳町九一三
札幌護國神社 北海道札幌市中央区南十五条西五一三
北海道旭川市花咲町一一三二八二二

東北

青森縣護國神社 青森県弘前市下白銀町一一三
岩手縣護國神社 岩手県盛岡市八幡町一三一二
宮城縣護國神社 宮城県仙台市青葉区青葉城址天守台
秋田縣護國神社 秋田県秋田市寺内大畑五一三
山形縣護國神社 山形県山形市薬師町二一八七五
福島縣護國神社 福島県福島市駒山一

南関東

埼玉縣護國神社 埼玉県さいたま市大宮区高鼻町三一四九
千葉縣護國神社 千葉県千葉市中央区弁天三一六一一

北関東・甲信

茨城縣護國神社 茨城県水戸市見川一一一一
栃木縣護國神社 栃木県宇都宮市陽西町一一三七
群馬縣護國神社 群馬県高崎市乗附町二〇〇〇
山梨縣護國神社 山梨県甲府市岩窪町六〇八
長野縣護國神社 長野県松本市美須々六一一

北陸

新潟縣護國神社 新潟県新潟市中央区西船見町五九三一一三〇〇
富山縣護國神社 富山県富山市機部町一一一
石川縣護國神社 石川県金沢市石引四一八一一
福井縣護國神社 福井県福井市大宮二一一三八

東海

岐阜縣護國神社 岐阜県岐阜市御手洗三九三
濃飛護國神社 岐阜県大垣市郭町二一五五
飛騨護國神社 岐阜県高山市堀端町九〇
静岡縣護國神社 静岡県静岡市葵区柚木三六六
愛知縣護國神社 愛知県名古屋市中区三の丸一一七一三
三重縣護國神社 三重県津市広明町三八七

近畿

滋賀縣護國神社 滋賀県彦根市尾末町一一五九
京都靈山護國神社 京都府京都市東山区清閑寺靈山町一
大阪護國神社 大阪府大阪市住之江区南加賀屋二一一七七
兵庫縣神戸護國神社 兵庫県神戸市灘区篠原北町四一五一
兵庫縣姫路護國神社 兵庫県姫路市本町一一八
奈良縣護國神社 奈良県奈良市古市町一九八四
和歌山縣護國神社 和歌山県和歌山市一番丁三

中国

鳥取縣護國神社 鳥取県鳥取市浜坂一三八一五三
松江護國神社 島根県松江市殿町一一一五
濱田護國神社 島根県浜田市殿町二一三三〇
岡山縣護國神社 岡山県岡山市中区奥市三一二二
廣島護國神社 広島県広島市中区基町二一二
備後護國神社 広島県福山市丸之内一九一一
山口縣護國神社 山口県山口市平野二二一一

四国

徳島縣護國神社 徳島県徳島市雑賀町東開二一一
香川縣護國神社 香川県善通寺市文京町四一五一五
愛媛縣護國神社 愛媛県松山市御幸一一四七六
高知縣護國神社 高知県高知市吸江二二三

九州

福岡縣護國神社 福岡県福岡市中央区六本松一一一一
佐賀縣護國神社 佐賀県佐賀市川原町八一五
長崎縣護國神社 長崎県長崎市城栄町四一六六七
熊本縣護國神社 熊本県熊本市中央区宮内三一
大分縣護國神社 大分県大分市大字牧一三七一
宮崎縣護國神社 宮崎県宮崎市神宮二一四一三
鹿児島縣護國神社 鹿児島県鹿児島市草牟田二一六〇七
沖縄縣護國神社 沖縄県那覇市奥武山町四四

平成二十七年には、全国の護国神社において終戦七十年臨時大祭が斎行されるにあたり、天皇陛下より特別の思し召しを以て全国の指定護国神社五十二社に幣帛料が御下賜されました。



大分縣護國神社



千葉縣護國神社



福井縣護國神社



富山縣護國神社



沖縄縣護國神社



廣島縣護國神社



石川縣護國神社



愛知縣護國神社



三重縣護國神社



岩手護國神社



函館護國神社



宮城縣護國神社

東京都

靖國神社



鎮座地 千代田区九段北三十一
電話 〇三(三六二)八三六
FAX 〇三(三六二)〇八一
HP <http://www.yasukuni.or.jp/>
御祭神 二四六万余柱
例祭 春 四月二十一日～二十三日
秋 十月十七日～二十日
みたま祭 七月十三～十六日
創建 明治二年六月二十九日

由緒沿革

靖國神社は、明治七年(一八七四)一月二十七日、明治天皇が初めて招魂社に御親拝の折にお詠みになられた「我國の為をつくる人々の名もむさし野にとむる玉かき」の御製からも知ることができるよう、国家のために尊い命を捧げられた人々の神霊を慰め、その事績を永く後世に伝えることを目的に創建された神社です。「靖國」という社号も明治天皇の命名によるもので、「祖國を平安にする」「平和な国家を建設する」という願いが込められています。

靖國神社には現在、幕末の嘉永六年(一八五三)以降、明治維新、戊辰の役(戦争)、西南の役(戦争)、日清戦争、日露戦争、満洲事変、支那事変、大東亜戦争などの国難に際して、ひたすら「国安かれ」の一念のもと、国を守るために尊い生命を捧げられた二四六万余柱の方々の神霊が、身分や勲功、男女の別なく、すべて祖國に殉じられた尊い神霊(靖國の大神)として齊しくお祀りされています。



明治

二年

五月

戊辰戦争終結(十八日)
軍務官知事仁和寺宮嘉彰親王の命により同副知事大村益次郎らが東京九段坂上三番町の旧幕府歩兵屯所跡に赴き、招魂社建設地を檢分(十二日)

六月

九段坂上招魂社社地を東京府から受領 仮本殿、拝殿を起工(十九日)

七月

二十九日から五日間、招魂祭執行の旨、軍務官より在京諸藩に通達(二十三日)

八月

東京招魂社鎮座、第一回合祀祭鎮座祭(二十九日) 併せて相撲奉納

九月

永世高(寄附米 一万石を下附する旨の御沙汰(二十二日)

十月

例大祭に併せて競馬興行(明治三十一年まで)

十一月

本殿竣工(七日)

十二月

明治天皇が初めて東京招魂社に行幸(二十七日)

二十三年

「我國の為をつくる人々の名もむさし野にとむる玉かき」の御製を賜る

三十四年

西南戦争勃発

三十五年

牛ヶ淵附屬地を買収し、神社非常時の避難所とする

三十六年

東京招魂社を靖國神社と改称 別格官幣社に列せられる(四日)

三十七年

軍人勅諭頒発

三十八年

遊就館開館式挙行

三十九年

青銅大鳥居(第二鳥居)竣工

四十年

教育勅語頒発

四十一年

第一次帝國議會召集

四十二年

兵部大輔大村益次郎銅像竣工(日本初の本格的西洋式銅像)

四十三年

日清戦争勃発

四十四年

下関講和条約調印

四十五年

北清事変

四十六年

拝殿竣工(五日)

四十七年

牛ヶ淵附屬地に遊就館附屬國光館(パノラマ館)開館

四十八年

日露戦争勃発

四十九年

ポーツマス講和条約調印

五十年

靖國神社附屬圖書館開館

大正

三年

七月

第一次世界大戦勃発

四年

八月

シベリア出兵

五年

五月

鎮座五十年記念祭

六年

三月

大正天皇行幸、皇太子裕仁親王行啓(二日)

七年

三月

尼港(ニコライエフスク)事件

八年

六月

第一鳥居竣工

九年

九月

関東大震災により拝殿、遊就館等に甚大な被害

十年

三月

支那事変

十一年

七月

新招魂斎庭竣工

十二年

四月

張鼓峰事件

十三年

七月

ノモンハン事件

十四年

五月

北都仏印進駐

十五年

九月

紀元二千六百年記念式典

十六年

十一月

大東亜戦争勃発

十七年

十二月

腐蝕により第一鳥居撤去 木造仮鳥居竣工

十八年

十月

ポツダム宣言受諾

十九年

八月

遊就館令廃止 靖國神社宝物館と改める

二十年

十一月

臨時大招魂祭 昭和天皇行幸

二十一年

十二月

連合国軍による神道指令発出

二十二年

七月

みたままつり始まる

二十三年

四月

サンフランシスコ講和条約発効

二十四年

十月

昭和天皇・香淳皇后行幸啓(十六日)

二十五年

十月

御創立百年記念大祭

二十六年

三月

昭和天皇・香淳皇后行幸啓(二十日)

二十七年

三月

霊寶薄奉安殿竣工

二十八年

十月

第一鳥居再建

二十九年

十一月

昭和天皇・香淳皇后行幸啓(二十一日)

三十年

七月

遊就館再開



上空からの眺め



拝殿

北海道

函館護國神社

鎮座地 函館市青柳町九一三
電話 〇一三八（二三）〇九五〇
FAX 〇一三八（三三）八八六一
HP <http://hakodate-gokoku.jp/>
御祭神 一三、〇〇〇余柱
例祭 五月十一日
創建 明治二年



明治	昭和	平成
二年 七年	十四年 十七年 二十一年 二十九年 三十三年 三十七年 三十九年 四十四年	二年
現在地に兵部省によつて招魂社創建 招魂社が開拓使に引き継がれ、官祭招魂社となる 爾来、箱館戦争の終結記念日である五月十一日を以て祭日と定め、招魂祭齋行	内務大臣指定の函館護國神社となる（三月十五日） 境内の大改修、社殿造営の為、御造営奉賛会が発足し境内整備開始 本殿、拝殿、翼舎、斎館、社務所が竣工し、盛大な遷座祭齋行（十月十二日） 潮見が丘神社と改称（十月一日） 函館護國神社と復称（十一月一日） 皇太子殿下御参拝（七月七日） 函館護國神社御造営奉賛会結成 御屋根銅板葺工事竣工（九月） 御創立百年記念例大祭齋行（五月十一日）	本殿修復、大島居建替、社務所新築等（御鎮座百二十年記念事業）

「年々歳々花相似たり、年々歳々人同じからず」という一句があるが、御祭神は永久に若く、常に変わることなく、国の平安、郷土と家族の繁栄を見守り、人々が生活していく上での災いを鎮め、日々の生活が安心、安全に営まれることを祈り続けている。

北海道

北海道護國神社

鎮座地 旭川市花咲町一―三二八二―一
電話 〇一六六（五一）九一九一
FAX 〇一六六（五一）九一九一
HP <http://www.hokkaido-gokoku.org/>
御祭神 六三、一五四柱
例祭 六月五日
みたま祭 八月十三―十七日
創建 明治三十五年五月五日



明治	昭和	平成
四十四年	八年 十年 十四年 二十一年 二十六年 三十五年 四十四年 三十九年	二十三年
旧第七師団長大迫尚敏氏を祭主として、練兵場に小祠を設け北海道における国事殉難者並開拓に殉じた屯田兵の招魂祭を挙行したのに始まる（五月五日） 日露戦争勃発するや北鎮師団は旅順の功撃奉天の大会戦に参加し、戦死者は約四千五百名、戊辰以降の英霊に加えて五千柱に及んだため、社殿創建の議が興った第七師団長上原勇作、道庁長官河島醇両氏発起の下、社殿造営（五月十日）	北海道招魂社と改称（九月） 師団長杉原美代太郎氏、長官佐上信一氏発起の下、社殿造営 内務大臣指定の北海道招魂社となる（四月一日） 北海道神社と改称（九月二十五日） 北海道護國神社と復称（八月） 町村金五氏（知事）を総裁として造営奉賛会結成（四月） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（九月二十一日） 天皇皇后両陛下御親拝（九月三日） 社殿改築竣工により本殿遷座祭並奉祝祭齋行（九月二十日）	御創祀百十年記念事業として、本殿以下屋根銅板葺替工事完工

昭和六年満州事変以来支那事変はもとより、大東亜戦争の最終たる沖縄の玉砕に至るまで実に五万五千柱の尊い身命を祖国に捧げられたが、英魂は永遠に故郷のこの御社に鎮まり給うた。

北海道

札幌護國神社

鎮座地 札幌市中央区南十五条西五丁目一―三
電話 〇一一（五一）五四二一
FAX 〇一一（五一）五四三二
HP <http://s-gokoku-jinja.sakurane.jp/>
御祭神 二五、五四八柱
例祭 七月六日
みたま祭 六月第一土曜日
創建 明治十二年



明治	大正	昭和	平成
十二年 四十四年	十一年	八年 十四年 二十一年 二十四年 三十四年 三十五年 四十四年 四十五年 四十七年 五十四年	元 年
西南の役に戦病歿した屯田兵の慰霊の為、借樂園前に招魂碑建立 招魂碑は中島公園に移設（二月） 日露戦役により乃木希典將軍の直筆による忠魂碑完成	拝殿を造営して札幌招魂社と称する（七月）	現在地に社殿造営、遷座祭齋行（十一月十七日） 内務大臣指定の札幌護國神社となる（四月一日） 札幌彰徳神社と改称（十二月十二日） 札幌護國神社と復称（七月一日） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（八月十五日） 不慮の火災により社殿焼失（十月十日） 社殿再建、遷座祭齋行（八月二日） 天皇皇后両陛下御親拝（二月三日） 西南の役百年記念事業、遺品殿の新設並びに境内整備等 遺品殿には旧札幌歩兵第二十五連隊歴史記念館の陳列品の一部や、遺品や写真が数多く展示されている 三笠宮崇仁親王殿下御参拝 境内の慰霊碑群一帯を「彰徳苑」と命名（六月七日）	西南の役より百十年の節目として、廻廊と社務所等の改修

青森県

青森縣護國神社

鎮座地 弘前市下白銀町一番地三号
電話 〇一七一（三三）〇〇三三
FAX 〇一七一（三三）〇〇三三
御祭神 二九、一八二柱
例祭 四月二十九日
みたま祭 四月二十八日・九月の第一土曜日
創建 明治二年六月六日



明治	昭和	平成
二年 三年 二十一年 四十四年	十一年 十四年 十五年 二十年 三十五年 三十八年	
第十二代藩主津軽承昭、箱館五稜郭の戦い（箱館戦争）等にて戦没した津軽藩士六十七柱の慰霊祭を、弘前城下宇和野（現坂りんこ公園）にて齋行（六月六日） 弘前市に隣接する富田村に招魂堂建立。羽州庄内、奥州南部、松前箱館の役等で戦没した弘前藩士、応援の肥後熊本細川藩士の御霊二百人余を合祀（三月九日） 弘前市上白銀町（現藤田記念庭園）に招魂堂移築（十二月） 弘前公園内の現在地に移築し、弘前招魂社と称する（二月）	青森縣招魂社となる（八月） 内務大臣指定の青森縣護國神社となる（四月一日） 皇紀二千六百年を記念し、社殿・社務所新築、社頭整備 終戦後、連合国軍総司令部は神社活動へ妨害を加えてきた。当社は、これに対し関係者の力を結集し、「護国神社」の名称を護った全国四社の中の一社である 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十月一日） 天皇皇后両陛下御親拝（五月二十一日）	

いまの私たちは、平和で豊かな暮らしを当たり前のように思っていますが、今から百年ほど前は、決してそうとはばかりは言えませんでした。当時の世界は、国家の舵取りを誤れば、いつ西欧諸国に支配されるか分からない時代だったのです。このような時代に近代国家としての産声を上げたわが国は、自らの生存と独立を護るため幾度か戦わざるを得ませんでした。今の平和と豊かな暮らしは、国の危機に際して尊い命を捧げられた「英霊」のおかげであることを、決して忘れてはなりません。「私たちの今」と、どこかで必ず繋がっている英霊にあなたからひとこと「ありがとう」と伝えてください。

岩手県

岩手護國神社

鎮座地 盛岡市八幡町十三番二号
電話 〇一九（六五二）五二二一
FAX 〇一九（六五二）五二二一
HP <http://morikashin.jp/>（盛岡八幡宮）
御祭神 三五、八〇〇余柱
例祭 五月三日
創建 明治二年十一月二日



明治	昭和	平成
二年 九十四年 三十九年	勤王の大義を固守し国事に殉じた勤王の志士目時隆之進命・中島源蔵命の二柱の御霊を祀る為、盛岡藩知事南部利恭が岩手郡東中野村茶畑に創建（十一月二日） 岩手招魂社となる（十二月） 当時の内丸公園地（盛岡城跡）に遷座 県社盛岡八幡宮境内に遷座	八十年 拝殿増築、社務所改修

秋田県

秋田県護國神社

鎮座地 秋田市寺内大畑五一三
電話 〇一八（八四五）〇三三七
FAX 〇一八（八四五）三三四一
御祭神 三七、八四一柱
伊邪那岐命 伊邪那美命
例祭 春 四月二十九日
秋 十月二十四日
創建 明治二年八月二十八日



明治	昭和	平成
二年 二十六 三十二年 三十四年	秋田藩主佐竹義堯侯によって高清水丘に招魂社創建（八月二十八日） 夜看守の失火により社殿焼失（十二月） 秋田市佐竹城跡（現在の千秋公園本丸）に社殿造営、遷座祭斎行（五月五日） 官祭秋田招魂社となる（六月十四日）	十四年 十五年 二十二年 二十八年 三十五年 四十三年 四十四年 四十五年

宮城県

宮城縣護國神社

鎮座地 仙台市青葉区青葉城址天守台
電話 〇二二（二三三）七二五五
FAX 〇二二（二三三）七二六九
HP <http://www.gokokuinjia.org/top/index.htm>
御祭神 五六、〇〇〇余柱
例祭 春 四月二十九、五月一日
秋 十月二十二、二十三日
創建 明治三十七年



明治	昭和	平成
三十七年	仙台城（青葉城）本丸城址に招魂社造営（八月二十七日）	十四年 十七年 二十年 二十二年 二十八年 三十二年 三十三年 三十五年 三十八年 四十二年 四十七年 五十九年

山形県

山形縣護國神社

鎮座地 山形市薬師町二丁目八一七五
電話 〇二三（六三一）五〇八六
FAX 〇二三（六二四）八四六六
HP <http://yanagaken-gokokuinja.jp/>
御祭神 四〇、八四五柱
例祭 五月十一日
創建 明治二年一月



明治	大正	昭和	平成
二年 八年 十一年 二十一年 四十四年	二年	八年 九年 十四年 二十二年 二十七年 三十五年 四十四年 五十二年	六年
旧薩州藩大砲長久永竜助以下十名の国事殉難の士慰霊のため創建（二月） 官祭山形招魂社となる（六月） 山形市八日町に社殿造営 戊辰戦争、西南の役の戦没者を合祀（九月） 山形市宮町の千歳公園内に遷座（十月） 山形市大火の際、社殿焼失（五月八日）	山形市薬師町に社殿造営（三月）	官祭山形招魂社と改称（三月十三日） 現在地に新社殿造営、遷座祭齋行（十月二十八日） 内務大臣指定の山形縣護國神社となる（四月一日） 千歳宮と改称（四月十三日） 山形縣護國神社と復称（十二月六日） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十月二十八日） 御創建百年記念大祭齋行（十一月二日） 参集所竣工（五月一日）	拝殿改築竣工（九月八日）

英霊は家族、郷土のため、さらには国家を守るために尊い生命を御国に捧げた方々である。私どもは英霊に感謝し、心から畏敬の念をもち「護国の神」としてお祀りしている。

福島県

福島縣護國神社

鎮座地 福島市駒山一番地（信夫山鎮座）
電話 〇二四（五三三）〇五一九
FAX 〇二四（五三三）七八二一
HP <http://gokoku559.info/>
御祭神 六八、五〇〇余柱 天照皇天御神
例祭 春 四月二十三日
秋 九月二十三日
みたま祭 八月十三〜十八日
創建 明治十二年十月四日



明治	昭和	平成
十二年 招魂社造営 官祭信夫山招魂社となる（十月四日） 戊辰の役に殉じた相馬・田村・会津の招魂場に祀られていた御霊と、西南の役に殉じた管内人の御霊を合祀した 有栖川宮熾仁親王殿下より「吐芳」の御染筆御額一面御寄進（四月三日） 小松宮彰仁親王殿下より「信夫山招魂社」の御染筆御額一面御寄進（十一月） 皇太子殿下御参拝（九月十三日）	九年 東久邇宮殿下御参拝（二度目）、本殿左右に石灯笼二基ご寄進（八月七日） 社殿造営（現在に至る） 十四年 内務大臣指定の福島縣護國神社となる（四月一日） 伊勢の神宮・天照皇天御神をお祀りし、大霊神社と改称 二十七年 福島縣護國神社と復称（九月十八日） 合祀概了臨時大祭斎行（九月二十三日） 三十五年 初回みたま祭斎行（八月一日） 四十七年	四年 大鳥居建替竣工（六月） 七年 終戦五十年 社殿屋根銅板葺替

皇室の方々より数多くのご参拝を賜り、幣帛料・幣饌料が御下賜された由緒深い神社でもある。
明治・大正・昭和の激動の時代を経て、昔と変わらず今も静かに信夫山に鎮座している。

千葉県

千葉縣護國神社

鎮座地 千葉市中央区弁天三丁目十六番一号
電話 〇四三（二五一）〇四八六
FAX 〇四三（二五一）七一〇三
HP <http://www.chiba-gokoku.jp/main.html>
御祭神 五七、八二八柱
例祭 春 四月十日
秋 十月十日
みたま祭 七月十三日〜十五日
創建 明治十一年一月二十七日



明治	昭和	平成
十一年 初代県令柴原和の發起により、県庁公園内に千葉縣招魂社創建（二月二十七日） 維新の殉難者十六柱を合祀 県社千葉神社に境内に遷座	十二年 千葉市亥鼻山への遷座決定、起工（三月） 十八年 内務大臣指定の千葉縣護國神社となる（四月） 二十年 新社殿造営、遷座祭斎行（四月十九日） 二十二年 千葉大空襲により社殿焼失（七月七日） 二十七年 千葉縣護國神社と復称（四月） 二十九年 千葉縣護國神社と復称（六月二十三日） 現在地に社殿造営、仮殿のあった亥鼻山遷座、遷座祭斎行（九月三十日） 四十八年 天皇皇后両陛下御親拝（十月十三日） 四十八年 皇太子同妃両殿下御参拝（十月二十八日） 五十二年 御創立百年大祭斎行（十月十日）	七年 創立百十五年記念 社殿等の主要建造物大修復（六月二十二日） 十七年 終戦六十年記念事業として大鳥居再建（九月二十七日）

埼玉県

埼玉縣護國神社

鎮座地 さいたま市大宮区高鼻町三丁目一四九番地
電話 〇四八（六四一）六〇七〇
FAX 〇四八（六四七）一二二三
御祭神 五一、一八〇柱
例祭 春 四月九日
みたま祭 八月十五日
創建 昭和九年四月九日



国事に殉ぜられた埼玉県の英霊は、古くはそれぞれの縁故の地に祀られて、随時随所の神籬を樹て慰霊祭が斎行されていたが、日露戦役以後、英霊の数の増し加わるに及んで、春秋二季に別け、県下慰霊安鎮の祭が行われるようになった。

明治	昭和	平成
九年 大宮公園の西端奥山に埼玉県招魂社創建（四月九日） 鎮座祭に際し近衛師団長朝香宮鳩彦殿下御参拝、祭帑料下賜せられる（四月九日） 天皇陛下埼玉県下行幸に際し、祭帑料下賜せられる（十一月二十二日） 内務大臣指定の埼玉縣護國神社となる（四月一日） 埼玉神社と改称（十月三十日） 埼玉縣護國神社と復称（八月七日） 二十七年 奉賛会が設立され、以来年々の例大祭埼玉県民挙て厳肅盛大に斎行（二月） 三十年 天皇陛下合祀概了奉告臨時大祭に際し、幣帛料御奉納あらせられる（十月二十日） 三十五年 皇太子殿下御参拝、幣帛料御奉納あらせられる（九月二十七日） 四十年 天皇陛下終戦二十周年記念臨時大祭に際し、幣帛料御奉納あらせられる（十一月五日） 四十二年 天皇皇后両陛下御親拝、幣帛料御奉納あらせられる（十月二十三日）	十四年 鎮座祭に際し近衛師団長朝香宮鳩彦殿下御参拝、祭帑料下賜せられる（四月九日） 天皇陛下埼玉県下行幸に際し、祭帑料下賜せられる（十一月二十二日） 内務大臣指定の埼玉縣護國神社となる（四月一日） 埼玉神社と改称（十月三十日） 埼玉縣護國神社と復称（八月七日） 二十七年 奉賛会が設立され、以来年々の例大祭埼玉県民挙て厳肅盛大に斎行（二月） 三十年 天皇陛下合祀概了奉告臨時大祭に際し、幣帛料御奉納あらせられる（十月二十日） 三十五年 皇太子殿下御参拝、幣帛料御奉納あらせられる（九月二十七日） 四十年 天皇陛下終戦二十周年記念臨時大祭に際し、幣帛料御奉納あらせられる（十一月五日） 四十二年 天皇皇后両陛下御親拝、幣帛料御奉納あらせられる（十月二十三日）	五年 天皇皇后両陛下御親拝、幣帛料御奉納あらせられる（五月十四日） 二十七年 天皇陛下みたま祭並終戦七十年記念祭に際し、幣帛料御奉納あらせられる（八月十五日）

茨城県

茨城縣護國神社

鎮座地 水戸市見川一丁目二番一号
電話 〇二九（二四一）四七八一
FAX 〇二九（一九七）八三三三
HP <http://www.sakura559.net/>
御祭神 六三、四九六柱
例祭 春 四月十日
秋 十一月十日
創建 明治十一年二月



明治	昭和	平成
十一年 幕末から明治維新にかけて国の為に殉じた水戸藩関係の烈士等一、八〇〇余柱の御霊を御祭神として、水戸市常磐神社の境内地に、鎮靈社として創建（二月）その後、西南の役、日清戦争等による茨城県出身の戦役者の合祀がおこなわれ、全県下の戦歿英霊の御霊を奉斎する神社となる 日露戦争、日支事変等の戦歿御祭神は目を追うごとに急激に増加し、創建当時の御社殿では狭隘となっていた	十四年 水戸桜山の現在地に護国神社建設決定（四月） 十六年 内務大臣指定の茨城縣護國神社となる（十月二十九日） 二十二年 水戸桜山の現在地に社殿造営、遷座祭斎行（十一月六日） 二十九年 桜山神社と改称（八月一日） 三十五年 茨城縣護國神社と復称（十月一日） 三十五年 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十一月二十五日） 四十年 御遷座二十年記念 社殿屋根葺替竣工奉告祭斎行（三月十日） 四十四年 皇太子殿下御参拝（十月二十六日） 四十九年 天皇皇后両陛下御親拝（十月二十日）	元年 参集殿新築竣工（二月十日） 二十四年 さくら山遺品館開設

栃木県

栃木縣護國神社

鎮座地 宇都宮市陽西町一番三十七号
電話 〇二八（六二二）三二八〇
FAX 〇二八（六二七）三九六〇
HP <http://www.gokoku.gr.jp/>
御祭神 五五、三六一柱
例祭 四月二十八日
みたま祭 八月十三日～十五日
創建 明治五年十一月四日



明治	大正	昭和	平成
五年 八 年 九 年	七年	十四年 十五年 二十二年 二十七年 二十八年 三十五年 三十八年	八年
旧宇都宮藩知事（最後の藩主）戸田忠友をはじめ有志の人々により、戊辰の役に殉じた従三位戸田忠恕公（旧藩主）及び、臣下等九十六柱の英霊をご祭神として宇都宮招魂社創建（十一月四日） 官祭宇都宮招魂社となる（四月） 明治天皇ご巡幸に際し、金幣のご奉納を受く（六月）	陸軍特別大演習の際、勅使御差遣参拝（十一月十五日） 二荒山神社に接する宇都宮市馬場町字表尾山の高台に鎮座、毎年四月には、宇都宮城址で大規模な招魂祭が営まれていた	内務大臣指定の栃木懸護國神社となる（四月一日） 皇紀二千六百年記念事業 社殿造営、遷座祭斎行（四月二十九日） 彰徳神社と改称（十一月十四日） 占領解除により県戦没者合同慰霊祭臨時大祭斎行（四月二十八日） 本殿を銅板葺に改修 栃木懸護國神社と復称（四月二日） 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十一月二十七日） 境内に結婚式披露宴会場新設（十月）	天皇皇后両陛下御親拝（七月二十五日）

山梨県

山梨縣護國神社

鎮座地 甲府市岩窪町六〇八番地
電話 〇五五（二五二）六三七一
FAX 〇五五（二五四）四八八七
HP <http://www.naganogokoku.com/>
御祭神 二五、〇五〇柱
例祭 春 四月五日
秋 十月五日
みたま祭 八月十三日～十五日
創建 明治十二年十二月



明治	昭和	平成
十二年 四十年	十四年 十九年 二十一年 二十七年 二十七年	七年 十 年
山梨県神道事務局の発議により、甲府市太田町公園隣接地に招魂社建立（十二月） 西南の役にて戦没した本県出身者の御神霊を奉斎し、年々盛大に慰霊の祭典執行 甲府連隊創設に伴い太田町遊亀公園内に招魂社再建（四月）	山梨縣護國神社創建会設立（三月三日） 内務大臣指定の山梨縣護國神社となる（十一月二十八日） 現在地に社殿造営、鎮座祭斎行（十一月二十九日） 一死報国の誠を捧げた英霊を招魂社より奉還 山梨宮と改称（十月十二日） 山梨縣護國神社と復称（十一月十二日） 撰社山梨宮創建（十月五日） 山梨宮と改称した時に合祀した一世の亀鑑、師表と仰がれた民間人八柱を祀った御祭神は加賀美光章命（学者）、志村天目命（学者）、関戸左近命（郡内の義民）金子重右エ門命、三沢重右エ門命（太榊事件主唱者）、長田圓右エ門命（御嶽新道開削者）、徳島兵右エ門命（徳島堰開削者）、くり女命（節婦）である 合祀概了奉告臨時大祭斎行（八月二十六日） 本殿拝殿大改修（十一月二十六日） 御祭祀百年祭斎行（四月九日）	舞殿新築竣工 社務所新築竣工

群馬県

群馬縣護國神社

鎮座地 高崎市乗附町二〇〇〇
電話 〇二七（三三二）六三〇九
FAX 〇二七（三三二）六三〇九
HP <http://www.gunmagokoku.info/>
御祭神 四七、〇〇〇余柱
例祭 十月十六日、十七日
みたま祭 八月二十四日
創建 昭和十六年十一月十九日



明治	昭和	平成
四十二年	十四年 十五年 十六年 二十二年 二十五年 二十七年 二十九年 三十二年 三十五年 三十六年 三十七年 五十七年	三年 十一年
群馬県招魂会を結成し、高崎公園内に英霊殿を建て招魂祭斎行（三月二十七日）	挙県一致のもと御造営にとりかかり、多額の浄財と延十二万人の勤労奉仕により、遙か皇居に向かって現境内地に社殿造営が決定（七月五日） 本殿、社殿造営 斎館、社務所、参集殿建立 内務大臣指定の群馬縣護國神社となる（十一月八日） 支那事変に至るまでの、三、五七三柱の祭神を合祀し鎮座祭斎行（十一月十九日） 誠靈廟と改称（三月三十日） 上野神社と改称（六月十二日） 手水舎建立 群馬縣護國神社と復称（五月九日） 社殿屋根葺替工事竣工（四月九日） 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十月十六日） 御鎮座二十周年記念 参集殿落成（十一月十九日） 神楽殿建立 御鎮座四十周年記念 宝物遺品館竣工（六月十日）	御鎮座五十周年記念 社殿屋根葺替工事竣工（十一月十九日） 高崎白衣観音への道に添う風光に恵まれた緑の丘に祖霊殿建立

長野県

長野縣護國神社

鎮座地 松本市美須々六番一号
電話 〇二六三（三三六）一三七七
FAX 〇二六三（三三六）〇一九一
HP <http://www.naganogokoku.com/>
御祭神 六四、五九六柱
例祭 四月三十日
みたま祭 八月十三日～十六日
創建 明治十三年



明治	昭和	平成
十三年 十三年	十四年 十七年 二十二年 二十九年 三十四年 三十五年 三十六年 三十七年 三十九年 四十五年 五十四年	三年 十六年 二十六年
長野市城山公園に信濃招魂社創建	旧陸軍歩兵第五十聯隊に隣接する現在地に仮殿建設 明治戊辰の役以来の御英霊をお祀り申し上げ、長野縣招魂社と称す（十二月） 内務大臣指定の長野縣護國神社となる（四月一日） 現在の御社殿、斎館竣工、本殿遷座祭斎行（十一月十六日） 美須々宮と改称（八月四日） 長野縣護國神社と復称（四月六日） 社殿屋根銅板葺替、美須々会館新築竣工（五月七日） 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十一月六日） 皇太子同妃両殿下御参拝（三月二十六日） 斎館・社務所の屋根銅板葺替竣工（五月一日） 天皇皇后両陛下御親拝（五月十四日） 皇太子同妃両殿下御参拝（一月二十四日） 皇太子同妃両殿下御参拝（八月二日） 御鎮座四十周年記念 御社殿並境内整備、美須々会館新館竣工（五月二十四日）	御鎮座五十周年記念 美須々会館旧館建替竣工（五月二十八日） 社務所新築、参道敷石工事他境内諸整備事業 社殿屋根及瑞垣等銅板葺替工事

新潟県

新潟縣護國神社

鎮座地 新潟市中央区西船見町五九三・一三〇〇
電話 〇二五（二二九）四三四五
FAX 〇二五（二二九）〇五五四
HP <http://www.nigata-gokoku.or.jp/>
御祭神 七九、七二九柱
例祭 五月八日・九月八日
みたま祭 八月十四日～十六日
創建 明治元年十月二十九日



明治	昭和	平成
元年 新潟市常磐岡に招魂場を設け、戊辰の役に戦死した官軍将士四一六名の慰霊祭斎行（十月二十九日） 新潟招魂社となる（十月） 官祭新潟招魂社となり社殿建立	十四年 新潟縣護國神社と改称（七月） 内務大臣指定の新潟縣護國神社となる 社殿造営、鎮座祭斎行（五月五日） 二十年 新潟神社と改称（八月三十一日） 初のみたま祭斎行（八月十五日） 二十五 新潟縣護國神社と復称（十一月九日） 合祀概了奉告臨時大祭斎行（九月八日） 三十五 社殿屋根葺替工事竣工（六月十八日） 三十七 天皇皇后両陛下御親拝（六月七日） 三十九 新潟地震発生（六月十八日） 四十六 ときわ会館竣工（三月二十六日）	七年 御鎮座五十周年記念 大拝殿、鳥居、社務所等、境内の改修竣工（十月四日） 二十一年 天皇陛下御即位二十年、天皇皇后両陛下御成婚五十年奉納記念 御社殿 増改築竣工（八月）

富山県

富山縣護國神社

鎮座地 富山市磯部町一丁目一番
電話 〇七六（四二二）六九五七
FAX 〇七六（四二二）六九六五
HP <http://www.toyama-gokoku.jp/>
御祭神 二八、六八二柱
例大祭 春 四月二十五日
秋 十月五日
みたま祭 八月一日
創建 大正二年十月五日



大正	昭和	平成
二年 富山縣會に於て、富山縣招魂社として創立認可される（九月二十五日） 縣知事濱田恒之助発議の下、社殿竣工（八月二十五日） 御鎮座祭（十月四日）例大祭（十月五日）	十四年 内務大臣指定の富山縣護國神社となる（四月一日） 二十年 米軍の空襲により社殿炎上（八月一日） 二十二年 富山縣鎮靈神社へ改称（四月十三日） 仮社殿造営（十月二十一日） 二十六年 富山縣鎮靈神社から富山縣護國神社へ復称（十月二十四日） 二十九 社殿復興造営（十月二十日） 正遷座祭斎行（十月二十三日） 三十三 天皇皇后両陛下御親拝（十月十九日） 三十五 合祀概了報告臨時大祭斎行（八月二十六日） 三十六 皇太子同妃両殿下御参拝（十月十七日） 五十年 富山縣鎮靈神社（現伊佐雄志神社）造営（八月一日） 五十六 終戦三十周年記念臨時奉幣大祭斎行（十月二十五日） 御創立七十周年記念新社務所竣工（十月十二日）	三年 御創立八十周年記念大拝殿竣工（十月十九日） 七年 大東亜戦争終結五十周年記念遺芳館竣工（十二月九日） 十四 御創立九十周年記念本殿大改修のため廉屋根設備施工（五月一日） 二十五年 御創立九十周年記念御旅所慰霊大祭竝に正遷座祭斎行（十月四日） 御創立百周年記念大祭斎行（十月五日）

石川県

石川護國神社

鎮座地 金沢市石引四丁目十八番一号
電話 〇七六（二二一）二二一〇
FAX 〇七六（二二一）〇五五八
HP <http://ishikawagokoku.or.jp/>
御祭神 四四、八八九柱
例祭 春 四月十九日
秋 十月十九日
みたま祭 七月十四日～十六日
創建 明治三年



明治	昭和	平成
三年 金澤藩知事前田慶寧、卯辰山に招魂社を創建（十二月十五日） 戊辰の役に戦死した加賀藩士水野徳三郎寛友をはじめ百八名の御霊を祀る 官祭招魂社となる（六月）	十年 小立野練兵場の一部である現在地に社殿造営、遷座（四月十三日） 十四年 内務大臣指定の石川護國神社となる（四月一日） 二十四 石川神社と改称（四月一日） 二十七 石川護國神社と復称（四月一日） 三十三 天皇皇后両陛下御親拝（十月二十四日） 三十五 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十月十九日） 四十三年 皇太子殿下御参拝（十月八日） 四十五年 御創立百年記念 本拝殿調度品新調、鳥居修復 五十九 御遷座五十年記念 社務所工事他	二年 御創立百二十年記念 社殿屋根葺替工事他

やがて終戦八十年を迎える、これからの時代は英霊顕彰とは何か？それは各々が英霊を思う気持ちであり、その大前提には感謝と云う理念を忘れてはならない。護國神社はご遺族だけの神社ではなく、広く日本国民全体の神社であることをもっと多くの人達に、知ってもらわなければならな

いと強く思います。

福井県

福井縣護國神社

鎮座地 福井市大宮一三三・一八
電話 〇七七六（二二）五八七二
FAX 〇七七六（二二）一〇三五
HP <http://www.fukui-gokoku.jp/>
御祭神 三一、九九三柱
例祭 春 四月十三日
秋 十一月二日
みたま祭 八月十三日～十五日
創建 昭和十六年三月二十七日



昭和	平成
十六年 内務大臣指定の福井縣護國神社となる（三月二十七日） 社殿造営、御鎮座大祭斎行（三月二十八日） 二十一年 福井御靈宮と改称（十月二十日） 二十三年 福井地方大地震（六月二十八日）と、未曾有の大洪水（七月二十五日）のため、神殿を始め諸建物全部倒壊流失、境内崩壊、地下水噴出等の被害 二十五 灯籠祭（夏みたま祭）創設（八月十二日） 二十六 本殿幣殿造営、遷座祭斎行（四月十一日） 三十四 福井縣護國神社と復称（十月一日） 三十四 拝殿及翼殿竣工（八月十二日） 三十五 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十一月一日） 三十七 天皇皇后両陛下御親拝（四月二十二日） 四十三年 皇太子同妃両殿下御参拝（九月四日） 四十五年 御英霊御遺品館「秀芳館」竣工（八月十五日） 四十七 御鎮座三十周年記念 大鳥居、玉垣建造により震災復興完了（六月四日）	十四年 御鎮座五十周年記念 社殿銅板葺替、一之鳥居改築（六月三十日） 御鎮座六十周年記念 神社会館、社務所新築 境内地の整備（十一月三日）

岐阜県

岐阜護国神社

鎮座地 岐阜市御手洗三九三番地
電話 〇五八（二六四）四三二一
FAX 〇五八（二六四）四三二六
HP <http://www.gifu-gokoku.com/>
御祭神 三七、八〇〇余柱
例祭 春 四月十二日
秋 十月五日
献灯行事 四月一日～十二日
九月二十五日～十月五日
創建 昭和十五年十一月



明治	大正	昭和	平成
四十一年	六年 七年	十五年 二十二年 二十六年 二十八年 三十五年 三十六年 三十七年 四十年 五十年	元年
岐阜市郊外（現長森地区）に歩兵第六十八連隊が大津より移管（七月） 飛行連隊の設置を見るに至り、累次の戦役事変に一身を国家に捧げられた御英霊に対し、感謝奉賛の誠を捧げるべき護国神社の無きを遺憾とした 当時の第六十八連隊は、岐阜県知事並びに市町村長又在郷軍人その他有志と共に、護国神社創建の実現を企図せるも時至らず	内務大臣指定の岐阜護国神社となる（十一月七日） 天に金華山を仰ぎ、前に長良川の清流を臨む山紫水明の地に社殿造営、鎮座の儀斎行（十一月十九日） 美濃御霊神社と改称（五月七日） 鎮座十周年記念 御霊会館竣工（十月） 岐阜護国神社と復称（三月二十日） 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十月五日） 鎮座二十周年記念 社殿屋根葺替、斎館竣工（十月） 天皇皇后両陛下御親拝（五月二十六日） 終戦二十周年記念 儀式殿、霊寶簿奉安殿他竣工（四月） 終戦三十周年記念 鎮霊社創建、靖国鳥居、神苑大八州築造（十月）	鎮座五十周年記念 社殿屋根葺替、平和祈念公園築造、参道改修他（四月）	

岐阜県

飛騨護国神社

鎮座地 高山市堀端町九〇番地
電話 〇五七七（三二）〇二七四
FAX 〇五七七（三四）八九八二
HP <http://www.hidakayama.ne.jp/gokoku/>
御祭神 六、五二五柱
例祭 春 五月三日
秋 十一月五日
みたま祭 八月十四日、十五日
創建 明治四十二年六月十六日



明治	昭和	平成
十一年 十二年 三十二年 四十二年	十四年 二十一年 三十一年 三十五年 五十五年	七年
神宮教会所が西南の役戦歿者招魂祭を斎行（九月一日） 神宮教中学院竣工 西南の役戦歿者七柱を院内祖霊社に奉斎して招魂祭斎行（四月二十一日） 神宮教が解散し神宮奉斎会設立、神殿と祖霊社は奉斎会が管理することになる 中学院講堂を譲り受け私祭飛騨招魂社を創建、靖国神社御分霊を合祀（六月十六日）	飛騨護国神社と改称（四月一日） 本殿造営、遷座祭斎行（十一月四日） 飛騨神社と改称（十月三十日） 飛騨護国神社と復称（九月三十日） 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十一月五日） 遺品館並社務所竣工（四月一日）	終戦五十周年記念 境内整備事業（五月一日）

岐阜県には当社を含め、明治二年創建の濃飛護国神社、昭和十五年創建の岐阜護国神社の三社が鎮座している。三社併存の理由は、軍人（陸軍歩兵聯隊）の配属先に関係しているとも言われている。当社は「指定外護国神社」であるが、昭和二十七年第一回浦安会（現全国護国神社会）に参加。昭和三十五年の合祀概了奉告祭斎行にあたり、全国の指定護国神社と共に当神社も御皇室より幣帛の御下賜を受け、名実ともに全国護国神社五十二社中の一つとなった。

岐阜県

濃飛護国神社

鎮座地 大垣市郭町二丁目五十五番地
電話 〇五八四（七八）四〇四八
FAX 〇五八四（七八）四〇四八
御祭神 一八、九一七柱
例祭 春 四月二十三日
秋 九月二十二日
創建 明治二年四月



明治	昭和
二年 三年 八年 十二年 二十四年 二十八年 四十三年	十四年 二十年 三十三年 三十四年 三十五年 四十年
旧大垣藩士戸田氏共、城下操練場に仮招魂祠建立 佐竹五郎をはじめ戊辰の役戦没者五十四名を祀り招魂祭斎行（八月） 城内二の丸を以て招魂場と定め、祠宇建立（八月） 官祭招魂社となる（九月） 前々年西南の役従軍戦死大垣在籍の士民天岡直香初め十二名を合祀 濃飛大震災に罹り、社殿倒壊（十月） 社殿再興 招魂社拡張改築竣工	内務大臣指定の濃飛護国神社となる（四月一日） 戦災により、本殿、拝殿、社務所共に全焼（七月二十九日） ただちに仮宮を設け、濃飛神社と改称したが、間もなく復称 本殿竣工（四月二十一日） 幣殿、拝殿竣工 合祀概了奉告臨時大祭斎行（八月二十六日） 西濃運輸株式会社社長田口利八氏大鳥居奉納（八月） 天皇皇后両陛下御親拝（十月二十六日）

静岡県

静岡縣護国神社

鎮座地 静岡市葵区柚木三六六番地
電話 〇五四（二六）〇四三五
FAX 〇五四（二六）一一一九
HP <http://shizukagokoku.jp/>
御祭神 七六、〇〇〇余柱
例祭 秋季慰霊大祭
十月二十二日～二十三日
みたま祭 八月十三日～十五日
創建 明治三十二年十一月十三日



明治	昭和	平成
三十二年	十四年 十七年 二十二年 二十八年 三十二年 三十五年 四十年 四十三年 四十八年 五十八年 六十二年	元年 十年 二十年
静岡市北番町に共祭招魂社として創建（十一月十三日） 小野田元熙知事を祭主とし、維新より台湾の役まで殉国御霊五百五十四柱を鎮祭	内務大臣指定の静岡縣護国神社となる（四月一日） 静岡市柚木の現在地に社殿造営、遷座祭斎行（十月八日） 静霊神社と改称（二月九日） 静岡縣護国神社と復称（三月五日） 天皇皇后両陛下御親拝（十月二十五日） 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十月十日） 社殿修築、遷座祭斎行（八月十二日） 明治維新百年記念 第一鳥居再建（十月十一日） 第二鳥居再建（十月十一日） 終戦三十年記念 社務所・遺品館竣工（九月七日） 終戦四十年記念 東鳥居再建（十月九日） 第一鳥居前大国旗掲揚塔奉納（四月五日）	昇殿廻廊新築 社殿全面改修 社務所及び境内一部改修

愛知県

愛知縣護國神社

鎮座地	名古屋市中区三の丸一丁目七番三号
電話	〇五二（二〇一）八〇七八
FAX	〇五一（二二一）八七九八
H P	http://www.aichi-gokoku.or.jp/
御祭神	九三、〇〇〇余柱
例祭	春 四月二十八日～三十日 秋 十月二十八日～三十日
献燈祭	八月十六日
創建	明治二年五月二日



平成	昭和	大正	明治
十四年	元年	七年	元年
御鎮座百二十年記念 御社殿御屋根替、本殿遷座祭齋行（十月二十七日） 御社殿（神門・舞殿・廻廊）増築工事竣工（四月）	現在地に社殿造営、遷座（四月九日） 内務大臣指定の愛知縣護國神社となる（四月一日） 名古屋大空襲で社殿すべてを焼失、仮宮に遷座（三月十九日） 愛知神社と改称（十二月二十九日） 愛知縣護國神社と復称（四月） 社殿復興、遷座祭齋行（十一月六日） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十月二十八日） 天皇皇后両陛下御親拝（十月二十六日）	大正天皇御即位大礼のため京都行幸の際、名古屋離宮内、賢所奉安殿下賜により、城北練兵場に社殿造営、遷座祭齋行（四月二十七日）	尾張藩下屋敷脇の練武場にて、戊辰の役戦死者の招魂祭齋行（十二月） 旌忠社として創建（五月） 尾張藩主徳川慶勝侯が、戊辰の役に戦死した藩士等二十五柱の神霊を祀った 招魂社と改称（十月十三日） 官祭招魂社となる（六月）

滋賀県

滋賀縣護國神社

鎮座地	彦根市尾末町一番五九号
電話	〇七四九（二二）〇八二一
FAX	〇七四九（二六）三三一一
H P	http://www.shigagokku.jp/
御祭神	三四、七五〇余柱
例祭	春 四月五日 秋 十月五日
みたま祭	八月十三日～十五日
創建	明治九年七月



平成	昭和	明治
三十七年	十四年	九年
御大典記念 渡廊及び受付授与所増築（十月一日） 崇敬奉賛会設立（七月）	内務大臣指定の滋賀縣護國神社となる（四月一日） 社殿の整備造営並に境内拡張工事 沙々那美神社と改称（三月七日）※ささなみは近江にかかる枕詞 滋賀縣護國神社と復称（十月十五日） 奉賛会が設立され、社殿の修復と境内整備事業実施（三月） 本殿屋根葺替（九月） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十月五日） 彦根市民会館建設により、社務所・斎館他施設を現在地へ移設（四月十九日） 皇太子同妃両陛下御参拝（九月二十七日） 天皇皇后両陛下御親拝（五月二十八日） 御創立百年記念 本殿を除く社殿屋根を檜皮葺から銅板へ葺替（四月五日） 御創立百十年記念 本殿屋根銅板葺替、遷座祭齋行（十二月二十一日）	旧彦根藩主井伊直憲公が発議し、官祭彦根招魂社創建（七月） 戊辰の役東征従軍戦死した青木貞兵衛頼実之命を始め、二十六柱の神霊を招魂

三重県

三重縣護國神社

鎮座地	津市広明町三八七
電話	〇五九（二二六）二五五九
FAX	〇五九（二二五）五五九三
H P	http://www.mie-gokoku.or.jp/
御祭神	六〇、三〇〇余柱
例祭	春 四月二十一日～二十二日 秋 十月二十一日～二十二日
みたま祭	七月二十三日～二十五日
式年みたま祭	七月二十四日
創建	明治二年



平成	昭和	明治
二十七年	十四年	二年
終戦七十年記念 参集殿、参道改修	内務大臣指定の三重縣護國神社となる（四月） 空襲で本殿、神饌所を残し建物を焼失（七月二十七日） 三重神社と改称（十二月二十六日） 三重縣護國神社と復称（十一月二日） 戦災復興御造営、遷座祭齋行（十月二十日） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十月二十一日） 終戦三十年記念 参道整備竣工（十月二十日） 天皇皇后両陛下御親拝（十月二十七日） 本殿改修社務所新築完工（三月十七日）	津藩主藤堂高猷公が津八幡宮に小祠を建て、戊辰の役で戦死した藩士の霊を祀り 表忠社と称した（十一月） 官祭に列せられる（三月） 招魂社と改称（十月） 官祭招魂社と改称（六月） 津市広明町の現在地に奉遷、遷座祭齋行（九月）

京都府

京都靈山護國神社

鎮座地	京都市東山区清閑寺靈山町一
電話	〇七五（五六一）七二二四
FAX	〇七五（五三一）〇九七一一
H P	http://www.gokoku.or.jp/
御祭神	七三、〇一一柱
例祭	春 四月二十八日 秋 十月十四日
みたま祭	八月十三～十六日
創建	明治元年五月十日



昭和	明治
十四年	元年
二十一年	十年
京都靈山護國神社と復称（九月十七日） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十一月二十七日） 第二室戸台風で本殿以下甚大なる被害（九月十六日） 御創立百周年記念 本殿以下社殿修復（十月十四日）	太政官布告第一号を以て靈山官祭招魂社創建（五月十日） 奉祀せる祭神は五四九柱であつて、古くは天誅組の首将中山忠光卿をはじめとし 梁川星巖、梅田雲浜、頼三樹三郎、月照信海、来島又兵衛、久坂玄瑞、寺島忠三郎、 入江九市、坂本龍馬、中岡慎太郎、吉村寅太郎、平野国臣、宮部鼎蔵、真木和泉 守等その功績は人のよく知るところである 銅碑建設の際に、有栖川宮幟仁親王御揮毫の題篆を御下賜

大阪護國神社

鎮座地	大阪市住之江区南加賀屋一丁目
電話	〇六（六六八二）二三七一 〇六（六六八一）二二一七
FAX	
H P	http://www.osakagokoku.or.jp/
御祭神	一〇五、六五五柱
例祭	春 五月二十日 秋 十月二十日
みたま祭	八月十四、十五日
創建	昭和十五年四月



昭和	平成
十三年 十五年 二十一年 二十七年 三十五年 三十五年 三十八年 四十五年 五十三年	二年 七年 十七年
大阪府知事が会長に就任し奉賛会を結成 内務大臣指定の大阪護國神社となる、鎮座祭齋行（五月四日） 浪速宮と改称（九月三十日） 大阪護國神社と復称（六月二十七日） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十月十九日） 本殿以下社殿の造営に着手（十一月一日） 社殿造営、遷座祭齋行（五月二十九日） 天皇皇后両陛下御親拝（七月十五日） 皇太子同妃両殿下御参拝（五月三十一日）	御大典記念御鎮座五十年記念事業完工 終戦五十年記念 本殿、拝殿等修築、大阪府忠魂碑等調査集刊行（十一月十五日） 終戦六十周年記念事業完成

兵庫縣姫路護國神社

鎮座地 姫路市本町一八
電話 ○七九(二三四)〇八九六
FAX ○七九(二三四)〇八八五
HP <http://www.himeji-gokoku.jp/>
御祭神 五六、九八八柱
例祭 春 五月二日
秋 十一月二日
みたま祭 一月一日より十日
創建 昭和十三年四月二十七日



平成	昭和	明治
二年 七 二十二年 御創建五十周年記念 本殿以下御屋根葺替等修復及境内整備（十一月五日） 終戦五十年 神社維持基金を創設（十一月二日） 創祀百十五年御鎮座七十年記念大祭齋行（十一月二日） 崇敬奉賛会設立（四月二十六日） 社報「安寧」創刊号発行（十月一日）	四十五年 三十五年 二十九年 二十一年 十四年 十三年 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十一月二十三日） 御創建三十周年記念 姫路護國会館竣工並境内整備（十一月二十三日） 兵庫縣姫路護國神社と復称（五月二十日） 白鷺宮と改称（八月二十八日） 内務大臣指定の兵庫縣姫路護國神社となる（四月一日） 姫路白鷺城の麓の現在地に招魂社造営（四月二十七日）	二十六年 兵庫縣知事周布公平祭主となり、現鎮座地付近にて招魂祭齋行

姫路城前の道路は交通量も多く町の喧騒も聞こえますが、護国神社の鳥居を一步入ると木々の緑が鮮やかに目に飛び込んでき、静寂につつまれ一瞬身が引き締まる思いになります。拝殿に向かおうと参道を進みながら日本の美しい心に触れることが出来ます。

兵庫縣神戸護國神社

鎮座地	神戸市灘区篠原北町四丁目五番一號
電話	〇七八（八八二）一七〇〇
FAX	〇七八（八六一）三〇二五
御祭神	五三、二五七柱
例祭	春 五月六日 秋 十一月六日
創建	昭和十六年六月十八日



昭和	平成
十六年	三年
二十年	七年
二十一年	八年
二十七年	二十四年
三十四年	
三十五年	
五十年	
六十三年	
内務大臣指定の兵庫縣神戸護國神社となる（六月二十五日） 神戸大空襲の為、莊嚴な社殿及び境内の建物は壊滅的な被害（六月五日） 兵庫御靈神社と改称（九月五日） 兵庫縣神戸護國神社と復称（十二月二十七日） 社殿造営に着手（三月十七日） 社殿造営、遷座祭齋行（十一月二十七日） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十一月二十五日） 御鎮座三十周年記念事業竣工奉祝祭齋行（五月六日） 境内整備事業工事竣工奉祝祭齋行（三月二日）	御鎮座五十周年記念 本殿改修竣工（五月六日） 阪神淡路大震災のため社務所半壊など被害（一月十七日） 阪神淡路大震災修復竣工奉告祭齋行（十一月六日） 鳥居再建（十一月六日）

戦死者の慰霊祭社は、神戸市兵庫区下山に招魂斎庭・祭壇を設け、毎年官民合同で斎行されてきた。やがて、英霊の勲功を顕彰する為には社殿を建立し、永久に御奉斎すべしとする県民各層の熱意で、関西学院跡地約三千坪に素木流造の神殿・諸社殿が建立された。

境内には、華と散られた英霊をお慰めする為に植樹された桜が凜として美しさを匂わせている。

奈良縣護國神社

鎮座地	奈良市古市町一九八四
電話	〇七四二(六)二四六八 〇七四二(六)三五五九
FAX	
御祭神	二九、二四五柱
例祭	春 四月十五日 秋 十月二十二日
創建	昭和十七年十月二十二日



平成	昭和	明治
六十八年	二十三年 二十七年 三十五年 五十三年 五十五年 六十二年	初年
奈良縣護國神社維持會発足 御創建五十周年記念 御造営奉賛会事業完成（四月十五日）	奈良縣護國神社と改称（十二月十日） 高圓田神社と復称（七月二十三日） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十月二十七日） 高円ノ杜をまもる会設立（十二月） 永代祭祀神楽講設立（一月） 境内整備建物修復工事完工奉告祭齋行（七月十五日）	奈良県知事が祭主となり、春日神社をはじめ県下の代表神職が奉仕して、春秋二季、奈良公園にて国事殉難の士の招魂慰霊祭祭齋行

境内には御霊を托慰めするため、約壱千種、壱萬本の椿が植樹されている。三月中頃より見頃となり、例年この時季高円の杜に春を告げる神事として椿まつりが執り行われている。

和歌山県

和歌山縣護國神社

鎮座地	和歌山市一番丁三番地
電話	〇七三(四二五)二九一二
FAX	〇七三(四二五)二九一二
御祭神	三六、六七一柱
例祭	春 五月五日 秋 十月五日
創建	昭和十二年六月十一日



平成	昭和	明治
四十年	十四年 二十年 二十二年 三十五年 三十七年 四十六年 四十九年 六十二年 六十三年	十三年 二十九年
社殿復興、遷座祭齋行（一月二十二日）	第一回招魂祭齋行（九月二十四日） 以来、年一回天妃山（和歌山市岡公園内）で明治二十八年まで続けられた 和歌山県尚武会主催の下に、和歌山県知事が祭主となり、和歌山城内砂ノ丸にて毎年五月四、五日の両日、臨時祭壇を設けて神式並びに佛式により招魂祭が執行 和歌山県招魂社建設期成会発足 即位大礼挙行の際の京都御所内の建物の一部を下賜され、現在地に招魂社造営（六月十一日） 内務大臣指定の和歌山縣護國神社となる（四月一日） 和歌山市大空襲により社務所が焼失したが、社殿は災禍を免れた（七月九日） 社務所建設、元の地に木造平家一棟十三坪 合祀概々奉告臨時大祭齋行（十一月四日） 天皇皇后両陛下御親拝（五月二十四日） 皇太子同妃両殿下御参拝（九月五日） 昭和二十二年建設の社務所を、老朽化に伴い撤去 不審火により社殿全焼（十一月十七日） 再建奉賛会発足、募財開始（五月）	

鳥取県

鳥取縣護國神社

鎮座地	鳥取市浜坂一三一・一五三
電話	〇八五七（二二）四四二八
FAX	〇八五七（二三）四四二八
御祭神	二二、四七八柱
例祭	春 四月二十二日 秋 九月二十二日
創建	明治元年十一月二日



明治	昭和	平成
元年 三年 五年 八年 十二年 三十年	十四年 二十一年 二十二年 二十七年 三十年 三十五年 四十年 四十九年	十六年
鳥取藩主池田慶徳は、古海操練場（現在の千代橋東詰付近の千代川河原）に祠を 飯設し、戊辰戦争に従軍して戦死した鳥取藩士を祭る（十一月十二日） およそ一年半ぶりに浜坂村代々山（現在の浜坂小学校）で招魂祭斎行（五月三日） 政庁から招魂祭は池田家が行うよう申し渡される 鳥取招魂社と称する 招魂祭は池田家より鳥取県に移管される 西町（現在の鳥取地方検察庁）に遷座（十一月二日） 上町の大雲院跡に移転（十一月三日） 拡張充実のため県社標給神社附属地を選定し、移転遷座祭斎行（十一月十三日）	内務大臣指定の鳥取縣護國神社となる（四月一日） 因伯神社と改称（九月三十日） 寺町出火の飛び火により社殿焼失（四月二日） 鳥取縣護國神社と復称（六月十九日） 伊勢神宮別宮倭姫宮殿舎を下賜され、社殿造営、遷座祭斎行（五月二日） 合祀概し奉告臨時大祭斎行（九月二十二日） 天皇皇后両陛下御親拝（五月十三日） 鳥取大砂丘を見はるかす景勝地に移転、遷座祭斎行（五月四日）	浜坂移転三十周年記念 社殿屋根葺替以下整備（九月）

島根県

濱田護國神社

鎮座地	松江市殿町一番地一五
電話	〇八五二(二二)二四五四
FAX	〇八五二(二二)二四六〇
御祭神	二二、九二八柱
例祭	十月二十三日
創建	昭和十四年三月十三日



平成	昭和
十一年 十七年	十一年 十二年 十四年 二十一年 二十八年 三十五年 四十年 六十三年
境内整備（駐車場）事業竣工（九月二十一日） 終戦六十周年記念 本殿遷座奉祝祭斎行（三月十九日）	島根県招魂社建設奉賛会結成 松江市殿町城山の現在地に招魂社建設決定（六月十二日） 敷地整理工事起工（十二月七日） 造営工事着手（十一月二十四日） 社殿造営、鎮座祭斎行（三月十三日） 明治維新以後支那事変に至る戦死病死者二、三一二柱を祀る 内務大臣指定の松江護國神社となる（四月一日） 島根神社と改称（十二月九日） 松江護國神社と復称（十二月十六日） 合祀概り奉告臨時大祭斎行（十月二十三日） 天皇皇后両陛下御親拝（五月十日） 社務所、参集殿竣工（八月三十日） 御鎮座五十年大祭斎行（十月二十三日）

島根県

濱田護國神社

鎮座地	浜田市殿町一三二〇
電話	〇八五五(二三)〇六七四
FAX	〇八五五(二三)七九一六
H P	http://hamada-gokoku.jp/
御祭神	二二〇〇柱
例祭	四月十二日
みたま祭	八月十三日～十六日
創建	昭和十三年十一月十二日



平成	昭和	大正	明治
三十七年 二十年	十一年 十三年 十四年 二十一年 二十八年 三十五年 三十八年 四十四年 六十二年 六十三年	十年	三十一年 三十九年
翼殿建設、石灯籠建立（三月二十日） 終戦六十周年臨時慰霊大祭斎行（八月十五日） 御鎮座七十年式年慰霊大祭斎行（四月十二日）	招魂社造営工事起工（六月） 浜田城址に社殿造営、鎮座祭斎行（十一月十二日） 内務大臣指定の濱田護國神社となる 御祭神一九、六五〇柱を祀る（四月一日） 龜山神社と改称（七月三十日） 濱田護國神社と復称（十二月九日） 合祀概了奉告臨時大祭斎行（八月二十六日） 献灯祭始まる（八月十五日） 参拝者休憩所竣工（三月七日） 参道並境内整備（十二月二十一日） 御鎮座五十年式年慰霊大祭斎行（四月十二日） 山陰豪雨にて参道決壊（七月二十二日）	島根県招魂社建設奉賛会発足（十月六日）	歩兵第二十一連隊が広島より濱田へ移駐 連隊移駐以来招魂祭が斎行されていた（七月） 春秋二回国事殉難者の招魂祭斎行

岡山県

岡山縣護國神社

鎮座地 岡山市中区奥市三二一
電話 〇八六（二七二）三〇一七
FAX 〇八六（二七二）三〇一六
HP <http://okayama-gokoku.jp/>
御祭神 五十六、七十二柱
例祭 春 五月六日
秋 十月六日
みたま祭 八月十五日・十六日
創建 明治二年四月三日



明治	大正	昭和	平成
二年 七年 十三年 十六年	四年	十四年 十七年 二十一年 二十七年 三十五年 三十六年 三十七年 五十二年	三年 二十二年
備前藩主池田章政公が御後園（後楽園）裏竹田河原に於いて、戊辰の役戦死者太田万治正順命をはじめ三四柱の招魂祭斎行（四月三日） 門田幣立山に社殿と碑石建立（六月） 官祭招魂社となる（三月） 社殿改築竣工 社殿を北方高地に移転（七月）	現在地岡山市奥市公園内に移転遷座（四月二十八日）	内務大臣指定の岡山縣護國神社となる（四月一日） 本殿以下諸施設竣工、遷座祭斎行（五月二十五日） 操山神社と改称（十一月二十九日） 岡山縣護國神社と復称（七月四日） 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十月六日） 本殿屋根銅板葺替竣工（八月二十五日） 天皇皇后両陛下御親拝（十月二十三日） 皇太子同妃両殿下浩宮殿下御参拝（八月一日）	平成御大典記念事業竣工奉告祭執行（十月三十日） 御創立百四十年記念「いさお会館」等竣工（四月二十六日）

広島県

備後護國神社

鎮座地 福山市丸之内一丁目九一
電話 〇八四（九二二）一一八〇
FAX 〇五〇（七五四七）九〇七七
御祭神 三一、四五〇柱
大彦命、武沼河別命、豊韓別命
阿部家中興の祖従五位下伊豫守正勝公を始め代々の祖霊
例祭 十月二十三日
みたま祭 八月七日・八日
創建 明治元年五月



明治	昭和
元年 二十六年 三十四年	十四年 二十年 占領下 三十二年 三十五年 四十三年 六十二年
旧福山藩主阿部正桓公、防長の役石見益田の戦及び渡島國（北海道）函館の戦に戦死した四十柱の英霊を深津郡入会の地に「新宮」称して祀る 福山公園地（現福山城跡）に移転 官祭福山招魂社と改称する	広島県には特に二社を認定し旧備後國三市八郡を祭神合祀範圍として内務省令により福山護國神社と改称する（四月一日） 新たに福山市沖野上町に二万坪の神域・荘厳な神殿を造営し、完成間近八月八日の空襲により焼失 遷座叶わぬまま福山城跡にて備後神社と改称し祀る 福山城の北、隣接する松山に鎮座する旧福山藩主阿部家の遠祖である第八代孝元天皇第一皇子大彦命及び御子、武沼河別命、豊韓別命三柱を主神とし阿部家の祖霊を奉斎する阿部神社と合併し備後護國神社と改称し現在に至る 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十月二十三日） 御鎮座百年祭斎行（十月二十三日） 御在位六十年記念 本殿、幣殿、拝殿銅板葺替（九月一日）

広島県

廣島護國神社

鎮座地 広島市中区基町二番三号
電話 〇八二（二二一）五五九〇
FAX 〇八二（二二三）八八三〇
HP <http://www.h-gokoku.or.jp/>
御祭神 九二、六六八柱
例祭 春 四月第二日曜日
秋 十月第三日曜日もしくは第四日曜日
みたま祭 五月下旬頃
創建 明治元年十二月二十二日



明治	昭和	平成
元年 八年 三十四年	九年 十四年 二十年 二十二年 三十一年 三十五年 四十六年 五十三年	五年 二十一年
芸州藩主浅野長訓は、二葉の里に水草霊社創建（十二月） 戊辰の役において陣歿された高間省三命以下七十八柱の御霊を祀った 官祭招魂社となる 官祭広島招魂社と改称	西練兵場（旧市民球場の辺り）に新社殿造営、遷座祭斎行（十一月六日） 内務大臣指定の広島護國神社となる（四月一日） 至近距離上空で炸裂した原子爆弾の災禍により社殿悉く焼失（八月六日） 廃墟より御霊代を厳島神社へ奉還（八月九日） 廣島神社と改称（八月四日） 旧社地に仮社殿建造、御霊代奉還（八月五日） 現在地に新社殿造営、遷座祭斎行（十一月二十三日） 廣島護國神社と復称（九月二十八日） 昭和天皇香淳皇后御親拝（四月十六日） 皇太子同妃両殿下（現天皇皇后両陛下）御参拝（七月二十四日）	御大典記念 本殿・幣殿・拝殿改築、鳥居参道の改修等（四月二十二日） 御創建百三十年記念事業としての悠久殿・儀式殿・神楽殿・社務所等参改築工事竣工（六月）

山口県

山口縣護國神社

鎮座地 山口市平野二丁目一一
電話 〇八三（九二二）二〇二七
FAX 〇八三（九四一）五一七一
HP <http://yanaguchi-gokoku.jp/>
御祭神 五二、一一八柱
例祭 春 四月二十九日
秋 十一月 三日
みたま祭 八月八日
創建 昭和十六年十一月二十七日



明治	昭和	平成
三十六年	十四年 十六年 二十二年 二十七年 三十五年	三年
日清戦争以降、山口県出身の殉国の英霊を慰霊するため、防長靖献会を設立して、現在地の南に隣接する桜畠練兵場で盛大な招魂祭を斎行	県内一円を崇敬者区域とする招魂社を創建することとなり、社殿の造営に着手 現社殿造営（八月） 内務大臣指定の山口縣護國神社となる（十月九日） 鎮座祭齋行（十一月二十七日） 御霊神社と改称（三月三十一日） 山口縣護國神社と復称（八月八日） 拝殿、幣殿、翼廊の松皮葺替（四月） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十一月三日） 本殿屋根葺替（四月十三日） 本殿、透塀、手水舎他屋根葺替（五月）	御鎮座五十年式年祭齋行（十一月三日）

徳島県

徳島縣護國神社

鎮座地 徳島市雄賀町東開二二一
電話 〇八八（六六九）三〇九〇
FAX 〇八八（六六九）三〇九〇
HP <http://gokoku-jinja.jp/>
御祭神 三四、三六八柱
例祭 十一月二日
みたま祭 八月初旬
創建 昭和十三年十一月二十九日



明治	昭和	平成
十二年 三十九年	徳島市眉山公園（現神武天皇銅像場所）に招魂碑建立（九月） 徳島中央公園徳島城跡地（城山山頂）に移転遷座（四月）	十二年 十三年 十四年 二十年 三十三年 三十五年 五十二年 六十三年
徳島市雄賀町在住の篤志家より護国神社移転用地の寄進を受ける（六月） 当地は徳島市からの借地であり、史跡文化財保護区のため自動車道等の整備開発も行えず、将来にわたる祭祀の厳修と参拝者の便宜を図るため、移転用地を模索していた 本殿・社務所参集殿新築、拝殿・手水舎・慰霊碑、境内諸施設移設等竣工（九月） 正門の大鳥居は、石造りでは四国でも最大級の規模を誇る 徳島県戦没者記念館「あしたへ」を開館（十月）		

愛媛県

愛媛縣護國神社

鎮座地 松山市御幸一丁目四七六番地
電話 〇八九（九二五）一三三三
FAX 〇八九（九二五）一三三七
HP <http://www.gokoku.org/>
御祭神 四九、七〇〇余柱
例祭 春 四月十日
秋 十月十日
みたま祭 八月十三日〜十七日
創建 明治三十二年九月十六日



明治	大正	昭和	平成
二十九年 三十二年	新立町多賀神社に移設（十月三日）	内務大臣指定の愛媛縣護國神社となる（四月一日） 現在地に社殿造営、遷座（十月） 戦災により社殿焼失（七月二十六日） 御幸神社と改称（九月三十日） 復興奉賛会を創設し、造営着手（十月一日） 愛媛縣護國神社と復称（九月八日） 社殿造営、遷座祭齋行（十月一日） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（八月十六日） 天皇皇后両陛下御親拝（四月十八日） 皇太子同妃両殿下御参拝（七月十七日） 御創立九十年御鎮座五十年記念 本殿、神門、手水舎屋根葺替他（三月一日）	七 年
終戦五十年記念 社務所、参集所、職舎竣工（十月十日）			

香川県

香川縣護國神社（讃岐宮）

鎮座地 善通寺市文京町四一五―五
電話 〇八七七（六二二）〇〇四八
FAX 〇八七七（六三二）七三八〇
御祭神 三五、八一柱
例祭 春 五月五日
秋 十一月五日
みたま祭 八月十三日〜同十五日
創建 昭和十六年四月二十五日



明治	昭和
十 年 三十二年	丸亀市にあった陸軍第十二連隊内に丸亀招魂社を建立 御祭神第一座は明治維新の折、皇宮蛤御門で戦死された、うら若き十九歳の橋友之輔命、第二座は草薙燕石命である 陸軍第十二師団長乃木希典が善通寺練兵場で初めて師団招魂祭齋行
内務大臣指定の香川縣護國神社となる（十一月七日） 生野町（文京町）の現在地に社殿造営（四月十二日） 現地へ遷座（四月二十五日） 第一回例祭（五月五日） 讃岐宮と改称（十月三十日） 県教育委員会が開国以来の先賢を奉斎していた先賢堂を高松から遷座し、境内を接する乃木神社を含めて讃岐宮と総称 警察消防招魂社（公務殉職者奉斎）を加える 香川縣護國神社合祀概了奉告臨時大祭齋行（十一月二十三日） 日本一 交通安全神社（交通守護神奉斎）を加える 社殿修復（四月二十八日） 斎館、社務所、参集殿等竣工（五月五日）	

高知県

高知縣護國神社

鎮座地 高知市吸江二二三
電話 〇八八（八八二）二七六〇
FAX 〇八八（八八二）二七六一
HP <http://www.kochikengokoku.jp/>
御祭神 四一、七四四柱
例祭 春 四月二日
秋 十一月二日
みたま祭 八月十五日
創建 明治二年三月十二日



明治	昭和	平成
八 年	官祭招魂社となる（五月三十一日）	十四年 二十一年 三十四年 三十五年 三十七年 四十四年 四十七年 五十三年
内務大臣指定の高知縣護國神社となる（四月一日） 大島岬神社と改称（六月十七日） 高知縣護國神社と復称（八月五日） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十一月二日） 維新志士百年大祭齋行（四月一日） 御創立百年記念大祭齋行 事業期成会発足（七月一日） 御創立百年記念事業終了 天皇陛下御親拝（五月二十日） 社務所改築竣工（九月三十日）		
境内社である開拓神社には、元満州開拓民殉難者二千余柱が祀られている。		

福岡県

福岡縣護国神社

鎮座地 福岡市中央区六本松一丁目一番一号
電話 〇九二（七四一）二五五五
FAX 〇九二（七五一）二七五九
HP <http://fukuoka-gokoku.jp/>
御祭神 一、二九、八三二柱
例祭 春 五月三日・四日
秋 十月第二日曜、体育の日
みたま祭 八月十三日～十六日
創建 昭和十八年四月三十日



明治	昭和	平成
元年 三十九年	福岡藩主黒田長知公をはじめ、県内の藩主等が招魂社設立 明治維新で国難に殉じた人々を顕彰するため、祭祀を行った 妙見招魂社を馬出招魂社の隣地に移し、官祭妙見馬出招魂社となる	御鎮座五十周年記念 社殿改修、戦災を免れた台湾檜の大鳥居補修、境内整備
十三年 十四年 十八年	両招魂社を合わせて官祭福岡招魂社となる 福岡護国神社と改称（四月一日） 内務大臣指定の福岡縣護國神社となる（四月二十八日） 社殿造営 鎮座祭齋行（四月三十日）	
二十年 二十四年 二十七年 三十二年 三十五年 三十八年 四十九年	戦災により御本殿以下一切の建造物を焼失（六月十九日） 正中宮と改称（一月十一日） 護國神社正中宮と改称（九月二十四日） 福岡縣護國神社と復称（五月十七日） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十月八日） 社殿再建、遷座祭齋行（五月二日） 皇太子同妃両殿下御参拝（八月二日）	

創建時に県民延べ十五万人の勤勞奉仕と三千本の献木で造成された人口の杜は、喧噪とはかけ離れた静寂の中にも清々しい雰囲気を感じ出している。

長崎県

長崎縣護国神社

鎮座地 長崎市城栄町四一番地六七号
電話 〇九五（八四四）三三二一
FAX 〇九五（八六五）六四四五
御祭神 六〇、八二二柱
例祭 春 四月二十二日
秋 十月二十六日
みたま祭 八月七日、八日
創建 明治二年十二月



明治	昭和	平成
二年 七年 八年	十四年 十七年 十九年 二十年 三十五年 三十八年 四十四年	五年
初代長崎府知事沢宣嘉、長崎市梅ヶ崎の地に社宇建立（十二月） 戊辰の役にて戦死せし、振遠隊員鬼塚麟之助等四十三柱の英霊を祀る 市内佐古の地に官祭佐古招魂社建立 台湾の役の戦没者、同役に従軍し長崎病院において戦病死せる陸軍少尉相良長賢以下五三六柱を祀る 官祭梅ヶ崎招魂社となる（五月）	それぞれ梅ヶ崎・佐古護国神社となる（三月） 両社合併 内務大臣指定の長崎縣護國神社となる（三月十日） 現在の城山の地に、本殿以下造営、遷座祭齋行（十月） 原子爆弾により本殿以下悉く焼失し灰となる（八月九日） 御霊代を岩渕神社、続いて長崎市大崎神社へ奉遷 遷座前の梅ヶ崎招魂社跡（梅ヶ崎天満宮）を仮宮として祭祀続ける 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十月二十二日） 社殿復興、遷座祭齋行（十月二十五日） 創建百年記念奉祝大祭（四月二十二日） 昭和天皇皇后両陛下御親拝（十月二十六日）	再建三十周年記念大祭齋行（十月二十六日）

佐賀県

佐賀縣護国神社

鎮座地 佐賀市川原町八番一五号
電話 〇九五二（二三）三五九三
FAX 〇九五二（二八）二八八六
御祭神 三五、六〇〇柱
例祭 春 四月十三日・十四日
秋 十月十三日～十五日
みたま祭 八月十三日～十五日
創建 明治三年三月十七日



明治	昭和
三年 八年	十一年 十四年 二十二年 二十七年 三十五年 三十六年 五十年
佐賀旧藩主鍋島直大公が招魂場創建（三月十七日） 戊辰の役の殉国藩士の七十八柱の御霊を祀る 官祭招魂社となる（四月）	社殿造営、遷座祭齋行（十月） 内務大臣指定の佐賀縣護國神社となる（四月一日） 肥前神社と改称（五月十六日） 佐賀縣護國神社と復称（七月） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（十月十三日） 天皇皇后両陛下御親拝（四月二十日） 御創建百年大祭（十月十二日） 皇太子同妃両殿下御参拝（九月十八日）

熊本県

熊本縣護国神社

鎮座地 熊本市中央区宮内三一
電話 〇九六（三五二）六三三三
FAX 〇九六（三四一）六四四一
HP <http://www.kumamoto-gokoku.jp>
御祭神 六五、〇〇〇余柱
例祭 春 四月一日
秋 十月十日
みたま祭 八月十四日
創建 明治二年二月



明治	昭和
二年 七年	十四年 十九年 二十八年 三十一年 三十二年 三十五年 三十七年 四十五年 四十八年
肥後藩主細川韶邦公、細川護久公が花岡山に祀宇建立（二月） 幕末殉難の土宮部鼎蔵命をはじめ一五〇柱を祀り、花岡山招魂社と称す 官祭招魂社となる（三月） 日露戦争後は毎年藤崎台招魂祭場（現護国神社鎮座地）にて、官民一体の盛大な招魂祭齋行	内務大臣指定の熊本縣護國神社となる（四月一日） 熊本市黒髪町立田山麓に、新社殿造営着工（三月五日） 時に大東亜戦争戦況緊迫し進捗せず、終戦により中止 現在地（藤崎台招魂祭場跡）に造営敷地変更（五月十日） 造営着工（十月） 社殿、社務所、手水舎、鳥居、社号標竣工（四月） 御鎮座大祭齋行（五月十日） 合祀概了奉告臨時大祭齋行（八月十五日） 天皇皇后両陛下御親拝（十月二十四日） 皇太子同妃両殿下御参拝（五月十二日） 熊本縣護國神社崇敬会創立（七月十七日） 熊本県英霊顕彰館（遺品館）落成（十月二十九日）

大分県

大分縣護國神社

鎮座地 大分市大字牧一三七一番地
電話 ○九七（五五八）三〇九六
F A X ○九七（五五八）三〇九八
H P <http://www.oita-gokoku.jp/>
御祭神 四四、四五六柱
例祭 春 四月九日
秋 十月九日
みたま祭 八月十三日～十五日
創建 明治八年十月十八日



明治	昭和
八年	八年
大分県初代県令森下景瑞により、松栄山の地に招魂社創建（十月十八日） 佐賀の乱で戦死した大山昌など十四柱、台湾出兵で戦病死した井上某など三柱、 明治維新の際、蛤御門の戦いで戦死した若杉直綱など五柱の英霊を祀る 招魂社は現在の展望台、招魂斎庭の位置にあった	社殿大修繕竣工、遷座祭斎行（八月八日） 大分縣招魂社と改称（十月） 内務大臣指定の大分縣護國神社となる（四月一日） 現社殿大造営、遷座祭斎行（十月二十八日） 豊靈宮と改称（五月九日） 大分縣護國神社と復称（九月二十日） 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十月九日） 天皇皇后両陛下御親拝（十月二十二日） 本殿屋根葺替工事竣工（六月十日） 拝殿以下社殿屋根銅板葺替工事竣工（四月九日） 皇太子同妃両殿下御参拝（九月二十六日） 神門、社務所、照今殿竣工（四月九日）

鹿児島県

鹿児島縣護國神社

鎮座地 鹿児島市草牟田二丁目六〇番七号
電話 ○九九（二二六）七〇三〇
F A X ○九九（二二七）五五九一
H P <http://www.k-gokoku.or.jp>
御祭神 七七、六〇六柱
例祭 春 四月十三日
秋 十月十三日
みたま祭 七月三十一日～八月一日
創建 明治元年七月



明治	大正	昭和	平成
元年	六年	十四年	三十三年
明治天皇の思召しにより、五百両下賜され、薩摩藩主島津忠義、鹿児島郡山之口馬場に社殿創建し、藩主自ら戊辰の役の戦死者を祀り、靖献霊社と称す 城山の麓（鹿児島市照国町）に新社殿造営、遷座祭斎行（十月二十六日） 官祭鹿児島招魂社となる（六月） 西南の役により社殿焼失 社殿改築	社殿再築	内務大臣指定の鹿児島縣護國神社となる（四月一日） 薩隅領徳神社に改称（五月） 戦後中断の工事を再開し社殿造営（十月）、遷座祭斎行（十一月十三日） 鹿児島縣護國神社と復称（十二月二十四日） 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十一月十二日） 皇太子同妃両殿下御参拝（五月十日） 御創建百年記念大祭斎行（十一月十六日） 天皇皇后両陛下御親拝（十月二十一日）	御創建百二十五周年記念 社殿改修（五月九日） 御創建百三十周年記念 参集殿兼社務所新築工事着工（十一月）

宮崎県

宮崎縣護國神社

鎮座地 宮崎市神宮二丁目四一三
電話 ○九八五（二五）二七一九
F A X ○九八五（二五）二七一九
H P <http://miyazaki-gokoku.jp/>
御祭神 四一、八七四柱
例祭 四月十日
みたま祭 八月十四日
創建 昭和三十年三月十日



昭和	平成
十八年	二十二年
宮崎市下北方の高台に造営起工（四月二十三日） 終戦により、連合軍の占領下に建設の途上にて中止（十一月） 講和条約の発効に伴い、護國神社再建奉賛会結成（四月） 宮崎神宮境内地の現在地に造営起工（五月十五日） 社殿造営、遷座祭斎行（三月十日） 合祀概了奉告臨時大祭斎行（十月十日） 皇太子同妃両殿下御参拝（五月二日） 宮崎神宮と一体の運営がなされていたが、独自の財源を以て運営することになる 天皇皇后両陛下御親拝（四月七日） 皇太子同妃両殿下御参拝（九月十四日） 終戦四十年記念 社務所兼授与所 遺品館竣工	御大典記念 社殿屋根銅板葺替（八月十一日） 終戦五十年記念 境内整備（十月二十六日） 終戦七十年記念 拝殿増築

都城、高鍋の諸地に招魂社が創立されていたが、宮崎県は諸般の事情により創立が遅れていた。

沖縄県

沖縄県護国神社

鎮座地 那覇市奥武山町四四番地
電話 ○九八（八五七）二七九八
F A X ○九八（八五七）七九一七
H P <http://www.okinawa-gokoku.jp/>
御祭神 一七七、九一二柱
例祭 春 四月二十三日
秋 十月二十三日
みたま祭 八月十五日 ※献灯は正月
創建 昭和十一年十二月



昭和	平成
十四年	二十七年
沖縄県護国神社と改称 内務大臣指定の沖縄県護国神社となる（七月一日） 皇紀二千六百年記念事業 社殿・施設拡充計画 本殿造営、同時に拝殿、神饌所等建立（九月） 沖縄戦により戦災を被り、本殿、拝殿、社務所他一部施設のみを残す状態となる その後境内地は学校用地として一時供用される 仮社殿建立（四月二十五日） 沖縄県出身戦没者を合祀し、戦後第一回春季例大祭を斎行（四月二十六日） 各都道府県出身沖縄戦戦没者を合祀し戦後第一回秋季例大祭を斎行（十一月十五日） 社団法人沖縄県護国神社復興期成会結成（二月十四日） 本殿、拝殿竣工（十月三十一日） 遷座祭斎行（十一月十九日） 第三鳥居建立（四月十九日） 祖国復帰奉告慰霊大祭斎行（五月十四日） 沖縄県知事より宗教法人沖縄県護国神社として認可される（十二月十八日） 第一鳥居大修復工事完工（十二月二十三日）	御創建七十五年記念事業完工奉祝祭典斎行 ※新社務所、大手水舎竣工（四月二十三日） 終戦七十年記念事業完工（十月）

みたままつり

全国各地の護国神社では、御遺族・戦友をはじめ、多くの崇敬者から献納いただいた「みあかし（献灯）」が境内いっばいに掲げられます。国の為に尊い命を捧げられた御英霊を偲び、感謝の誠を捧げお慰め申し上げます。



広島護国神社



福岡縣護国神社



兵庫縣姫路護国神社



静岡縣護国神社



石川護国神社



宮崎縣護国神社



愛媛縣護国神社



徳島縣護国神社



大分縣護国神社



岡山縣護国神社



福井縣護国神社



沖縄縣護国神社



京都豐山護国神社



愛知縣護国神社



東京都靖國神社



ペリリュー島よりアンガウル島遙拝

大東亜戦争終結七十年記念事業

パラオ

帛琉共和国戦歿者慰霊祭

期 日 平成二十七年六月二十四日～二十七日
主 催 神道青年全国協議会
場 所 パラオ共和国・コロール島 南洋神社

趣 旨

「サクラサクラ」。パラオ諸島の守備隊の将兵であり、第二連隊長中川州男大佐が昭和十九年十一月二十四日午後四時に司令部宛てに連送した最期の電報である。大東亜戦争半ば頃よりパラオは、フィリピン攻略の為の要所奪取を目指す米軍と、本土への攻略を一日でも遅らせるべく持久戦に持ち込む日本軍との七十三日間に亘る激戦の地であった。その戦闘の中、軍旗も機密書類も焼却したことを意味する最期の電文「サクラサクラ」が打電された。これは、ペリリュー島守備隊全員が桜花のごとく散ったことを意味するものである。

現代を生きるどのくらの国民がこのことを知ってゐるだらうか。我々が日々平穏な暮らしを営むことができるのは、先人達の遺烈に依ることに気付いてゐるだらうか。何時しか我々は先人への感謝を忘れる程、豊かさで恒久的な平和を手にしたとも言へるだらう。七十年前のこの死闘があつての我々の命であることを忘れてはならない。

本年は、大東亜戦争終結七十年を迎へる。この七十年といふ年月に依り、当事者も高齢となり、当時の苦勞を知る術が少なくなつてゐる。中今の役割を担つてゐる我々は先人の想ひをどのやうに後世に伝えてゆくべきかを考へなければならぬ。パラオを訪れ「サクラサクラ」に込められた祖国と家族への想ひを感じ、これからの日本、そして世界の安寧を祈ると共に、玉碎した御霊を慰め、御霊の願ひ

が無駄にならぬやう、我々が伝達者となる機会となることを願ふ。そして後に、英霊に対し感謝の誠を捧げる国民の祈りに繋がることを願ふものである。



南洋神社(旧官幣大社)

鎮座地 コロール島アルミズ高地
御祭神 天照大御神



現在の社殿

由 緒

一九三二年の南洋庁統治が始まってから十五年以上が経過し、南洋群島各地に民間有志による神社が創建されたが、南洋庁所在地のコロール島には神社が一つもなかった。そこで南洋庁では、南洋群島総鎮守たる神社を紀元二千六百年記念事業の一環としてコロール島に創建することとなった。

一九三七年(昭和十二年)より、土地の選定が進められ、その結果コロール町郊外のアルミズ高地に創建することに決定した。一九三八年(昭和十三年)一月より約二年かけて工事が行われた。

本殿は神明造・大鳥造を基調とする南洋群島の風土に適した様式とし、木材は南洋群島各地から取り寄せることになった。石材は幸いにも整地の際に良質な安山岩が大量に見つかったため、これを使うことになった。また、関係諸団体から勤勞奉仕の申し出が相次ぎ、積極的に受け入れた。

一九四〇年(昭和十五年)二月に天照大御神を祀る官幣大社として指定され、同年十一月一日、御霊代を捧げ持つ勅使伊藤博精公爵を迎えて、肅々と鎮座祭が執りおこなわれた。



(写真提供 小戸神社)



パラオ共和国 戦歿者慰霊祭に参加して

御年神社禰宜 黒木 興輔

去る平成二十七年六月二十四日から二十七日 三泊四日の日程でパラオ共和国戦歿者慰霊祭に参加した。

本事業には全国単位会から四十五名と神青協顧問三名が参加した。その内宮崎県からは長友相談役（神青協会長）、串間祥亮相談役（神青協総務局長）、串間慶士会長、黒木興輔局長の四名が参加した。

パラオ共和国は日本から南へ約三千キロに位置し時差は無い。日本からの渡航方法は直行便またはグアム経由やソウル経由があり、今回はグアム経由の航路であった。

宮崎からの参加者は二十三日に中部国際空港周辺に前泊して他参加者と合流することとなった。二十四日の朝、日本を発ち、経由地のグアムにて参加者全員が一度集まり結団式を開催した。乗り継ぎに時間が掛かることもあり、パラオ共和国へ着いたのは夜となり夜暗の中の入国となった。

パラオ共和国における歴史について少し触れておく。有史以前は未解明なことも多いそうだが、周辺の島々含め多民族が各々独自の文化で原始的生活を営んでいたという。十六世紀頃から一八九九年までスペインの植民地となり、その後ドイツの植民地を経て、第一次世界大戦後の一九二〇年には国連から委任され日本統治領となった。植民地時代には資源採取として原料産業しか行われなかったが、日本統治時代になると日本は南洋諸島を管轄とする南洋庁をパラオに設置し。教育やインフラの整備により、近代的発展を促進した。

太平洋戦争が始まると、北西太平洋方面の作戦拠点となりパラオにおいて激しい戦闘も行われた。特にペリリュー島は最後の激戦区となった。二か月半におよぶ戦



闘の中で、およそ一万人の部隊が玉砕し今もなおその遺骨が埋もれている。この時、日本兵は島の民間人は疎開させ、島民はじめ日本と家族を守るために決死の覚悟で島に残ったそうである。

戦争終結後には米の信託統治となるが、共和国として独立のための交渉を重ね一九九三年にパラオ共和国として独立した。

二十五日は南洋神社にて先に述べた英霊の慰霊祭である。パラオは雨期ということで、この日も朝からスコールのような雨が降ったり止んだりを繰り返していた。南洋神社に着くとすぐに準備に取り掛かった。祭典奉仕者は斎主はじめ祭員十五名、伶人六名である。当会串間慶士会長は伶人として、串間祥亮相談役は祭員として奉仕し、慰霊祭は滞りなく納められた。

二十六日は滞在しているコロール島から船で一時間半ほど掛けてペリリュー島へ向かった。ペリリュー島に上陸後、会員皆白衣白袴に着替えて、ペリリュー神社、西太平洋戦歿者の碑をはじめ島内に残る慰霊碑の前にて祈りを捧げた。ペリリュー島には戦争当時の歴史を示す戦車や滑走路、日本軍司令部跡なども多く残されていた。

先にも記したが、ペリリュー島始めこのパラオの地においても多くの日本軍が戦死している。彼らは日本の家族そして日本の未来のために命が尽きるまで戦い抜いた。祖国のために必死の覚悟を貫いた英霊に対する感謝と崇敬の念を、現代に生きる我々は決して忘れてはいけない。本事業に参加し、直接現地にて慰霊を行うことで、僅かであるかもしれないが、英霊の想いを感じ受けることができた。戦争から長い月日が流れた現代において、我々青年神職は英霊顕彰について改めてその意義を感じ伝えなければならないと感じた。

これから未来も英霊の想いを忘れることなく慰霊と顕彰を伝えていけるよう、この貴重な経験を是非次代を担う若い会員達に、また子供たちに伝えていきたいと思います。

英霊顕彰事業

台湾出身 戦歿者慰霊祭

期日 平成二十三年二月二十二日～二十四日

主催 神道青年九州地区協議会

場所 台湾 桃園神社

参加者（宮崎県） 長友安隆会長 中原慎太郎 佐藤貞和
野迫武士 串間慶士 黒木興輔 出光弘忠



趣旨

先の大東亜戦争に於いて約二十万の台湾人が日本軍人・軍属として出征し、その内約三万人が戦死または戦病死してある。そして、二七、八六四柱の御霊が御祭神として靖國神社に祀られてある。また、台湾には、台湾神社を始めとして戦前まで約六十八社の海外神社が鎮座してゐた。戦後、国民党政府が入植しその多くが取り壊され、跡地には忠烈祠や廟が建てられる事になった。その様な中、桃園神社は現地住民や学識者の熱烈な要望により奇跡的にその姿をほとんど変へる事無く保存され、昭和二十五年に桃園縣忠烈祠に改名され、平成六年には三級古跡に認定され永くその姿を留める事となった。今度は、台湾に近接する沖縄を有す九州地区として、海外神社では唯一完全な形で残された旧桃園神社跡にて、謹んで台湾出身戦歿者の御霊安からん事を祈念し、顕彰を為すものである。

桃園神社（旧県社）

鎮座地 台湾新竹州桃園郡桃園街大樟溪
創建 一九三八年（昭和十三年）九月二十三日
御祭神 北白川宮能久親王 大國魂命 大己貴命
少彦名命 豊受大神 明治天皇





平成27年度総会



平成28年度総会

宮崎県神道青年会とは

先の大東亜戦争終結後、神社界は特に占領軍による神道指令を受け、未曾有の外圧による改革を迫られた。占領下の昭和二十一年宗教法人令により神社界は私的宗教法人として再発足させられ、他宗教と同様の扱いにより、存続を許されるに至ったのである。

この前途多難な時、昭和二十三年全国の青年神道人の間に互いに提携して道を開かんと気運が高まり、翌二十四年六月十六日に全国の組織「神道青年全国協議会」が発足したことにより、機を一にして宮崎県も神道青年会を組織した。宮崎県青壮年神職会「阿波岐会」が結成されていたので、これを発展的に解散して新しく『宮崎県神道青年会』と再編して、神道青年全国協議会に加盟した。

創立以来、先輩諸賢は日本民族の精神とも云うべき「明き清きまことの心」を以て、日々の生活に家族の繋がりを育み和を尊んで神社を中心とする地域社会を構築し、そして寝る間を惜しんで同志と共に全国に先駆ける重大事業を展開されてきた。

当会は間もなく創立七十年を迎える。会員一同、本会創立の趣旨を今一度見つめ直し、「我々は何故に集っているのか」、「我々は今何をすべきなのか」と自問し、共に学び、共に笑い、共に泣き、共に支え合い、心を一にして、ひたすらに、ただひたすらに実践に努めて参りたい。

宮崎県神道青年会会員

(平成二十七年四月二日現在)

●三役

会長 串間 慶士 宮崎神宮権禰宜
副会長 永友 郁央 平田神社禰宜
副会長 佐師 正教 田ノ上八幡神社禰宜
副会長 佐藤 永周 天岩戸神社禰宜
監事 下東 嘉也 白鳥神社禰宜
監事 黒木 英彦 八幡神社禰宜

●相談役

長友 安隆 青島神社宮司
串間 祥亮 小戸神社禰宜

●事務局

局長 黒木 興輔 御年神社禰宜
次長 佐師 慶保 鶴戸神社禰宜
局長 出光 弘忠 宮崎神宮権禰宜

●地区常任委員

宮崎 鳥原 浩之 宮崎八幡宮権禰宜
都城 尾上祐一郎 熊野神社権禰宜
南那珂 森山 幸男 萩之嶺神社禰宜
児湯 藤田 哲平 上三財神社禰宜
県北 河野 吉明 門川神社禰宜

●支部常任委員

宮崎市 生井 康寛 青島神社権禰宜
都城市 尾上祐一郎 熊野神社権禰宜
西諸県 永井 里佳 愛宕神社禰宜
南那珂 佐師 慶保 鶴戸神宮権禰宜
東児湯 黒木 寛貴 都農神社権禰宜
西児湯 濱砂 尚孝 住吉神社禰宜
延岡 河野 吉明 門川神社禰宜
東臼杵 尾前久一郎 尾前神社禰宜
西臼杵 新名 俊二 高千穂神社禰宜

●宮崎市

馬乗園貴稔 宮崎神宮権禰宜
緒方 啓吾 宮崎神宮権禰宜
本部 怜 宮崎神宮権禰宜
金丸 孝史 宮崎県護国神社権禰宜
川村 祐介 宮崎八幡宮権禰宜
佐藤 豊 宮崎八幡宮権禰宜
塩満 太佑 青島神社出仕
金丸 扇子 青島神社出仕
金丸 可弥 住吉神社権禰宜
河野 克武 野島神社権禰宜
日高信一郎 八幡神社権禰宜
長友 孝太 倉岡神社権禰宜
長友 由美 倉岡神社権禰宜
松浦龍次郎 浮田神社禰宜
宮田 義久 田野天建神社権禰宜
川越 達郎 今泉神社禰宜
宮永 正吉 日吉神社禰宜
黒木 裕明 深年神社宮司
黒木幸之助 赤池神社禰宜
田端龍千代 穆佐神社権禰宜

●都城

中武 慶宏 神柱宮出仕
落合 三博 神柱宮出仕
紺谷由美佳 南方神社権禰宜
稲丸 善人 山田神社禰宜

●西諸県

小多田将志 狹野神社権禰宜
町浦 俊紀 霧島東神社権禰宜
楡田 美浩 霧島東神社権禰宜
濱砂 明大 霧島東神社権禰宜

●南那珂

磯野 英志 鶴戸神宮権禰宜
安藤祐一郎 鶴戸神宮権禰宜
日高 啓貴 吾平津神社禰宜
上村 広樹 榎原神社禰宜
野迫 武士 中村神社宮司
本石 暖迪 中村神社権禰宜
日高 博史 伊比井神社禰宜

谷口 正樹 串間神社禰宜
河野 保彦 本城神社宮司

●東児湯

黒木久美子 都農神社権禰宜
廣田 翔司 都農神社権禰宜
神田 徳智 比木神社権禰宜
永友 敬央 平田神社権禰宜
鳥原 文子 立花神社権禰宜
宇都宮正英 水沼神社権禰宜

●西児湯

沼口 宗史 羽黒神社禰宜
長友 文彦 霧島神社権禰宜
富田 宗賢 都萬神社権禰宜

●延岡

木村美恵子 春日神社権禰宜
古賀 勇人 春日神社権禰宜
甲斐 俊輝 三川内神社禰宜
奈須 通明 尾末神社宮司
金丸 圭 三箇瀬神社宮司
齋藤 匡美 愛宕神社禰宜
壹岐 睦史 五十猛神社禰宜

●東臼杵

甲斐 宣人 桂神社禰宜
田中 甚郷 田野神社禰宜
那須 武登 十根川神社宮司

●西臼杵

坂本 辰栄 天岩戸神社権禰宜

ウェブサイト「宮巡」のご案内

平成二十四年四月、古事記編纂千三百年の佳節にあたり県内神社検索サイトを設置致しました。
我が宮崎県には神話に縁ある神社を始め、地域の守り神である「氏神様」が数多く祀られています。それぞれの神社では、永い歴史の中で氏子の皆様に支えられ地域の発展と共に歩んでまいりました。
しかしながら昨今では神社が観光スポットのような扱われ方をされ、また神社で行われているお祭りもイベントのように思われている現状を見るにつけ、本来神社の果たすべき役割および存在する意義が損なわれているようにも感じます。
氏神様の歴史を知ること、すなわち地域の歴史を知ることにもなります。また神社で行われているお祭りは、すべて地域の発展を心から祈るものでもありますので、ぜひ氏神様に御参拝戴き、神社のお祭りを通して地域の人々との絆をより深めて戴ければ幸甚に存じます。
そしてまた当会の活動や若手神職のブログ等も掲載しておりますので、どうか温かい目でご覧戴き、「神主さん」を身近に感じて戴ければ有難く存じます。

宮崎県神道青年会ウェブサイト

宮巡

検索



昭和天皇御製

身はいかになるともいくさどめけりただたふれゆく民をおもひて

終戦の詔書

